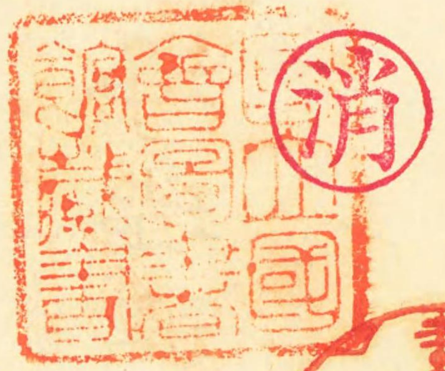
081
Y978
T
00974984

淨瑠璃名作集

上

081
Y978
T Ⅲ
(116)



數量更正

974984

緒言

享保八年竹田出雲松田和吉兩名にて、「大塔宮曦鎧」を出しょを淨瑠璃合作の初めとして、後後は五人三人、多きは六七人の手に成れるさへ珍しからず、各一場々々を受け持ち、趣向文作に奇を凝らし新を盡して相競ひしかば、場ごとに目を驚かし耳を聳つる事多く、言はば汁も膾も鯛づくめ、椀にも皿にも五種七種の馳走の數々盛り附けたる如くなれば、おのづから箸つけらるゝは仕出し勝れし一二種に止るべきわざなり。是れ抜本と稱して今も床にて語らるゝ一段物の流行を促したる主因にして、蓋し連歌の一句より發句の發達せると同日の談なるべし。

抜本卽ち一段淨瑠璃は、斯く一部ながらに全體の趣向を縮めたるが如き、充實せる內容を有するものなれども、全鼎を試みざれば猶飽かざるの憾なしとせず。本書收むる所は卽ち其の全本にして、從來世に行はるゝ語物のうち、最も著名なるもの二十一種を選擇し、之を三卷に別ちて各七篇を收めたり。

底本は何れも流布の丸本に據り、努めて原形を存するに注意したれども、假名がちに讀みにくき所々は、適宜に漢字を當て、句讀を施し、用字・送假名・假名遣等も、特色あるものの外は總て正しきに從ひて改めつ。詞には一々鉤符を附し、稀には發言者の頭字を註し置ける所もあり。由來淨瑠璃の文を讀むに難儀とする所は、多く會話相互の關係と詞章の區別分明ならざる點に在り。或は甲語中に乙言を藏し、一人にして數人に言ひかけ、數人にして一口に發し、自他尊卑の言語縱横徂徠する事電光石火の如く、或は地の中に詞を孕み、詞直ぐに地に匂ひて圓融無碍の妙を極むるさま、唯水月鏡花の別ち難きに異ならず。之れ校訂者の最も苦心を要したる所なり。

毎篇の解題を一々詳述せんも煩はしければ、左に其の年代と作者とを列記し、必要の事項のみを其條下に附言するに止むる事とはなしつ。

一苅萱桑門筑紫轢（享保二十年）　並木宗輔、同丈輔作

宇治加賀掾の正本に「刈萱道心物語」あり、關係あるべし。

宗輔通稱は松屋宗助、初め田中千柳といふ、西澤一鳳門人也。延享年中出雲松洛等と共に竹本座に筆を執り、享保以降は豐竹座に專屬し、海音出雲文耕堂と共に當時の四天王と稱せらる、寛延二年五十七歳にて歿す。

一三十三間堂平太郎緣起祇園女御九重錦（寶暦十年）　若竹笛躬、中邑阿契作

竹本座座本竹田近江驕奢の咎にて入牢せし後、一頓挫を來し、同座の人氣を、一時此作にて挽回せりと傳ふる當り作なり。

笛躬はもと若竹藤九郎といひし人形遣、阿契は初め中村閏助といへり。

一奥州安達原（寶暦十二年）　近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛作

半二は大阪の儒醫穗積以貫の子、出雲の門人、竹本座振興の功勞者なり。巢林子に私淑し、翁の愛硯を藏するに因りて近松氏を稱すといふ。晩年山科に閑居し、天明三年五十九歳にて歿す。

一武田信玄長尾謙信本朝廿四孝（明和三年）　近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、

竹本三郎兵衛作

當時竹本座の衰運を回復せんが爲、東西兩座の太夫を交換するなど、苦心慘憺の計畫も其効なかりしを、此作一たび出でて大當りを占め、四段目に引割御殿のせり上げなどを工夫して見物を喜ばせたりといふ、竹本座掉尾の傑作なり。

一（お染久松）新版歌祭文（安永九年）　近松半二作

延寶七年九月廿九日大阪東堀なる油屋の丁稚久松といふ者、主人の娘お染といへる二歳の小兒を負ひて守するうち、過つて川に落し死に至らしめたるを悔い、折檻の爲に罩められし土藏の裡にて縊死せる事實を仕組めるなり。此事實を仕組めるもの、正德元年に紀海音作「油屋お染袂の白絞」、明和四年に菅專助作「染摸樣妹脊門松」あり、共に此作と青藍の關係あるもの也。

一（御陣九州地理八道）彦山權現誓助劍（天明六年）　梅下風、近松保藏作

鎭西御軍記といへる寫本に、毛谷村六助吉岡の娘に助太刀して京極内匠を討たする事あ

るを潤色せしものにして、竹本座にて妹脊山以來の當り作なり。

一（增補）生寫朝顏話（嘉永三年）　翠松園主人校補

文政年間、山田案山子といふ人、竹本重太夫の爲に創作し、完結せずして歿したるを、彼の翠松園主人の舊章に據りて删補潤色したるもの、もと「生寫朝顏日記」といへりしが、六字の外題は佛號に通へりとて、其の通の忌む事なれば、今の名の七字に改めたる由奥書に見えたり。

大正三年十一月

校訂者　松山米太郎

淨瑠璃名作集　上　目錄

苅萱桑門筑紫轢　一―七六
第一……一
第二……一三
第三……二九
第四　道行越後獅子……四九
第五……六六
三十三間堂平太郎縁起祇園女御九重錦　七七―一八六
發端……七七
第一……八
第二……一〇〇
第三……一二五
第四　道行親子の友鶴……一五二
第五……一八〇
奥州安達原　一八七―二七八
第一……一八七
第二……二〇八
第三……二三八
第四　道行千里の岩田帶……二五三
第五……二七五
武田信玄長尾謙信本朝二十四孝　二七九―三七八
第一……二七九
第二……二九八
第三……三二〇
第四　道行似合の女夫丸……三四八
第五……三七五

お染久松新版歌祭文　三七九―四三八
座摩社の段……三七九
野崎村の段……三九一
長町の段……四一〇
油屋の段……四一八
御陣九州地理八道彦山權現誓助劔　四三九―五五六
第一……四三九
第二……四四五
第三……四五〇
第四……四七二
第五……四七九
第六……四九七
第七……五〇六
第八……五一八
第九……五二六
第十……五四〇
第十一……五五二
増補生寫朝顔話　五五七―六五六
大内館の段……五五七
松原の段……五六一
宇治の段……五六二
眞葛が原の段……五六九
岡崎の段……五七二
明石船別れの段……五八〇
弓之助家鋪の段……五八三
大磯揚屋の段……五九一
小瀬川の段……六〇四
摩耶が嶽の段……六〇九
摩耶が嶽の段（三段目の切）……六一四

濱松の段……六二五
宿屋の段口……六三二
宿屋の段……六三八
歸り咲吾妻の路草……六四九
駒澤上屋鋪の段……六五一

苅萱桑門筑紫轢

作者　並木宗輔

大道廢れて仁義起り、國家亂れて忠臣を顯す。此語を以て鑑みれば、道にも又誠の本あり、其誠の源をたづぬれば戀慕愛執にしくは無しと。豐葦原の陰神陽神、探り給ひし天の逆鉾、種ひろがりし世々の祚、後小松の院の御治世、隨ひ靡く君子國、時めく春の榮なり。當今いまだ御幼稚なれば、御母通陽門院殿、暫く寶祚を預り給ひ、踏歌の節會を御行事、禁廷守護の武士は、筑前の國の住人、加藤左衞門尉繁氏、宵より詰めて宿直守、假に授る官職に、在京の其間、右大將の烏帽子狩衣、花やかなりし出立も、衞士が焚く火に光添へ、威あつて猛く見えにけり。夜半も次第に更け過ぎて、明方近き星の影、衞士は篝を焚きさして、郁芳門に立出づれば、代る時刻と入代り、出來る衞士は奧女中、御國母の召遣ひ、千鳥といへる品者が、すつきりとした下髮に、似合はぬ烏帽子裝束も、派手な風俗柳腰、男欲しがる曲者とは、目元の愛に知られたり。繁氏卿の後に立ち、どうやら何ぞ云ひたげに、うぢ〳〵すれば振返り、繁「是はしたり千

081.6
Y

鳥御前、風流なお姿、扨は今宵の篝火は、其元がお勤か、はてしやれた衛士、焚いて貰ふ篝めは果報な奴」と挨拶の、中にちつくり色持たす、じやれは物師の印なり。千鳥の前は先取られ、何といらへも恥かしく、顔を赤めて居たりしが、てんぽの皮と御手を取り、「七年餘りの御在京、御參内の度毎に、御簾の透より垣間見て、ひよつと燃えつゝ戀の篝火、思ひの煙絶えぬ故、露程なりと此心を、申上げたき願にて、形をやつす衛士の役、胸の焚く火に焦がれ死ぬ、命を助け給はれ」と、御弱腰に抱著く。元より好む色男、否にはあらぬいな船の、漂ふ心を押沈め、「志は過分ながら、禁中在番の某、御所の女中に不義ありなどと、風聞あつては後日の難儀。折もあらん」と云捨てて、振り切り給ふを「そりや成らぬ、はもじい事の有たけを、云はして置いて胴慾な、お上の事は公なれば、こんな詮議はござんせぬ。よしお咎があるならば、罪を私が一人して受けませう。其段には氣遣無く、どうなとせうとつい一くち、嬉しいお詞聞かせてたべ。さう無ければ何ほでも、放しやせぬ」と取付くを、「イヤ〳〵夫は勝手了簡、高呑込で受合はれぬ、許し給へ」と振放し、彼方此方へ外しても、猶も離れず附纏ふ、折もこそあれ御簾を卷上げ、御母通陽門院、關白良基公を始とし、公卿を伴ひ出で給へば、二人は庭に敗亡の、逃げもやられず平伏は、誤り入りし風情なり。國母御聲麗しく、「苦しからず、遠慮なせそ。深くも思染めたりし、色をばいかでさますべき。コレ〳〵繁氏、國に妻子を殘し置き、枕の伽も七年餘、懈怠無き勤番の、褒美に千鳥を取らすべし、寂しき閨の友とせよ。其いにしへ、近衛の院、源三位頼政に下されしは、池の眞菰に水增して、引きぞ煩ふ菖蒲の前、夫には引替へ戀風に、吹立てられし浪の上、啼騒いだる千鳥ぞや。長く比翼の友羽がひ、打交せよ」と宣旨あれば、「コハ有難し」と繁氏卿、千鳥は猶も悦びの、胸落著けど心は急き、「又もや御意の變らぬ内、私はお屋敷へ、お先へ參つて待ちませう、お前は跡から御歸館」と、早しこなせし妻形氣、いそ〳〵立つて入りにけり。折からしらす朝嵐、人の面も白々と、明渡りたる四方の空、「御番の代り」と聲かけて、豐前の大領大内之助義弘が舊臣、多々羅新洞左衛門秀貫、白髪交りの曲者、階下間近く額を下げ、「今日守護の勤番は、主人大内義弘が役目の所、此間より所勞に依つて、某が名代、御赦免仰ぎ奉る」と奏すれば、繁氏立寄り、「病氣とあれば餘儀無き仕合、天子にも勅許有るべし。イザ役目を讓り代らん」と立出でんとし給ふ所へ、執權監物太郎信俊、「奏聞の事あり」と、訴出て庭上に畏り、「扨も高雄の御山は、觀音薩埵の靈驗あつく、諸人の信心日々に彌增し、歩を運ぶ靈地なるに、十日ばかり以前より、身に香染の袈裟を懸け、おどろの髪振亂し、高足駄にて異形の行人、夜は洞穴に取籠り、晝は山を徘徊して、往來を惱す由、昨日夜更に及びて

の注進、如何計らひ申さんや」と申上ぐれば、關白良基公笏執直し、「出家ならば佛意を慕ひ、難行苦行に身をこらし、道をためす敎もあり。有髮の行者は心得ず。殊に往來を惱す由、何にもせよ聞捨てになり難し。帝都の騷ぎにならざる樣、汝密に行き向ひ、都の内を逐拂ふか、異議に及ばゞ召捕つて糺明せよ」と仰の内に、「承る」と立つ所を、新洞左衞門「暫し」と呼留め御前に向ひ、「夜前までは彼が主繁氏の勤番、今朝よりは手前の主人、大内義弘が役目、此討手某めに仰付られ下され」と、願へばやがて監物太郎、「イヤ是新洞殿、高雄山は北嵯峨に相續き、主君繁氏が預り場所、其上拙者が承つた役目、横間より手前へとは我儘至極」と云はせも立てず、「ヤア武の道から武を望むを、我儘とは舌長し。是非此討手を某に」と、云捨て立つを、「どこへ〳〵、人の役目を好い年して、かち落さうとは大人氣無し。似合うた樣に圓座の上、髭を數へて居召され」と、詞荒して駈行くを、走りかゝつてしつかと執へ、「年は寄つても此親仁、まだ腕先には覺がある。行かれうならば行て見よ」と、引留めたる力瘤、「エ、面倒なる老耄め」と、もぎ放せば摑付く。「待てよ〳〵」と關白の、仰も聞かず繁氏の、詞も餘處に監物太郎、一ふり振つて振放し、飛ぶが如くに駈出すを、奈落までもと新洞左衞門、辭儀も作法も白砂を、踏散らしてぞ追うて行く。通陽門院叡感あり、「大内には歌爭、武士は武を爭ふ、其家々の習として、勇しき有樣かな。勇む心に迎ひを待たず、嫁入急ぎし千鳥の前、さぞ館にて待ちかねん。宿の時を暖めて、友鳴にせよ繁氏」と、御褥を立ち給ふ、御戯は常陸帶、結ぶ契は千代八千代、變らぬ國の三重春風も、匂を含む一霞、都は辰巳高雄山、峯は斜の白雲に、巖聳えて茫茫たる、雪も解け行く谷川の、苔滑かに松の聲、げに物凄き景色なり。被衣に靡く若草の、素足で歩ふ御所女中、男交りにざゝめくは、千鳥御前のお乘物、繁氏卿のお館へ、押付けて行く嫁入分、道を迴つて觀音詣、結ぶ誓のかねの緒に、緣も長き山坂を、息休めにとお乘物、松の木蔭に立てければ、今日ぞ雲井の眉解けて、立出で給ふ千鳥の前、花を隈どる御姿、褄吹返す戀風も、憂きとや人は羨まじ。妬どもはざわ〳〵と、籠を放れし里雀、中にも梢が囀りて、「なんと皆の衆、小面の憎い此松に、抱付いた藤わいの。丁度あの樣に千鳥樣も、繁氏樣にしがみ附いて御座らうの。彼樣器量の好い殿御、御果報なあやかり物」と、なぶり懸れば礎が差出で、「そりや知れた事、云やるがくだ。したが、どうも呑込まぬは彼方のお心、今までは御所住居、やもめ烏の千鳥樣、飛立つ程に思召し、一寸でも早うお屋敷へござる筈、それに氣疎い廻りして、觀音參りが心得ぬ。お持たせ振の道草か」と、尋ぬれば打笑み給ひ、千「樣子知らねばさう思ふも理、いひ出すも恥かしい事ながら、繁氏樣に惚れたのは、今更の事ならず、とうから惚

れて居るわいの。お國には石動君とて、若殿まである御臺樣、れつきとして御座るとは知りながら、思ひ初めては忘られず、焚付けて見る衞士の篝火、姿をくろむ濡衣、つい門院樣に見付けられ、ハット心に思ひの外、お氣の通つた粹な勅諚。是と云ふも自が年月念ずる心の誠、偏に觀音樣の御利生と思ふから、道よりしてのお禮參り。オ、恥かし」とばかりにて、御乘物に召し給へば、礎「夫なれば御尤、愈大悲のお力で、いぢむぢのない樣に、晩からはねびのだん、段々によい戀枕、うん〳〵雲雷くうせいでん、雷に臍取られぬ内、急ぎや〳〵」と我一に、行掛りたる向ふより、惡者作りの深編笠、供先押割りのつさ〳〵、「ちと乘物へ御訴訟」と、のさばりながら立寄れば、家來の者ども聲々に、「願訴訟の事ならば、なぜ記錄所へ往て吐かさぬ。ハレ狼狽へた素浪人」と、嘲笑へどちつとも怯まず、「おのらが知つた事で無し」と、押退けて乘物の傍近く、「コリヤ妹、見ぬ顏するは手が惡い。兄黑塚の鬼藏人、見忘れはしよまいがな。最前から樣子を聞けば、そちは今日繁氏殿へ嫁入をするとの話、それなれば無心がある、某をお館へ連行き、私が兄でござる、お取立頼みますと、たつた一口詞を添へなば、義理にでも繁氏殿、世話しやらねばならぬ事、さすれば兄が身上に有付く。とかういへば思案がある」と、妹に向ひ居合腰、刀捻くり嚇せしは、大人氣無くも面憎し。當惑ながら千鳥の前、乘物の戸を押明けて、チ「珍しや藏人殿、まだ息災で此世に御座るか。ヘエ、此方はの、いふに及ばぬ事なれども、父上黑塚群寮樣は、代々續く禁裏の博士、君の覺も目出たき家柄、男の子とては其元お一人、跡目も相續する身を持つて、十年以前淸涼殿のお能の時、醉狂の上人を過ち、直に夫よりお前は駈落、其お咎にて父上は、浪人し給ひ貧しき世渡り、忰故に家を刓し、先祖へ對して言譯無し、必何國で出逢うても、兄と思はど共に勘當と御遺言にて、貧家の死をばなされたぞや。夫に今更妹よ千鳥よとは、どの顏さげて對面ぞ」と、恥ぢしめられてさしもの惡者、押俯向いて詞無く、砂にのの字を書き居たり。千鳥の前は涙を押へ、「ア、怨むまじ、返らぬ事、皆の衆の手前も思はず、よしなき昔の長咄、日もたけて嘸やさぞ、繁氏樣にもお待ちかね、心急かれ」との給へば、「そりやお急ぎよ」と六尺ども、腰を振出す五枚肩、行く乘物の棒しつかとらへ、「イヤ妹、そう旨うは拔けさせぬ。何國までも同道」と、ねれけ懸れば家來の者ども、目をむき出し、「聞いた樣子が大泥坊、兄貴めでも大事ない、性根の直る異見の爲、目に物見せん」と立ちかゝり、遠慮會釋も生木の息杖、足腰かけて用捨無く、からさを投に打ちのめし、「厄介な繩くらひ、棒をくらうてよい氣味か」と、どつと笑うて行過ぎる。藏人漸〳〵起上り、脊骨をさすり齒がみをなし、「ヘエ、罰當りの妹め、此分で濟まさうか」と、駈出す後の方、「暫し〳〵」

と留むる行相、香の衣を身に纏ひ、亂髪逆に生茂り、一丈餘りのかつらの杖、高足駄踏鳴し、悠々と立出づる。さしもの藏人肝を消し、暫し詞も無かりけり。「ホヽ、目馴れぬ姿不審顔は尤々。我此程より大願の仔細あつて、當山に分入り身を凝らせど、胎金兩部の峯も慕はず、赤木の數珠を押揉んでは、四海を胸に疊む妙術。汝妹が緣を賴みに、繁氏に仕へんとは、迴遠き分別、某が幕下につかば、高祿を得せしめ、先途を見屆け取らすべし」と、さも横柄なる詞つき。何がなかきつく猿智慧の、押直つて頭を下げ、「何が扨〳〵、落著く島も無い某、いか樣ともお目がねに預りたし」と手をつけば、行「ヲヽ、賴母しゝ〳〵、いで〳〵汝が高祿出世の手がかりとなる判じ物、よく判じよ」と歩寄り、松に絡みし藤葛、若葉は爰ぞと杖取延べ、丁々と二枝三枝、薙落して、「是見よや、元來加藤は藤原氏、其藤をまつ此如く切放す、早く此心を察せよ」と、いふに角ぐむ鬼藏人。額の皺に智慧かき寄せ、「ムヽムヽ、近年の謎したり〳〵。其藤原の藤の枝を切捨て給ふは、此藏人に繁氏が首」「アヽ、聲高し、密に〳〵。すりや判じたる心底は」「成程討つ氣でござれども、未だ君の御名をも明されねば、あつとは得こそ申すまじ。まづ姓名を御聞かせ」と、云ふに頷き、行「ホヽ、うい奴、でかいた〳〵。かく胸中を見据ゑし上は、何か包まん、元某當山に住む者ならず、九州に隱なき、大内之助義弘といふ者。そも此山に艱苦する事、我多

年天下を望み、日夜朝暮大玄谷神の呪を唱へ、又は諸國の安否を窺ひ、國家を握る企なれども、合點の行かぬは繁氏一人、助置いては大望の妨げ」と、語る半へ轡の音、程近く聞ゆれば、奇異の思を大内之助眼を配り、「ヤアラ心元なし、暫しが内我は窟に身を隱さん、汝も暫し忍べよ」と、云含めつゝ引別れ、茂りの内へ入りにける。夕日に背いて向ふ高雄山、勇の鈴もはなやかに、馬上ゆゝしく乘りたるは、監物太郎信俊、身は腹卷に小手臑當、暫時に駈ける沛艾馬、鞍に引添ふ譜代の郎等、大佛新藏諸侍、息をはかりに駈來る所へ、遙にさがつて「オヽイ、オイ」と呼かける。心急けども監物太郎、何事やらんと手綱かい繰り、駒をかへせば新洞左衞門、頭に星霜降積れど、體は忠義の韋駄天走り、徒士だちになつて駈付け、「ヤア曲もなや監物太郎、朝廷にても爭ひし今日の討手、是非某にふり替り、其方密に歸つてくれ、賴む〳〵」と云ふ間を待ちかね、監「ヤア心得ぬ御邊が胸中、さまでの討手にもあらざるに、息筋張つての所望、但し其曲者に由緣あるや、心底明さば品により、了簡もあるべきが、無體の望いぶかし〳〵」「ホヲそれも尤、何を隱さう閑居して、異相に見ゆる行人は、我主君大内之助義弘殿。オヽ驚きはさこそ〳〵。かく打明くる上からは、爰が互の了簡づく」と、云ふを打消し聲荒らげ、「ソウ聞いては猶赦されぬ。禁裏表は所勞と僞り、此山に隱れ住んで、何の爲の難行苦行、それを明

さば兎も角も、サア其様子は、仔細は」と、問詰められて、「イヤ其義は、其事は」と、差詰つた る返答に、「ヤア狼狽へたる一言、家來として主の心推察せずに仕へるか、善ならば善、惡なら ば、なぜ諫言を加へぬぞ、不覺者」と云捨てに、引直す轡面、追取つて引留め、「オヽ尤なり監 物太郎、汝が主の繁氏殿とは事かはり、主君大内は古今の猛將、思ひ込んだる初一念、中々家 來の諫も聞かず、存じ付いたる大願有りと、仔細いはずの山籠り、禁廷へは所勞の云立、萬一 此事顯れては、上を掠むる大罪、大内の家の滅亡、さるによつて某が、無體に討手の役目を願 ふ、主持つた身は相互、一生覺えぬ此親仁が、手を下げる、聞分けよ」と、いへども聞かず、「い や〳〵〳〵、洞穴に壇を築き不及の望なす者多し、假初ならぬ勅命を受け、善とも惡とも仔細 を聞かず、私に了簡する事ならぬ〳〵。コリヤ大佛、無益に時刻も押移る、構はずとも皆引連 れ、山の手を追取卷き、大内之助を逃すな」と、下知に隨ひ供廻り、一度に勇み入りにける。元 より短慮の新洞左衞門、無念とや思ひけん、「ヤア奇怪なり監物太郎、六十に餘る某に、樣々の 口たゝかせ、其上主君と名を明かさせ、無得心なる人畜生、いつまでも動かせじ」と、乘つた る馬の尾本を追取り引戻せば、又馬上には障泥を打ち、ハイ〳〵〳〵と乘出す、互の忠義に精氣 を揉み、心は逸れど老の腕、次第に緩む疲を見込み、爰ぞと監物はずみにあふり、丁ど當つれ

ば跳上る、馬の蹴上げに新洞左衞門、はね倒されて伸る所を、障泥と鞭を打重ね〳〵、馬を飛 して一散に、奥山指して駈けり行く。新洞怒の齒を嚙みしめ、忠義に固まる老の兩足、踏固め 踏みしめて、追駈行く一筋道、通り懸りし鉞乘物、向ふ見ずの新洞左衞門、供先押割り駈行く を、つきぐの侍立塞り、「不作法なる老耄、此乘物に召したるは、忝くも禁中より、繁氏卿へ 御入ある千鳥の前、片寄れ下れ」と罵つたり。新洞左衞門心づき、是こそは監物めに、ほで合 させる質物と、乘物の棒しつかと執へ、「ハレよい所へ千鳥の前、乘物を踏碎き駈通るは易けれ ども、こつちに少し入用な。元の所へ舁戻せ、宰領は此親仁」と、力に任せ「コリヤ〳〵〳〵、 エイ〳〵〳〵」と突戻せば、色眞青に妙ども、足もよろ〳〵六尺も、降つて湧いたる災難も、す べき樣なく理不盡に、深山を指して押登す。暫くあつて山の巔、義弘が籠りたる洞のあたり をうそ〳〵と、尋廻りし若侍、頰冠りにて顏隱し、明乘物を此方に吊らせ、巖の前に禮義正し く、「イカニ我君義弘卿、今日禁庭の風聞、當山に於て隱住の族、急ぎ誅せよとの勅諚にて、則ち 討手向ふの評定、此義密に達せよと、主人新洞左衞門が注進によつて、則ち家來岩淵平馬、御迎 ひに參上」と、似つこらしげに呼ばはれば、洞の扉を押開き、義弘は寛々と、さあらぬ體にて 歩出で、「何新洞が家來迎ひに來りしとな、大義を起す某、小事の害を待たんより、一先此場を

逃れん」と、乗物引寄せ飛移れば、仕濟したりと鐵の大網、雙方より打きすれば、監物太郎駈來り、大聲上げ、「ヤア〳〵大内、武士の山籠り、不審をはらせの勅命にて、加藤左衛門繁氏が家來、監物太郎向ふたり。言譯あらば天奏にて申し開かれよ」と、いふ聲を聞くよりも、大内之助五躰を搖る唸聲、「ヤア〳〵黒塚はをり會はぬか、藏人は出會はぬか」と、乗物兩手にめりめりぐわた〳〵、一人前の大地震、うめく谺に鬼藏人、尻引裏げ飛來り、有無を云はずに無二無三、切つてかゝれば大佛新藏、丁ど受けて受流し、眞向微塵と切りかくれば、こは叶はじと鬼藏人、はふ〳〵逃げて失せにけり。かゝる折しも岩蔭より、新洞左衛門秀貫が、追立て來る飯乗物、「コリヤ〳〵監物、推量が其乗物、某が主君大内殿よな、さこそと知つて此方もぬからぬ。此奪取りし乗物は、汝が主人繁氏へ、禁中より下されし千鳥の前、奪取つたは汝へ面當、主君大内を戻せばよし、さも無くば恨の刃、此乗物へ突通す、如何に〳〵」と聲懸けたり。「南無三寶」と監物太郎、「コリヤ新洞、勅命下りし千鳥の前、殺さば汝朝敵同然」新「ヤア主を擒になすからは破れかぶれ、サア返答は」と刃の影、監「やれ待て、急くな〳〵。左程忠義を立つる根性、無下にするも本意ならず。殊に主君の寵愛、殺さるゝも殘念、理を非に曲げて乗物ぐるめ打換へて得させん。さりながら、勅命受けて生捕つたる曲者、私に助けては、朝家の聞えも恐有り、

此義にあぐむ」と云はせも立てず、「ヤレそれは一途、高雄山の異行人、追拂へとは最初の勅、生捕れとは異議に及ぶ時の事」と、云ふに頷き、「それよ〳〵、いざ乗物を表立ち渡してくれう、安堵せよ」と、家來に云付け舁上げさせ、「こりや〳〵新洞慥に聞け、洛中洛外追放の行人、網きせて渡すぞ」と、いふに悦び、「尤々」また幾千代の友白髮、祝ふ嫁御の色直し、雲井の薫蘭麝の乗物、雙方一度に取かへし、損得無しの山道を、分けて信俊秀貫が、肩も揃うてエイサツサ、誘ふ嵐の入相は、かねて思ひの羽を伸し、濡るゝ鴛鴦妹脊烏、是は遁れぬ網烏や、網代のうきに大内之助、伴ひ歸る忠臣義士、例は少き君が代に、揚ぐる譽は高雄山、勇みいさむる夕間暮、別れ〳〵になりにけり。

第二

唄　九十九折には次手馬、川瀨は船の自由する、八幡山崎二山の、間を棹さす船渡し、黄昏よりも火を點し、夜もすがら渡すゆゑ、狐川とはいふやらん。筑前の國の城主加藤左衛門繁氏卿、勤番の隙詣、八幡を懸けて山崎や、渡場近くなりければ、暫く此方に立休らひ、「ヤ家來ども、都は洛中洛外とも、孰を孰といはれぬ風景、別けて男山の昔を尋ぬるに、豐前國宇佐の郡より、

勸請ありし正八幡宮、御鎭座もことわり、紀刄きやらさんとも云つゝべき御山、入日に輝く風景、いやはやどうも〳〵。斯樣に方々の詠に心浮れ、思はずも日が長け、はや暮に及ぶ、提灯の用意はよいか。見れば渡船も向ふへ漕行き、戻るを待つも退屈、堤傳ひに行くべきぞ。案内せよ」とありければ、御供の若黨横口戸平、家老顏する緩怠者、つゝと出て、「ハレヤレ殿には御存無いか、此道は登船の引場、道のだくぼく、中々歩まるゝ所ならず。旦那は乘物にもお召しなされうが、家來は何になるもの、渡しをお待ちなされよ」と、出過た慮外も仁者の優美、「いかさま、三里廻つて本海道といへば、惡所を行くは不行作、所の名さへ狐川、ばかされてはなるまい」と、御戯も時の興、挾箱に腰打掛け、暫し休らひ給ひける。日暮を急ぐ旅人の、五人七人一連に、乘り後れじと岸蔭に、立集れば向ふより、漕來る船も人の酢、著くと乘手は乘ろとする、上ろとすると兩方が、揉合ふ中に浪人と、覺しき武士が上りがけ、又此方より乘る人も、同じ風なる侍が、せり合ふ中を摺合うて、何とかしけん互の大小、もぢり合ひしを急ぎ業、解く拍子に一方の、脇指ほつきと折れにける。ハツとばかりに折られし侍、面目無さに笠傾け、たゞずむ内に相手の浪人、行過ぎるをこたへかね、「待て暫し」と呼かける。急ぐ身なれど是非なくも、立留りし互のきつ相、「スハ事こそ」と船は迯げ、繁氏卿も乘り後れ、さながら迯げても退がれねば、せん方煙草燻らして、打詠めてぞ在します。件の侍折れたる脇指拾ひ持ち、相手に向つて詞も荒さず、「誠に恥を申さねば理が聞えず。拙者めは遠刄者、永々の浪人故尾羽打枯し、餓死せんよりはと存じ、武士の有るまじき一腰を賣代なし、奉公かせぎに西國へ罷下る。時の過とは申しながら、此方と摺合ひに此如く、指添をこぢ折り、あれに歷々も見てござれば、面目の雪ぎ樣なく難儀に及ぶ、何卒了簡の付くべき義ならば、了簡付けて御通り下され。それとも御思案に及ばずは、御不肖ながら相手になり、討果して下されうや。お返事次第」と相述ぶる。相手の侍ちつとも臆せず、「御尤至極〳〵、手前麁相者ゆゑ思はずも無調法、ガ討果す儀を御詫は申さぬ。併し指添が竹光故、面目無いとは、胸中が小い〳〵」「ア、これ〳〵、指添でも武士の魂、竹光でも苦う無いとはな」「ホヽ、一筋なお心故、是しきを恥辱と思召す、イデ某が大恥かいてお目に懸けん」と、刀拔出し兩手に握り、遠慮會釋も鞘ぐちに、ほつきと折つて目先へ突付け、「是御覽候へ、手前も此通り。拙者めは播州浪人、都方へ奉公拝の、路銀何かに詰り、まだ其元は指添、拙者は刀、恥辱は倍增す武士の魂、折つて見せたは外聞を、倶に現すお腹癒せ、夫とも討果す儀に違背は致さぬ、お相手にならうか、と申して好みも致さず、又迯げも仕らぬ、如何樣とも御勝手次第、サアお返事は」と膝立直せば、「ヤレお急なされな、言分

無い。ハレ其元にもいかい艱難なされたの、由なき儀を申懸けお刀を折らし、お腰が空いて氣の毒」「イヤ拙者めが麁相で其元のお腰が」「ハテ夫は此方も麁相」「是は〳〵夜中故確とお顏も見えず、御緣あらば重ねてお近附に罷成らう」「左樣致さう、はれやれお隙を取りました」と、互の禮儀砂打拂ひ、立別るゝを横口戸平、大口開いて高笑ひ、「やれ〳〵、いかに浪人すればとて、折れる物を腰に挾み、奉公拵とは野太い和郎達、イデ武士の見せしめに、面見て置こ」と立上るを、繁氏はつたと睨付け給ひ、御帶刀に手を懸けて、怒を含む御顏ばせ、惡者作りも主の威に、恐れてかしこに蹲まる。行過ぎたる二人の侍、立止つて一思案、心ならずも雙方が、引返して暫くは、互に詞も無りしが、脇指折られし侍小腰を屈め、「誠に其元には刀を折り、我心を宥め下されたれども、今お聞きの通り彼處なる御家來、何彼と惡口せられ、何とも此場が濟み難し、御思案極め下され」と、横口戸平を尻目に懸け、怒を含む物ごしに、「いかさまあの通りに沙汰あつては、お互に身上仕官の妨げ、一旦濟んだる事なるに、由なき匹夫の口先故、討果す事近頃殘念、と云うてあれしきを對手にも大人氣なし、又其主人へ兎や角いはゞ、浪人の糧に盡き、物取などと蔑せられん。エ、是非もなき次第、此上は潔う刺違へ、最期を俱に致すまいか」「成程拙者も其覺悟、ハテ命冥加な下郎め」と、繰返し〳〵、殘多げに戸平を睨付け、

「イザ此所で」「尤」と、雙方最期の身拵へ。繁氏外の家來を招き、何か呼き給ふにぞ、相心得て乘物より、御指替の大小を、頓て取出し差上ぐる。其間に兩人座を占めて、既にかうよと見えければ、「やれ暫く」と立寄給ひ、「最前より御兩所の心底、尤さこそ有るべき儀、併し大功は細瑾を顧みずと申す、僅の恥に命を捨て、何國の誰と知らざれば犬死も同然、又お腰の空いたるは、指銹びたれども某が、指替にて塞ぎたし、異議無く貰ひ給はらば、喜悅ならん」と一腰づつ、差出し給へば兩人とも、ハツトばかりに平伏し、「有難き御裁配、違背申すは憚ながら、いづくいかなる御方とも存ぜず、まして御恩受ける筋無し、此儀は御免」と辭退の詞。「ホヽ一理ありて至極せり。某儀は筑前の國、加藤左衞門繁氏と申す者、則ち當所は禁廷より、馬の飼領に下し置かれし拙者が領分、其場にて兩人とも横死あつては跡の難儀、其難儀を遁れん爲、進上申す此兩腰、快く受け給はゞ、如何許り大慶」と、退引ならぬ仁者の詞。「ハヽヽハヽ」はつと押戴き〳〵、「冥加に餘る御情、何時の世にかは忘るべき。元我々は」何某といはんとするを、「アヽコレ〳〵、お名承つては恩に懸けると申すもの、志が無足致す、顏も知らず名も知らず、重ねてお目に懸つても、お近附でござらぬぞ、急ぎの道お出であれ、お立ちあれ」と、慈悲に慈悲增す御詞、兩人餘りの難有さに、返す詞も無き中に、猶も手をつき頭を下げ、「かくまで深き

御情、申すは恐多けれども、とてもの事に此場のしぎ、御家來も沙汰無き樣、仰付けられ下され」と、願へば繁氏返答無く、最前笑ひし若黨の、横口戸平を呼出し、「汝に別して用事あり、是へ來れ」と仰に任せ、何心無く來る所を、飛びかゝつて首打落し、「手前の政道はかくの通り、外に他言は致すまい。お別れ申す」と細道を、分けて情の御捌、有難しとも兩人は、御後影伏拜み〳〵、爰は所も男山、正八幡の化身かと、思ふ迷も狐川、渡しを急ぐ旅人と、陸を早める浪人の、心は一つ、行く道は、二つに隔つ淀堤、左右へこそは、三重別れ行く。梅を諸木の兄とせば、櫻は花の振袖や、姉が小路に美を盡し、華麗を飾る殿造り、加藤左衞門繁氏の館には、庭を野山と櫻狩、上下ざゝめき賑へり。奥方近き坪の内、下部の出入叶はねば、妙衆が掃除役、中にも小りうが竹箒、塵取さらへと搔交ぜて、問はず語りに、「なんと皆の衆、此廣庭へ出臍の樣に、あの社は何といふ神樣ぞ、あた邪魔な、掃除が成らぬ、箒ついで掃出そぢやあるまいか」「コレあの人とした事が、あれはお國から勸請なされた殿樣の氏神樣、麁末になどしやつたら、逆罰が當ろぞや」「ム、お國から取寄せるのをば勸請といふかや、そんなら今度お國から、勸請なされた御臺樣、千鳥樣と殿樣のしつぽりを御覽じたら、ふんすんで堪るまいと、案じたはあての撻、お妾女郎と奥樣の、中の好いのはどうした事、あんまりで拍子が無い、序に悋氣もお國から、勸請したら可からう」と、苦もしどもなき高咄。折から塀の外面には、萬よしなを取交せて、賣る商人の聲高く、ほの聞ゆれば妙ども、「そりやこそ例の百物賣、小面の憎い商人め、裏門から呼込んで、嬲つて遊ぼぢやあるまいか」「こりや可からう」と騷ぎ立ち、何がな見たがる聞きたがる、浮氣盛りの女の童、門の戸明けて呼込めば、「ハイ粉類なら何なりと、蕃椒でも胡椒でも」「イヤそんなもな入りませぬ、例の樣に賣立てて聞かさつしやれ。夫が厭なら何にも買はぬ。早う〳〵」と口々に、せがみ立てられ、「まつかせ」と、頬杖ついて聲張上げ、歌「のこのこや豆の粉や、まめな手くせに尻こぶた、ぶつゝりひゝりと山椒の粉、奴樣には蕃椒、坊主の好な胡椒の粉、若い嫁御のはなはじく、姑御には辛子の粉、おてきに盃さしもぐさ、身柱九十一、するて心もちや吉野葛、召しませい」とぞ賣りにける。妙どもは目を引き袖引き、「マア當分何にも入らぬ。太儀に能う喋りやつた。のこ〳〵去にや」と打笑ひ、一度に奥へ走入る。商人は荷を卸し、商「エ、今日も又取りくさつた、テモなめ過ぎた女ろさいども」と、呟きうそうそ差覗き、彷徨く内に監物太郎、ひよつと來懸り小蔭にて、窺ひ居るとも知らぬが天命、荷箱の内より大小取出し、身拵へしてのつさ〳〵忍び入るを、「曲者待て」と呼懸けられ、南無三寶と振返る、透を有らせず庭に飛降り、摑んで大地へぎやつとのめらせ、足下に踏まへ、「ヤアラ

心得ぬ賣人め。荷箱の内より大小を取出し、奥を目懸けるきつさう、いかさま仔細ぞあらん。眞直に白狀せよ、骨を斷つても云はさにや措かぬ」と、挫ぎ付くれば吠面ながら、「ヤア下郎とは舌長し。儕等があがまへかしづく、千鳥の前が兄黑塚の鬼藏人、繁氏が爲には小舅、主同然の某を、土足に懸けたる罰當りめ」と、云ふに驚く色目を隱し、「シテ其兄が何故に、切込んで誰に敵對、目指す相手の名は何と」「ヲ、其目當は加藤左衞門、繁氏が首取つて、知行にする」と撥反すを、起しも立てず「扨こそ」と、刀の提緒手ばしかく、後手に縛上げ、「定めて一味の輩もあるべし、密に詮議」と引立つれば、奥より來る女中の足音、見付けられては詮議の妨、如何はせんと取つ措いつ、思案の扉開いて、幸ひ暫しの獄屋、神は見通し「赦させ給へ」と、社の内へ無體に押込み、鰕錠しつかと卸し置き、さあらぬ體にて入りにけり。妹脊の中にかたまりし、石動丸の御母君、牧の方とは申せども、子持と見えぬ御形、花見座敷へ出で給へば、跡に續いて千鳥の前、大内山の木隱れより、移し植ゑたる花なれど、さすが妾と本妻の、禮義は戀の品定め、「ノウ千鳥樣、つれあひ繁氏樣、七とせ餘り禁裏の勤番、首尾好う勤めておしまひなれば、是からお國で御休息、永々の在京に、夜の御殿の伽も無く、お寂しからんと案ぜしに、自になり代り、殿の心を慰むる、そもじ樣があるとの噂、國元で聞く其嬉しさ、とんと心が落著いて、

緩々登りし今度の御迎ひ、今日は歸國のお願に、禁裏樣へお上りなれば、お暇が出るや否や、此方樣を國へ伴ひ、たアんとお禮を申さにやならぬ」と、奥底も無き御挨拶、「是はまあ有難いお詞、今更申せば何とやら、言譯がましく惡けれども、數ならぬ身の、殿樣に添臥、御臺樣のお目に懸らば、お呵りもあらんかと、思ひの外な御憐み、さう結構におつしやつては、お返事もなり惡し、千鳥よどうせいかうせいと、妙衆同然に御意なされて下さりませ」「ハアテわつけもない、大事の殿御を半分づつ、いとしほがつて貰ふもの、如在にしてよいものか。其代りに此上外で殿樣の、惡性があるならば、二人して云はうぞへ」「そりやお氣遣ひ遊ばすな、お前にお世話は懸けませぬ、御名代と二人前、私が番を致しませう」「ヲ、それ〳〵」と頷き合ふ、中好き魚と水入らず、妙どもは手をざをに、お氣慰みと持運ぶ、雙六盤や歌がるた、野風爐提重茶辨當、取散せしはお座敷を、野山にうつす花見酒、數々廻る盃に、御臺所興じ給ひ、「追付け殿樣お歸あらん、お目に懸けるも二人が御馳走、アノ櫻を題にして、腰折なりと一首づつ、短册を付けまいか」「コリヤようお氣が著きました、及ばずながら私も」と、雙六盤を眞中へ、脇息に押直させ、二人が臂を掛けまくも、かしこき國の和歌の道、案じ入つたる御酒機嫌、心隔てぬ中々は、何に遠慮もなぎさ漕ぐ、蜑の小舟やとろ〳〵目、すや〳〵寐入り給ひければ、妙

どもは呟き合ひ、「中の好い同士打解けて、テモ快う御寐なつた。お目の明くまでこちらものんき」と、座敷の障子そつとさし、皆々一間に入りにける。程無く左衞門繁氏卿、歸館を告げる奥使、跡よりしづ〳〵入り給へば、監物太郎出迎ひ、「是はしたり、殿樣のお歸を、奥方には御存じ無いか」と、一間にかゝれば、「さなせそ〳〵、餘念無く寐入りし體、互に嫉む色も無く、睦じきこそ滿足なれ」と、悅び給へば頭を下げ、「何樣御意の如く、嫉妬のあるは婦人の常、其氣遣無き御二方、かくまで御中宜しき事、我々までの大慶」と、申上ぐれは繁氏卿、傍なる盃取上げ給ひ、「禁庭表の首尾も好く、歸國の暇を賜はりし悅び、我もかれらが花見の相伴、二人が風情を肴にて、花の本の一獻、酌せよ」とのたまへば、ハ、ハット銚子を押取り、つぎ懸けたりし不老不死、藥の水の滴りと、一つ受けさせ給ふ折節、雲心なく吹く風の、盛りを散すひと嵐、受け持ち給ふ盃へ、莟一ふさ落ちにける。繁氏つく〴〵打眺め、「散ればこそ、いとゞ櫻はめでたけれ、とは詠みたれども、雨にしぼみ風に揉まれ、盛りの散るはとがならず、未だ時にも逢はぬ此莟、盃の中へ散つたる事、是こそは人界の、果敢なき教の老少不定、老いたるが先だつとも、若きが跡に殘るとも、定め難きは人の命、忘るまじきは後生の道」と、文武に猛き繁氏の、無常を觀ずる悟道の一言、打悄れたる御有樣、監物太郎も尤と、俱に悟りは開けど

も、故と詞に勵みを付け、「こは言ひがひ無き御迷ひ、釋迦といふ賣僧頭、樣々の僞りを書きちらし、一文不知の嫗嚊を、たらさん爲の一切經、喩へて申さば盜賊を捕へ、殺生なりとて助け歸さば、國家の憂となる道理。アタ忌はしき後生の道」と、心に思はぬ雜言に、佛法誹るも諫の忠言、心を感じて打頷き、「誠に汝がいふ通り、弓馬の家に生れながら、假にも無常に引かされては、武の道は立難し。此後ふつつと思ふまじ。さりながら、よしなき事に心もめいり、何とやら物淋し。次の間にて檢校に琴を彈かせよ、御臺や千鳥に目を覺させ、我は是にて慰まん。早疾く〳〵」とのたまへば、只當然の御戲れ、强ひて諫に及ばずと、御前を立つて入りにけり。「ホ、いつに無き我が佛法歸依、武邊に弛もつかんかと、案ずるは尤々。イデわつさりと酒宴を催し、結ほれし氣を晴らさん」と、立寄給ふ障子の内、不思議や俄に物騷がしく、あたりに響き、庭の木草もさわ〳〵と、風も身に沁むばかりなり。こは心得ずと一間の障子、さつと開いて見給へば、餘念無く臥し給ふ二人の黑髪、眞逆樣に蛇の如く、鎌首ぼつ立て咬合ふ有樣、さしもの繁氏怖氣立ち、呆れて詞も無かりしが、「ハツア恐るべし〳〵。外面似菩薩內心如夜叉と說かれたる、佛の戒め目のあたり。顏に白粉丹花の脣、粧ひ飾りて菩薩の如く、互に妬む顏もせず、打見には中好き體、心の底に邪鬼執念、絕えせぬ證據をおのれと顯し、かく淺ましき體たらく。

忌はしや穢はしや。妻子は地獄の家土産と、説示されしに疑無し。花の莟の散つたるに、思ひ較べて觀ずれば、是ぞ好き菩提の種、家國榮華も望無し。迷ふが故に三界の、火宅に心を苦しめり、悟れは十方空ならずや」と、今まで心のめいりし上、いや增りたる發起心、烏帽子狩衣脫捨て給ひ、指添拔いて髻を、ふつつと切つたる輪廻の絆、硯引きよせ書置を、認め給ふ其内に、奥座敷には檢校が、琴の音色もしをらしく、歌の唱歌は聞えねど、彈く爪音は薄雪か。薄き契も過去の因緣、必ず心殘すなと、こまぐ〳〵筆に書盡し、御髻に烏帽子裝束、書置添へて彼所に置き、裏門より悄々と、立出では出でながら、さすが恩愛捨て難く、ふり返つて涙に暮れ、「二人が夢覺めかくと知らば、嘸嘆くらん不便や」と、見遣り給へば蛇形の黑髮、猶も盛んに挑合ふ、執著心に愛想も盡き、身ぶるひ立てて足早に、行方知れずになり給ふ。かくとは知らず監物太郎、立出づれば一間の騷動、見れば件の怪しき姿、驚きながら走寄り、用捨も無く咬合ふ黑髮、指添拔いて切放せば、二人も惚り起上り、顏を見合せ一時に、吐息をほつと吐き給ふ。監物太郎あたりを見廻し、「我君はましまさず、御烏帽子狩衣の、脫捨てあるこそ心得ね」と、立寄り見れば御髻に、一通添へて殘されしは、「はや御遁世か情なや」と、驚き騷ぐに二人も立寄り、「ヤア殿樣は遁世とや、何故の御出家ぞ」と餘りの事に興醒めて、泣くも泣かれずうろうろと、俱にうろたへおはします。監物やう〳〵心を鎭め、「ヲヽ、驚き給ふは理。先程禁裏より御歸館の節、いつに勝れし御機嫌、あれなる櫻の本にて御酒宴の折柄、御盃へ花の莟散つたるとて、無明の悟を開き給ひ、さも心細く御意なされしを、打消しては置いたれども、御兩人の髮逆立ち、蛇の如くになつて咬合ひしを、御覽あつての發心か」と、歎くに御臺千鳥の前、亂れし髮に心付き、現ともなく夢ともなく、咬つつ咬はれつ爭ひし、互の覺一時は、どうど轉びて泣沈み、前後不覺に見えけるが、「ア、恥かしきは人の心、此度都見物がてら、お迎に登りしが、千鳥殿と殿樣との睦じさ、見るよりも妬ましく、胸も搔裂く腹立を、じつと耐へてうはべには、美しうつきあへども、寐た間に本心顯はして、淺ましき有樣を、お目に懸けしか、悲しやな。切ては國に殘りたる、石動が大人しく生立つまで、思止りて給はれかし。呼止めてくれぬか」と、歎き給へば千鳥も涙、「けはひ化粧紅鐵漿より、髮形ぞと艶付けて、かた笄よふきあげよと、結揃へしは殿樣に、見限られまい爲ばかり。其髮が蛇とならば、體は鬼にもなりかねまい。見捨て給ふも理ぞや。御出家も皆私が業」「イヤ遁世をさせませし、科人は自よ」「イヽエ私が」「ハテ私が」と、涙漲る繰言に、思案なかばの監物も、袴の襠に淵をなす。御臺所は涙を押へ、「イヤイヤ泣いては濟まぬ事、まだ程遠くはござるまい。追駈けて留めん」と、千鳥諸共立上るを、

「ヤレ待給へ」と押留め、「疾くより某左様には存ずれども、如何程お留め申すとも、最早留り給ふまじ。先は殘し置かれたる、御書置を見給へ」と、一通を差出せば、是非もなく〳〵取上ぐる、涙に聲も顫はれて、しどろもどろの讀癖を、千鳥も倶に差覗けば、「涙ながらに書殘す一通、一、我弓箭の家に生れ、何暗からぬ身なれども、家國を捨て妻子を捨て、世も捨人の沙門となるは、前世未生の佛縁ならん。思計らず降つて湧いたる遁世を、胸挾き女心に、淺ましき姿を見せける故と、嘸かし歎きの餘り、倶に姿も變へたく思ふらん。さにあらず、妻子珍寶不隨者とあれば、死出の旅路は別れ〳〵、伴ふ人もなく、隨ふ者も無く候。とはいひながら、只忘れ難きは石動丸、やう〳〵二歳の時國に殘し、夫より又七年餘り、顔も見ず候へば、嘸成人も致し、大人しくもなりつらんと、思へばいとど懐かしく、忘るゝ事は之なく候。石動丸を傅立て、加藤の跡目を繼がせてたべ。父が此身になり候へば、若しや流浪も致さんかと、是のみいかう案じ候。必ず〳〵歎きに暮れ、悴が事を忘れぬ様、返すゞ〳〵も賴入候。千鳥へも一通を殘さんと思ひしかど、心急かれて候まゝ、此文を一緒に眺め、牧の方に力を付けてくれよかし。云ひたき事は山々なれども、涙に筆も迴りかねら〳〵もと」讀みもをはらず三人は、わつとばかりに泣沈む。監物太郎涙を押へ、「殿の事は歎きても詮なき事、一大事はお家の跡目、若君の御身の上、殊更隣國には、大内之助義弘といふ佞人あれば、君御遁世なされし事を押秘み、幸ひ歸國を許されし砌、いつもの如く繁氏卿御歸國と世上へ見せ懸け、御臺様に我君の裝束を召させ、一刻も早く國元へ御供して下るべし。跡目の願はお國から。急いで御用意遊ばせ」と、せきたつ詞に歎きを止め、「兎角可きに」と、烏帽子狩衣取上げて立給へば、千鳥の前袖を控へ、「私もお國まで、お供は致す身なれども、お前は石動丸様といふ若君あれば、是に越したる形見はなし、せめて朝夕御身に添ひし、此烏帽子狩衣を、妾に下し給はれ」と、取付くを監物太郎、「御尤には存ずれども、たつた今お聞の通り、御跡目相續の力と致す烏帽子狩衣、此方には進ぜにくし。ハテ何をがな。オヽそれよ〳〵、究竟一の形見有り」と、社の鑰を取出し、「是はあれなる祠の鑰、社の内には其元の、大切になさるゝ形見あり、扉を開いて取給へ。併し妾をよく得心あれ其形見のなりゆきにて、お國へお供は叶はず」と、鍵投出し謎を懸け、御臺所を誘ひて、奥深くこそ入りにけれ。千鳥は一句の判じ物、「御形見のなりゆきにて、お國へ行く事ならぬとは、どうやら物のあるいひかた、譯こそあらん」と庭に降り、社の傍へ立寄りて、何かは知らず開いて見んと、錠前明くれば待かねしと、飛んで出でたる鬼藏人、「ヤレ怖や」と逃退きしが、顔を眺めて、「ヤア兄様か、何故妾に、縛られたはどうした科」と、驚きながら親は泣寄、縛め解け

ば身構し、物をも云はず驅出すを、「コレ待つた藏人殿、監物太郎が一言に、思合はして思案をすれば、どうでも樣子があるわいの」「ヲ、云うて聞さう某は、大内之助義弘殿に賴まれ、加藤左衞門繁氏が首を取り、出世の種にするわいやい。爰を放せ」と振切るを、驅塞つて、「待つた待つた。夫で何にも樣子が知れた。夫ならやつぱり縛つて置こもの。此方の樣な惡人と、一緒で無いといふ證據、御臺樣や監物殿への言譯」と、走り寄つて藏人が指添拔取り、手早く眞向切下ぐれば、「南無三寶」と拔合せ、爰を最期と戰ふ太刀音、監物太郎は小蔭に隱れ、夫と見ながら詞も懸けず。庭には兄弟修羅の巷、火花を散して、三重切結ぶ。鬼藏人は油斷にて、初太刀に受けし眉間の深傷、眼もくらみ滅多切、此方も手弱き女の手業、數ヶ所の傷によろぼひながら、難無く押伏せ乘つかゝり、念力通すとどめの刀。監物太郎庭に飛降り、「オ、健氣なり千鳥樣、御心の操顯れ、疑は晴れたれども、此深手ではもう叶はぬ。心は如何に」といたはれば、苦しげに起き直り、「自とても殿樣の、お情受けし者なるに、樣子に依つてお國へは、叶はぬとありし時、酷い仕方と恨みしが、此しだらでは疑の、懸るは道理、私が因果と、諦めて居ますれども、兄弟の惡心故、自づと殿樣に御緣が斷れる、是ばかりが黃泉の障り」と、血汐に染みし五體を投げ、泣く聲奧へ聞えてや、一間の障子押開き、御臺は烏帽子狩衣を召され、悠々と立出で給ひ、「我こそ假の加藤繁氏、千鳥の前が誠を感じ、二世も三世も變らぬ契」と、のたまへば手を合せ、「嬉しき今のお詞は、我君のお詞より、忝さは百倍」と、につと笑ふが置土產、此世の緣は斷れにけり。「いとしやなう」と御臺の歎き、泣いて歸らぬ愛別離苦。「いざさせ給へ」と引立てて、「頃は薄暮、好き時分」と、せけばせかゝる牧の方、力なく〳〵立ち給ふ。形見は跡に心を殘す、著せし人は變れども、變らぬ烏帽子狩衣、假の浮世に迷はじと、悟り〳〵て出でたる主は、直に金色菩薩の位、歎き給ふな歎かじと、悟れば果敢なき花の宴、散りにし姿を殘し置き、本國にこそ立歸る。

第三

富んで奢らず貧しうして貪らぬは未可なり、富貴にして禮を知り、貧しうして樂めとは、弟子に示せし孔子の詞。大内之助義弘威勢九州にはびこり、自ら武運を朝日にたくらべ、橫雲將軍と尊號し、人もゆるさぬ高胡床、浮べる雲の上見ぬ驚、明日は我身もしらぬひの、筑紫の御殿と時めきける。伺候の諸武士も自ら、伸し上つたる大名形氣、中にも近習の關口隼人、御前に進出で、「豫て仰渡されし通り、近國の大名より、家々に傳はりし重寶、今日獻上致す筈、則ち

寶見分の役は、多々羅新洞左衛門と承る。夫につき彼が娘、お國に稀なる美人なれども、如何なる事か終に男の肌觸れず、生れのまゝなる生娘と、諸家中の風聞故、御手廻りの召仕にと存じ、上意と申してお次まで、呼寄せ置き候ひしが、御慰みに御覽もや」と、何がな御意にいらざる追從、お髭の塵を取りかける。義弘寛々と打頷き、「勅諚と傷り、諸國の寶を集むるは、某が謀叛一味の證、連判狀も古めかしく、氣をかへて人質の代にする家々の寶、まだ受取るには時刻も早し、其間に彼娘、ちよと顏を見ん。それ〳〵」と、仰にかくと云次げば、頓て御前に立出づる。世にすねて男選みに年長けし、新洞左衛門が娘ゆふしでは、終に殿御の肌知らぬ、おぼこと見えぬ洒落姿、髮の結目にさしたるは、梅花にあらぬ白羽の鏑矢、笄ならで簪か。「なんの御用でお召ぞ」と、案じる内も面はゆく、お書院近く坐しにけり。横雲將軍遙に見やり、「ゆふしでとはおことよな。ハレ見事、好い器量の。汝が親の新洞左衛門、忠と義とに固りし心より、かたくなに育てられ、麻につるゝ蓬とて、其方までが身持も堅く、一度も男に肌觸れぬと聞及ぶ。器量といひ風俗まで、あつたらしき日蔭の花、殊更男選みとあれば、疑もなき手入らずの大無垢、水上は此義弘、今宵から抱いて寐る」と、ほやりと笑ふしほの日は、仁王の戀する如くなり。ハツと思へどゆふしでは、態と額を疊に付け、「私風情の賤しき女、お寐間のお伽致せよとは、有難い事なれども、御臺樣の思召、一家中へ聞えても、女旱は行くまいし、家來の娘をわつけもないと、我君を笑はせますも如何、此儀は御免なされませ。ほんに誓文、殿樣を、微塵も嫌ひは致しませぬ。慮外も厭はずつべこべと、お詞背くも君が爲」と、辭義する詞の控綱、斷れもやせんと案じ居る。「ホウ、此義弘がいひ出す事、二言と詞を返す者、恐らくは覺えず。女に稀なる大膽者、出來したりさりながら、一天下の主となる某、十二人までは女房持つても苦しからず、否でも應でも妾にする」と、深くみいれし鰐の口、遁れる丈と手をつかへ、「冥加に餘る御意なれども、私はちと譯あつて、一生男に肌觸れて、身を穢す事ならぬといふ、申譯は頭にさしたる白羽の鏑矢、細な樣子は父上に、お尋ねあれば知れる事」と、いふに差出る關口隼人、「ハァゆふしで殿惡い合點。殿樣に惚れられるは此方の爲に福德の三年目、忝いとお受け申すが上分別、親御も浮み上る事。其頭に插いて居る白羽の矢が邪魔になり、仰向に寐る勝手が惡くば、デエ拔いて進ぜん」と、立寄るをむつとせき上げ、「こりや何爲やる」と突飛ばし、「親新洞左衛門が御前に居ねば、高なしの我儘。男持たぬはどういふ譯やら仔細も知らず、親までが浮み上る、いや果報ぢやの福德のと、慾に穢れた土根性。そんなむさい女子ぢやと思やつたら當が違ふ。マ、慮外ながら、サア手は愚、其方の延びた鼻毛の先でもさへて見や、赦しはせ

ぬ」と膝立直し、睨みつめたる理窟詰、云込められてしかなの隼人、手持無沙汰に尻ごみす。義弘居丈高になり、「小ざかしき女め」と、肩先摑んで引摺り寄せ、「女ろの餓鬼は十二三から、男を見ればびろ〳〵と、前後を見る當代。察するところ内證に隱し男を拵へ置き、其男への心中立、外の矢先は通さぬと云ふ心で、起請の代に此鏑矢、さして居るに違はせまい」と、矢を搔拋つて引起し、「サア不義者めが、名を吐かせ」と、責問はれてもゆふしでは、元とり覺えなみだ聲、「コハ無體なる御尋、私も木竹の身では無し、惚れてくれる殿御があれば、欲しう無うて何とせう。持つに持たれぬ譯あつて、脊丈延びた此年まで、人の數にも入らぬ身を、不便なともおつしやれず、酷いお主の心やな。さら〳〵不義の男は無し、疑晴れて給はれ」と、身を悔みたる恨泣、涙片手に詫びければ、「ヤアまだ男めを庇ひ居る。よし〳〵云はせ樣あり」と、口にはいへどさすがは戀、目顏で嚇し立つたり居たり、身悶えすればお次より、「ヤレ待ち給へ」と聲懸けて、立出づるは新洞左衞門、顰み返りし天のじやき、隼人はお座にたまりかね、「老人の御苦勞に、惡い所へ好うお出で、それに緩りとお遊び」と、云捨てこそ〳〵逃げて入る。娘を引退けどつかと坐し、「不義の相手が聞きたくば、某が申上げん。娘が隱し男は、辱くも我朝の神の司、天照皇太神宮、何と膽が潰れますか。したが、恁うばかりでは合點行くまい。コレ殿、耳を浚へてよう聞かしやれ。此お家大内の御先祖、伊勢兩宮を當國へ御勸請なされ、その社より一人づつお座子を取り給ふ、印には家の棟へ、不思議に白羽の鏑矢立つ、其役を勤めた我娘、一旦神に仕へし女、一生男を持たすまいと、誓の爲に神明の鏑矢を、頭にさゝせて不淨を拂はす、それを無體に拔取つて、妾にするの足懸のと、罰をかぶる御合點か。其上是まで頤の、かいだるい程諫めても、聞入の無い謀叛の企、今となつて異見せぬは、所詮いうても得心は召さるまい、ハテ毒喰はゞ皿舐れと、諦めてする奉公。ろくだまに望も達せず、榮耀らしい妾狂ひ、まだ早い、措き召され」と、病犬の咬付く如く、唯一口にわんとばかり、膠もしやりも無かりけり。性急なる大内之助、耐へかねてすつくと立ち、ゆふしでを宙に提げ、元の處へどうど投げする、「扨はいよ〳〵推量の通り、親め俱に呑込んで、内證に男があるな。我心に隨はぬ腹癒、眞二つに打放し、其男めに鼻明かせん」と、大太刀するりと拔放せば、わるびれもせず押直り、「父まで深きお疑ひ、曇無き身は天道が正直、お手に懸るが申譯」と合掌したる健氣さを、見やりもせぬ片意地親爺。「サア今こそ」と義弘は、父が顏を差覗けど、びつくともせぬいがみ面、「サア〳〵〳〵」と二度三度、嚇しの刃を振上げ〳〵、閃かしてもきよろりがみそ、「テモ扨もしぶとい奴等、エ、是非もなし是まで」と、既に危き太刀の下、「ナウ待つてたべ暫く」と、大内の

御臺走出で、「重々のお腹立、御尤とは云ひながら、戀ばつかりは嵩押に、云ふ程埒の明かぬもの、自にお任せあらば、何とぞ勸めて今日の内、お前の心に靡きやる樣、私が世話を致しませう」と、すかし宥める物ごしに、貞女のしるし顯せり。戀は曲者鬼にも涙、「情强きどちめらう、打殺してしまはんとは思へども、成れば又拾物、少しの間お身に預ける、返事が遲いと赦さぬ」と、詞の弛みに御臺は心得、「たつた今好いお返事を、お氣遣ひ遊ばすな」と、ゆふしでを引立てて、尾を踏む心地虎の間へ、伴ひ入らせ給ひけり。跡には主從物をも云はず、彼方は澁面此方は工面、睨合うて居る處へ、「國々の諸侯より、寶を持參」と呼はる聲、俄に繕ふ大將の、衣紋美々しく座を占めて、待つ間程無く入來る、青貝の卓恭しく、目八分に差上げて、二つ竝べし珊瑚の枕、「是は菊池の陶全姜が、寐た間も放さぬ重寶なれども、勅諚とあれば力無く、持參致し候」と、廣庇に押直す。次は豐後の友方大學、水晶簾を臺に据ゑ、「此簾はその昔、晉の國より渡りし寶、庭に懸くれば風を生じ、自然と雨を降らしつゝ、暑氣の時分は冷やりと、西瓜もどき夕立もどき」と差上ぐる。扨其次は肥前の國、海月式部が重寶に、白龍石といふ硯、「墨磨る度に硯より、己と水を涌出す、不性者には第一の寶なり」とぞいひ上ぐる。其外松浦五島の一族、筑紫表の國主城主、皆家々に傳はりし、名物寶を臺に据ゑ、廣緣狹しと竝ぶれば、見分の役人は新洞左衞門、腹は立てども其日の役目、ふしやうぐ〳〵に見改め、「孰も寶に相違無し。誰かある此品々、御藏の内へ納めよ」と、呼はれば伺候の武士、てんでに捧げ入る體に、先は首尾好く納まりしと、諸國の城主も安堵の胸、皆々旅宿に立歸る。遙に下つて筑前の城主繁氏の執權、物に騷がぬ監物太郎、寶も持たで悠々と、白洲の庭に入來るを、義弘つく〴〵打まもり、「九州の大名より、殘らず寶を差上げしに、加藤の家より何として寶は送らぬ。宣旨を背くか但しは氣儘か、返答せい」ときめ付ければ、ちつとも動ぜず、「御尤の御不審、勅諚とある上、いかで違背の候ふべき。併し筑前は小國故、差上ぐる寶は無し」と、いひも切らせず、「さうは云はせぬ。大名の家に寶無くて、家督の繼目は何を以て規模とする」「イヤ我國は仁義禮智、五常を寶として國家を治むる。但し此お國には、器財を以て寶とし、君子の教を寶とはなされぬか」と、理窟を詰めて云ひ込むれば、元より不才の大内之助、返す詞も無き所を、耐へかねて新洞左衞門、目玉を剝出し、「コリヤ〳〵監物、夫は唐土臨潼の會に、善を以て寶とすと、伍子胥がいひし口眞似、喰はぬく〵。加藤の家には齊國より渡りたる、夜明珠といふ名玉ある筈、今玉女神と神に仰ぎ、尊敬する事紛れ無し。是非玉を渡さずば、大軍を以て押寄せ、家國共に奪取る」と、退引させぬ手詰の難題、此場を遁れて分別と、無事を繕ふ當座の請合、「玉女神を

夜明珠と御存じなれば力なし。成程寶珠を渡し申さんさりながら、年を數へて二十と限り、終に男と肌觸れず、交合の道を知らぬ女あらば、玉を迎ひに越さるべし。若しも年に過不足あるか、一度でも男に肌觸れ、身の穢れたる女の手に携へ持てば、忽ち玉の光を失ひ、石瓦の如くとなる。其割符の合ふ女があらば何時でも、玉を渡すに相違なし。某は先お暇」と、立歸るを、「待つた〳〵、使の女是にあり」と、走出でたるゆふしでが、御前に向ひ頭を下げ、「不義の男があるゆゑ、晴心に隨はぬとのお腹立、其お疑晴らすため、終に妹脊の道知らず、身を穢さぬといふ申譯、此お使を私に、仰付けられ下され」と、思入つてぞ願ひけり。監物太郎もぎよつとせしが、「コリヤ〳〵、身の穢れぬが定ならば、いかにも玉は渡さうが、見事寶の見分するか」と、何がないうて困らす思案、「ヲヽ、氣遣ひすな、其見分は此新洞左衞門、娘に連立ち行くからは、贋物は摑まぬ〳〵。シタガやいゆふしで、其方には惚れた人がある、此方の體は淸淨でも、他から穢を添ふるといふもの。ソレ其和郎が思斷るとお云やらねば、使には行かれまい」と、戀慕の絆を斷らせんため、大内が耳に打て響けを、聞流して不興顏、返答も無く座を立つて、駈込む向ふへ御臺所、立塞がつて、「申し殿樣、女一人に繫がれて、大切なる夜光の珠、此度受取り給はずば、禁裏表の首尾も如何、ゆふしでをさつぱりと、思斷つたる證據を見せ、使を仰付けられよ」と、彼方此方でせこめられ、當惑したる大内之助、何思ひけん振返り、後に懸けたる弓押取り、件の鏑矢引番ひ、「命に替へて某が、思込んだる戀なれども、大望成就の妨げなれば、此戀ふつ〳〵思斷る、證據の鏑矢受取れ」と、切つて放せば松の木に、はつしと立つたる有樣を、ゆふしで悅び走寄り、矢を拔取つて押戴き、「此お使を爲果せなば、枕一つで二十まで、ねゝした事を世上へ言譯、君の心も晴々と、曇らぬ女の鏡にせん」と、帶引緊める親子の勇み、監物太郎を先に立て、白羽の鏑矢鬢に、插しかざしてこそ　三重定め無き、世を憂き事に見限りて、遁世ありし繁氏卿、歸國と僞り石童を、跡目に立てて監物太郎、國家を治むる智仁勇、三國名譽の夜光の珠、玉女神と勸請し、秋の最中の祭日に、館賑ふばかりなり。御臺牧の御方、石童君を伴ひ、廣書院に出で給へば、執權監物が女房橋立、神事の祝儀申上げ、「夫監物太郎、大内義弘の招きに依つて參られ、御寶の御神事に外れし段お赦しーと、斷り申せば御臺所、「心善からぬ大内の呼寄、我夫の行方は知れず、石童は幼少なり、何云越さんも計られず。只懷しいは繁氏卿」と、卿ち給へば石童君、「母樣氣遣ひ遊ばすな、追付父樣の有所を尋ね、私が迎に參ります」と、大人しやかな諫には、涙も止る折からに、國一番の濡男、其名自然と女之助、兄監物が勘當受け、詫を賴みの奧書院、うぢ〳〵として入り來る。御臺は何のお心無く、「珍しや

女之助、此程若も尋ねしが、何故登城召されぬ」と、仰にハット頭を下げ、「私儀不行跡故、兄監物太郎が勘當受け、それなる橋立殿を頼み、様々詫びれど聞入れ無く、是非に及ばず今日は、若君様や御前様の、お詞をかる所存、恐れながら然るべう、賴上げ奉る」と願ひを聞いて御驚き、「テモ扨も、堅い其方が何越度、軍法祕密の論議でも、しやつた上のいさかひか」と、尋ね給ふを傍に聞く、橋立は吹出し、「御臺様の、彼の人を堅いとはお目違ひ、其柔かさ自墮落さ、軍法論議はさて措き、女中論議で家中は大もめ。お上にも御存じの、前の内儀お埒殿は、夫監物太郎都より貰ひ歸り、夫婦に致され、退引ならぬ女房を、子持になると乳臭いとて離別して、お物師のお縫殿とちんく。夫も續かず、弓頭の娘おつるを娶り、持つと往なして、お妙の長門殿。夫から仲居お茶の間の、白髪交りも色めいて、其處では悋氣此處では喧嘩、何から起れば女之助、私が夫ぢや殿御ぢやと、云募つて大騒動。堅い夫が面汚しと、勘當せしも無理ならず」と、語れば御臺も興醒顔、若君何の差別なく、「女之助はいかい苦勞、それから其喧嘩の仕舞、どうなつたぞ」と、根問にほつと行詰り、「其ソノ跡の儀は、面目もなき仕合」と、誤り入りし風情なり。御臺もをかしく、「若氣の至も餘り興がる、以後は嗜む心なら、倶に詫して得さすべし。幸ひ今日は御玉の祭、玉女神の御前にて、金打させん此方へ」と、立入り給へば「有難し」と、

石童君を御供し、奥を指してぞ入りにける。程無く歸る監物太郎、大内が難題胸に釘、打つて變りし思案も無く、廣間へ通れば妻の橋立、「義弘よりの呼寄、如何なる事ぞ心もとなし、及ばずながらお聞かせ」と、尋ぬれば、「さればの事、大内義弘は都の勅と僞り、近國他國の寶を集むる、是正しく謀反の下拵へと見拔きし故、我國には寶無し、仁義禮智信の五字を以て寶とすと、伍子胥が辯をかつてまんまと云伏せしに、多々羅新洞左衞門と云ふ奴、夜光の珠の來由を知つて、汝が家に玉女神と崇むるは、齊國より渡りし夜明珠、寶無しとは云はせじと、明白の一言、爭ふにも爭はれず、成程其寶あり、併し尋常の者たづさはる事叶はず、二十と限つて交合せざる女あらば、受取りに越されよ、男女の別知つたる者が手に觸るれば、忽ち珠の光失ふと、言傳へを難題に、當惑させんと思の外、かの新洞めが娘當年二十、まだ是まで不犯にて、此役目を乞ひ請け、親子連にて受取りに來る筈。代々加藤の家の重寶、渡さば家滅亡、厭といはゞ大軍を以て攻來らん。さすれば御臺若君のお命も危し。兎やせん角やと胸はどうづき、思案も有らば云うて見やれ」と、語るを聞いて女房は、ほつと溜息吐きながら、「只此上は贋物を、急に拵へ渡さうより、外の事は」と云ふを打消し、「イヤ〳〵其儀も思付けども、うつかりと受取る新洞左衞門にあらず、ハテどうがな」と大ずるの、骨も碎くる一思案、及ばずながら橋立

も、智慧の袋の棚捜し、暗がりさがす如くにて、暫し途方に暮れけるが、「イヤ申し、かやうな時は膝とも談合と申します。幸ひ弟御女之助様、勘當の詫にお出で、機嫌直され倶々に、御相談は」と、いふに暫く工夫を運らし、「ム何、弟の放埒者、奥へ參つて居るとな。ホ、ウ好き相談對手、思付あり女ども、汝も來れ」と立上る、心知らねど橋立も、夫の詞を力草、伴ひ一間に入りにける。暫くあつて「大内よりお使者」と呼はる聲につれ、月と雪との眞中に、花と眺める後帶、男選みのゆふしでが、かた笄の濡髪に、さいた白羽の鏑矢は、伊達か僭上か風俗も、しとやかに立休らひ、「誰そ賴まん」といひ入るゝ。かゝる對手に相應の、女房選みの女之助、「いざお通り」と云ふ内も、思含ます目遣に、可愛らしさが身にこたへ、互に顔を見交して、上座へ通れば橋立が、やがて出迎ひ頭から、しつぽりむきの挨拶にて、「是は〳〵女中の、御苦勞にようこそお出で。自は監物太郎が女房、橋立と申す者、又是なるは主の弟御、女之助と申して、武道は勿論歌の道戀の道、竝ぶ方無き優男、則ち今日の御馳走役、御用あらばあの人へ」と、猫に鰹の引合せ、如何な釋迦でも精進を、落ちても見たき心なり。女同士こそ此方もにこやか、「テモいかいお心遣ひ、私はゆふしでと申して、まだ人數にも入らぬ女、かやうな役に參る筈は無けれども、人好あるお寶物、親新洞左衛門はお次に控へ、マア其方が受取つて來いと、不相

應な役目を受け、案じ〳〵參りしなり、事なうお渡し下され」と、詞の中より、「何が扨、お渡し申さいで何とせう。夫も只今罷歸り、お藏の掃除、暫くお隙が入りませう。ヤ幸ひ今日はお玉の祭、神前へ供へしお神酒頂戴遊ばし、不淨を清めお受取り。それ〳〵神酒」といふに任せ、對の德利を三寶に、下女が携へ差出す。女之助近く差寄り、「敵を招いて毒酒を盛り、約を變ぜし例もあれば、毒味致して進ぜう」と、神酒を兩方つぎあはせ、土器に十分と受け、つゝと乾してゆふしでに、「頂戴あれ」と獻しければ、「是は御念の入りし事、緣につれたる神の酒、何お疑ひ申さん」と、一つ受けて飲む酒の、忽ち五臟に浸渡り、亂れ懸りし顔の色、行儀も崩れ土器を、女之助へ差戻す。サアしてやつたと橋立が、態と咄も打解けて、「近頃卒爾な事ながら、頭髪にさゝれし白羽の矢は、如何なる故ぞ」と尋ぬれば、「是こそ私が殿御を持たぬ申譯、幼き時此白羽、家の棟に立ちしより、神のお伽のお座子となりしは幸ひ、よい男好いた殿御のあるまでは、人目の關の此白羽、片時も放し候はず。あはれ此矢を貰ふ氣な、お人があらばやりたし」と、女之助が傍近く、にじり寄りたる亂れ咲、花ならば折れ、折る人は、主樣ならでと縋り寄る。爰ぞと俱に摺寄りて、抱著く程に思へども、傍に見て居る兄嫁の、手前を恥ぢて薄紅葉。高を締めたる橋立が、傍から焦つて、「それ其處を、じつと引寄せ引繋めて、二世の堅めが

是迄の、不義徒のかへり花、仇花ならば御無用」と、そやし懸ればゆふしでは、「テモ粋な兄嫁御、悪性男を私が手で、こなして見せうがくだんすか」「仰に及ばず互の縁づく。したが口先ばかりにて、どうのかうのは皆浮氣、誠をいはどあの一間、其氣が無くば措かんせ」と、はりかけられて、「イヤ申し、戀は親にもお主にも、見かへてするが女の意地、跡へは寄らぬコレごんせ」と、女之助を引立てる。是ぞ工の臍落と、思へどどうやら恥かしく、尻込するを橋立が、「鬼も賴めば人喰はぬ、入らざるお辭義」と無理遣りに、手早く跡より押しやつて、一間をぴつしやり閉すとはや、内陣ひつそとしづまれば、繻子の帶鳴るばかりにて、物靜にぞなりにける。橋立四邊見廻して、女之助の放埒も、禍三年時の用、仕果せたりと思ふ所へ、多々羅新洞左衞門、生付いたる氣は苛ち、待久しくて次の間より歩出で、「コレ女中、娘は寶珠を受取つたか、まだかどうぢやぞ聞いておくりやれ。べら〳〵何して居る事ぞ」と、膨れ返つた髭面を、引延ばさんと橋立が、やがて床几を參らせて、「誰そ莨盆お茶持て來い」と馳走振。「イヤ茶は喫べぬ煙草は嫌ひ、滅多に馳走召されても、受取る物に遠慮は無いぞ。床几は役目、恩には被ぬ」と、腰打掛くる其内にも、橋立は一間の首尾、如何と思ひ立ちつ居つ、狼狽へ廻るを、「コレサ女中、きよろ〳〵と何しめさる。待ちかねて烏帽子首、強ばり申す、と云うてくれめせ。但しは直に行かうか」と、立上れば、「ア、これ申し、今が祭の最中」「ナニ祭とは」「イエイナ、かの夜光の玉のお祭」と紛らかし、隙取る手段に傍へ寄り、「お家の祭は、先最初が鼻高、其鼻の長さが三間半、男にしたら廢り者。次が御輿と提灯、其提灯が餅搗いて、事の埒が明かぬかと、いかう私は案じます」「ア、これ、神事の咄聞きには參らぬ、御玉ばかりを受取るに、かやうの隙入合點行かず」と、睨み廻せば、「オ、けうと、輕はずみに何ぞいな。玉といふに愚は無く、唐土には卞和が璧、我朝にては驪龍の玉、伊勢の國にはお杉とお玉、飛んだは人魂怖いは日の玉、下女の玉でも輕々しう、受取らるゝものかいな。マアお前はお幾つで、お名は何と申します」「ハテ面倒な事を尋ねる、名は新洞左衞門年は六十」「シタリ」「何ぢや」「テモ扨も〳〵〳〵、さつても若いお顏の」「ア若うござる」「お耳も聞えお目も好いかへ」「耳も目も好ござるてや」「お齒はへ」「夫も好いてや」「サア其好い内から人は養生、折々疝氣も出ようがな」「ハテ出ようと儘さ」「イエイエ、さう氣を苛つがいかいお毒。それ〳〵頭によつぽど白髮、デエ、拔いて上げましよ」と、立寄れば突飛し、「エ七面倒な女め」と、傍に立つて大聲上げ、「ヤア〳〵娘、夜光の珠を受取りしか、何して居るぞ」とつかうどに、呼はる聲の響きてや、心靜に寶塔を、携へ出づるゆふしでが、跡に續いて女之助、出づるや否や尊敬し、「忝くも寶塔の、内に籠たる御玉は、闇を照す

こと日輪よりも明かなる故、夜光の珠とはなづけたり。斯程貴き御寶を、輕々しく受取られし、ゆふしで殿は仕合」と、挨拶すれば、「皆是お前のお世話ゆゑ」と、表向なる互の辭義。新洞左衞門笑壺に入り、「ホヲ、娘、寶を異議なく受取つたか。出來した〳〵。併し某見分の役、改めるため拜禮せん。孰れも俱に拜まれよ」と、云ふに隨ひ女之助、橋立俱に頭を下げて、ハツトばかりに敬ひ居る。ゆふしで心に信を取り、「何方も珠の御威德、拜み給へ」と寶塔を、開き見すればこはいかに、まつ黑々と黑玉の、墨をつくねし如くにて、是はとばかりゆふしで親子、女之助も橋立も、俱に呆れし顏付にて、暫し詞も無かりしが、新洞怒つて、「ヤア大盜人の監物太郎、改めずんば贋物を、持たして歸すたくみよな。イデ寶藏へ踏込み、摑んで來ん」と、駈行く向ふをさつと明け、內より飛出る監物太郎、贋をくろめの白々しく、「コリヤ〳〵新洞、先達ていふ如く、不淨の女が受取らば、玉の光を失ふと云ひしは爰ぞ。其女に詮議が懸つた。其處退け」と、打つて變りし詮議のうら釘。いがみ懸つて橋立が、「コレゆふしで殿、身に覺あるならば、有りやうに白狀あれ。一間の內で不義がましい、淫な事は無かりしか」と、まざ〳〵しげに問ひかけられ、何と言譯ゆふしでが、すべき樣無く髮に插す、白羽の矢をば拔くとはや、矢の根を咽に突立つる。是はと驚く人々より、半狂亂の新洞左衞門、抱擁へて、「コリヤ娘、わりや何故に自害する。言譯無くば無いやうの、思案も有らうに情ない。大事の娘を殺すか」と、さしもに猛き武士の、子故の闇に目も暗み、だうと坐りて泣居たり。今を限りのゆふしでが、涙片手に、「ナウ恥かしや。自は此お館へ來るよりも、さるお人をば思初め、情の道に迷へども、大事の役目と心の駒、繫ぎ留めしを情なや、御內寶のもてなし酒、あれなる神酒を飲むよりも、不思議や五臟に浸渡り、大事を忘れ何のその、まゝよの上にはり持たされ、つい下紐を解きそめて、是非なく身をば穢せしぞや。言譯ならぬいたづらを、詮議に逢うて恥かいて、かく成りゆくは神の罰、神明怒りの鏑矢に、射殺さるゝと覺悟して、死ぬる心の悲しさを、推量して」と泣く涙、袖に餘れば血に染みて、見る目もいとど哀なり。樣子を聞いて新洞左衞門、すつくと立つて走寄り、娘がいひし神酒德利、兩手に摑んで、「ヤアラ心得ず。もつとも若氣といひながら、左程亂るゝ娘にあらず。仔細は此中、顯はさん」と、緣のかまちに打付け〳〵、打割る中より守宮のつがひ、顯れ出づればしつかと捕へ、「扨こそ〳〵。唐土張華が博物志に、交合の守宮を引きわけ、酒に浸して其氣を呑ませば、忽ち女の心亂すと書きあらはす。其理を知つて娘に呑ませ、性根を亂しいたづらさせ、身が穢れた故光失せしと、科をこつちへ塗りつけて、贋物渡す下ごしらへ。扨たくんだり拵へたり。憎さも憎し不義の相手、是へ出せ、ずだ〳〵に、

ためして胸を晴さん」と、三寸魚板見抜きし兩眼、睨付けてぞ詰寄する。ちつとも臆せず女之助、「其不義の相手は某、御存分」と押直る。「ヲ、好き覺悟、觀念」と、振り上ぐる劍のかげ、「ナウこれ待つて」とゆふしでが、苦しむ體に氣も弱り、心も折れてせん方も、なくより外の事ぞ無き。苦しき中にも親の顏、じろ〳〵と見て、「おいとしや、親一人子一人の、私に別るゝお前の心、悲しい上にお腹も立たう。さりながら、假令守宮のわざならずと、一寸見るから思初め、心が先へ穢れたもの、帶紐解かずと御寶の、光失せいで何とせう。假の契も二世の緣、枕交はせばわが殿御、聟は子といふ世のならはし。私が死んだ跡にても、形見と思ひ懇に、おいとしがつて下さんせ。お主樣も父上を、親と思うて折節の、訪ひ音づれを賴みます。親に先だつ我心、推量して可愛やと、思うて一言未來まで、夫婦と云うて下され」と、しやくり上げたる哀さを、見るに身に沁む橋立が、せめての事と介抱し、「萬事を胸で諦めて、詞に出ねど心には、嘸みづからが憎からう。言譯するにもしられぬしな、皆是前世の約束と、思ひ諦め給はれ」と、歎けば俱に女之助、「是まで盡せし惡性の、とゞめとなつた今の悲み、未來は扨おき後々萬劫、契は變らじ夫婦ぞ」と、云ふ聲耳に經陀羅尼、物も得いはず嬉しげに、合す兩手が暇乞、あへなく息は絶えにけり。わつと泣出す新洞左衞門、地鞴蹈んで、「ヘエ、しなしたり情なや。我堅意地な心から、一生夫は持たさぬと、云うたを誠と思詰め、あへない最期を遂げけるよ。未來で夫婦と悅べども、悲しむ親が此世から、夫が見えるかたはけ者。思出す事ばつかりを、いうて死なずと便無き、此身を早く迎うてくれ。六十越して子に離れ、何を賴みの娑婆世界、情なの我身や、不憍な娘の最期や」と、しやくり上げたる一徹涙、堤も切れて大川に、泥の淵なす如くなり。共に哀と人々の、歎きの内に監物太郎、彼寶塔を目通りに据ゑ、女之助を引直し、「汝このごとく光を失ひし不義の相手、討つて渡す覺悟せよ。サア新洞受取られよ」と云ふ聲に、涙拂うてすつくと立ち、「ヤア人そばへすな其手は食はぬ。義理立てせば助けうと思ふか、いつかな〳〵。眼前娘の敵人手は賴まず、我手に懸けて眞二つ、恨を霽す。其處退け」と、飛びかかつて拔討に、はつしと切つたは件の名玉。是はとばかり人々は、呆れて詞も無かりしが、女之助聲を懸け、「手が廻りしか新洞左衞門、急かれずともサア首」と、差付くれども目に懸けず、切割りし玉引摑み、「己陰陽和合を嫌ひ、よう光失うて、娘に自害させたなァ。我子の敵思知つたか、加藤の家の名玉は、目利の目からは悉皆藍玉、持つて歸り主君に見せ、恥あらはして腹癒てくれん。必ず跡で其玉は、贋物などと爭ふな。眞の贋があるならば、石童や御臺に持たせ、早く此家を捨てさせよ」と、いひ敎へたる詞の裏、表は怒り心には、せめて娘が手向とも、な

れよと懸ける情をば、袖に隠して立歸る。折よしと御臺若君、駈出で給へば女之助、「新洞が詞の端、御兩所の身の上氣遣ひ。幸ひ我君高野に御座あるとの風聞、夫を力にお供せん。いざさせ給へ」と勸立て、伴ひ出づれば監物太郎、「ヤア待て弟、汝生れついて好色者、未だお若き御臺所、預けやる事覺束無し」と、いふよりやがて守宮を引裂き、滴る血を腕へ塗付け、「是見給へ兄者人、守宮は不義を勸むれども、其血は却つて不義顯す。唐土秦の始皇、三千人の宮女に不義あらんかと疑深く、殘らず臂に是を塗る、不義ある者は忽ちに、落ちて跡無くなる例、さるに依つて守宮といふ字を、宮女を守るといふ心で、宮守りと書傳ふ、我朝にては萬葉集、脫ぐ沓の重る事のかさならば、守宮のしるしかひやなからん。沓重りてさへしるしは落つると詠みし歌、まして三代相恩の、お主に對して不忠不義、天命いかで」と云はせも立てず、「ヲヽ出來した、行け」と一言が、兄の情の餞や、御臺若君立別れ、高野の山の峯にある、我夫諸共歸りこんと、つらね給ひし言の葉も、それはまつとしまつまでは、「お名殘惜しや」と橋立が、駈寄るを押隔て、互に「さらば」「おさらば」の、聲を力に忘れ草、伴ひ館を出で給ふ、くにに思や殘るらん。

第四　道行越後獅子

唄　踊り來て、是の大門眺むれば、エイソレ七里、大もん花でかどやく。花を見捨てて憂き事に、憂きを重ぬる玉鉾や、繁氏の御臺所、石童丸の御手を引き、女之助が御供にて、君は高野にましますと、夫を力の忍草、笠にはあらぬ越後獅子、習はぬわざに太鼓笛、吹くや追風に帆を上げて、國を出船の日和も好く、はる〴〵きの路かだの浦、あがる朝日に摺れ違ひ、爰より歩行の草鞋がけ、沖の鷗におき別れ、誰かまつ江と聞くからに、辻占よしといそ〳〵傳ひ、跡に心は殘らねど、引戻さるゝ砂道は、歩めどはかの行き惱む。げにや世に在る身なりせば、名所古跡も訪ふべきに、今は耳にも目にも見ぬ、小家がちなる軒のつま、煙賑はふ峯々に、霧立ちのぼる絶間より、ほころび出づる山々は、野飼の牛の口を執る、草刈童の月代に、似たぢやないかと高笑ひ、似たは化けたか狐じま、睫毛ぬらせる袖の霧、松に殘りし嵐と共に、野邊の草葉もかれ〴〵に、いつも變らぬ冬景色、落葉も霜に埋れて、木の下蔭の寂しきは、在所離れて北島の、渡り急ぎし舟呼ばひ、川の流れに水鳥の、羽を伸す音に驚きて、人目防ぎと舞ひ奏で、櫻木踊の拍子とり、唄　櫻木を、枝にふきわけ門に立て、門の光で庭も輝く。さくらぎ、北山の

櫻のやうなる、殿がな女郎がなと、歌ふ聲さへ和歌の浦、こゝは寡婦のかたをなみ、お茶は摘まねど都にまがふ、所の名さへ宇治と呼ぶ、月を慕ふか雨を招くか、ろはんにあらでかけづくり、お宿〳〵と招かれて、「まで日は高い、先が急ぐ」といひ捨てて、逃げて、のがはの觀世音、歩みながらに遙拜し、齡を祈る松島や、千代に八千代に、さゞれいはでを跡になし、ふりかへり見る故里は、あれかあそこかあの邊りかと、空にしるしのかひも無く、みだれ、みだれみだるる白雲の、風に誘はれ鐘の聲、はや入相に、程は長田の里つゞき、誓を頼む粉川寺、惠もふかき法の友、胸に木札の順禮も、願ふは二世の道しるべ。我々とてもあの世まで、伴ふ主の御在所、尋ね三谷を過ぎゆけば、高野も近し我君に、やがておほづと聞くや嬉しさに、道を急いでしやな〳〵と、紀の川上にぞ　三重つき影に、光を添ふる法の道、高野山の繁昌に、つれてはびこる麓の里、かぶろの宿の賑はしさ。都方より參詣に、鄙の道者もうち交り、泊競りあふ旅籠屋の、内騒がしき黄昏過、同じ浮世に人忍ぶ、身はならはしよ旅の空、筑前の三人も、宵よりこゝに假の宿、笠も草鞋もとく〳〵と、寐られぬまゝに御臺所、石童丸の御手を引き、障子を開いて次の間へ、立出で給へば女之助、跡に引添ひ歩みいで、「誠や人の盛衰は、定め難しと申せども、繁氏卿御在國ましまさば、錦の褥に御身をそへ、透間の風も防がんに、かく淺ましき旅泊の轉寐、いたはしさよ」と頭を下ぐれば、共に悄るゝ涙を隱し、「我々親子が苦勞より、若い其方が心遣ひ、長の旅路を主なればこそ、忝いぞや嬉しいぞや。死んでも忘れはしませぬ」と、のたまふ顔の艶やかさ。旅疲でさへアノ御器量、さて美しやと思ふより、ふつと目の著く煩惱心、例の持病の好色が、ほに現れて、「是はしたり、改つたおつしやり樣、忠義といふは付けたり、長々の道中を、お前樣のお供して、何の苦勞に存じましよ。我君の御座ると風聞する、高野山へはもう四五里、明日はたしかにお逢ひなさるゝ。さぞ明晩はしつぽりと、久々の溜水、人目堤の切れ口を、御用心あそばせ」と、仕懸けて見たる問藥、己が病に配劑の、加減は常の如くなり。「マアあの人のつがもない、たとへ夫に逢うたりとも、御出家の御身なれば、其樂みは斷れてある。只歎くのは國の騒動、大内を亡し、此若を世に立てる御相談、一先國へお供して、立歸りたい心の願」「若し其上の御得心、還俗でもなされたら」「ハテ其時は」とばかりにて、袂溢るゝ靨には、いとゞ思や增るらん。媚く詞を付け込むしれ者、じり〳〵と傍に寄り、「成程仰しやればそんなもの。併し一旦浮世を捨て、御出家なされた御主人、何程におつしやるとも、よもや還俗はなされまいが、又殿樣にも無分別、是程綺麗な美しい、旨い盛りの御臺樣を捨置き、坊主になるとはどうした御思案、第一强い不心中。此間から道中で、つくづく

と存ずるに、ほんに私らがお前の樣な女房を持つたなら、戴いて居る合點、何と談合なされぬか」と、云ひしなづつと立寄つて、後より抱きしめ、「何と〳〵」と頰摺を、髻でするこそうたてけれ。御臺は呆れて詞無く、振放し飛びのきて、「コリヤ女之助、其方は氣ばし遊ふたか、餘りで物が云はれぬ。石童丸も聞いて居るぞよ。國元を出づる時、監物太郎が念に念、誓を立てし守宮の血、臂にまで塗つたぢやないか。まだ廿日にもなるならず、夫程の大事を忘れ、人で無しめ畜生め」と、やり込め給へば思案して、コリヤ色とりでは行くまいと、きつさう變へてけら〳〵笑ひ、「いかにも國を出る時は、さう思うて出たれども、一月足らず夜も晝も、テモ好い器量、又あるまいと、見る度に思の種、勝りこそすれ忘られず。も云ほか〳〵と、こらへ〳〵ていひ出す今夜、命懸で惚れた戀、厭とあればお二人を、手に懸けて拙者も自害、ヲツトとあらば何時までも、こつてりのちん〳〵。サア手短にお返事」と、指添を拔放し、大惡無道に一心が、据り切つたる眼付、天魔の魅入と知られたり。石童丸は稚氣に、何の頑是もなみだ聲、「死ないで叶はぬ事ならば、父樣に廻り逢ひ、其後死なう夫までは、母樣もお詫言。女之助も堪忍しや」と、あどなき詫も武士氣質。御臺は泣くにも泣かれぬ時宜、燃立つ胸を押ししづめ、「命に懸けて自を、夫程思ふが誠なら、兎も角もなるべきが、せめて殿樣に廻り逢ふまで、了簡して待つてたも」と、のたまへば、「ならぬ〳〵。是まで欺すが皆其手、そんな甘ちや〳〵には陷らぬ我等。ハテ厭なれば、息子殿から殺してのける。子が可愛くば合點して、夜の更けぬ内ほめいてしまを」「イヤ夫でも」「夫でもとは厭な氣か」「サア〳〵〳〵」と座敷の内を、彼方此方とつけ廻せば、御臺は足の踏みどもなく、若君をかき抱き、「コレ麁相しやんな、ア、危い〳〵」と、慄ひ〳〵奥の間へ、引外して逃入り給ふを、「どうでも遁さじ、返事は」と、續いて一間に駈入りしが、ごんと一聲釣鐘の、音凄じく鳴響き、驚かされて見し夢は、跡無く覺めて　三重旅姿、慈尊院の緣ばなに、主從三人笠傾け、前後も知らず臥し給ふ。猶も續いて寺々の、鐘鳴る音に女之助、むつくと起きて月影に、四邊を見廻し、「此處はどこぢや慈尊院、扨は今のは夢であつたか。ハツア難有や嬉しや〳〵、ほんに夢ぢや、忝し」と、天を拜し地を拜し、悅び傍に座を占めて、「エエ我ながら情なき根性かな。明暮御臺を見るたびに、さりとは惜しいお姿、お主ならずは詢きおとし、我妻にせんものと、思ひそむるは日に幾度、我身で我身に異見を加へ、勿體ない恐ろしいと、又思ひかへて心を改め、忠義を盡すと思へども、生れ付いての色好み、淫犯の病を顯し、夢の内とはいひながら、主君に對して不義を云ひかけ、剩へ討ち奉らんとしたりしは、よつく武運に盡きたか」と、暫し涙に暮れけるが、飛退さつて頭を下げ、「御臺樣若君樣、夢の間の

不義不屆、眞平御免下され」と、恐入つての三拜九拜。親子の人は正體なく、寐入りし額に汗たら〳〵、魘はれ給ふに走寄り、「申し〳〵」と搖り起せば、二人ながら起上り、顏を眺めて、「ヤア其方はまだ寐ずか」と、齒の根も合はず面色變り、若君を押圍ひ、立退き給へば南無三寶、夢とは云へど通ぜしよと、胸に磐石押しこむ如く、せつなき心を押鎭め、「お疲も出でしにや、魘はれ給ふに驚きて目を覺し候」と、云ひくろめても氣は濟まず、案じ煩ひ居る處へ、群り來たる人音に、何事やらんと女之助、立上つて眼を配り、「たとへ道行く旅人たりとも、見咎められてはお爲惡しょ。御兩所は笠深々、田舍道者の臥したる體、拙者も暫し隱れん」と、兎角しつらひ片蔭へ、忍びて樣子を窺ひ居る。程無く來る大勢は、かぶろの宿の百姓ども、中にも庄屋が智慧有り顏、「コレ皆の衆、此所の殿樣、大內之助義弘樣がノヨ、遙々の海山を越え直に登つて、繪圖をみんなに一枚づつ渡してノヨ、此繪圖に合うた者を、縛つて來いとのいひつけでござるよ。三十許りな好い女性とノヨ、十許りな美しいちつぺいとノヨ、又三十餘りな色どり男と、どうやら人の女房を、息子共に盜んでかけおちなどと見えるぞや。どうでも難かしい尋者、見付けたら金になりますらよ。共吟味に精出さしやれ。誰が縛つても庄屋だけ、褒美は俺と半分分けノヨ。斷つて置いたぞ」と、云ふを聞きかねしやばり出る、所でちつと理窟者、男を磨く玉屋の與次、朱鞘の大だら落し差、立ちはだかつて、「コレ爰な庄屋殿、拔作でも身內が慾ぢやの。近年は代官に好い人がわせた故、所も騷がず物靜で好かつたに、何やら又いひ出して、代官所へ呼付け廻り、ちつと許りの褒美であろが、澤山さうに三人まで、縛つて來いとは旨い殿樣。欺されておぬく殿が、縛つたら褒美を取る、ハ、ハ、、何處へ褒美。わごりよの樣な旨い和郎に、縛られる人間があるものかいの。役に立たぬ口叩かずと、サア早く去にませう」と、先に立つを、「コリヤ待て玉屋。われが今の言分を、此智慧者が勘辨するに、褒美が少けりや、見付けても取逃す思案ぢやな。さつきのいひつけをどう聞いたぞ、庇ひ立は成らぬぞよ。お尋者を助けたら、助けた者の首ころりノヨ。是も斷つて置いたぞよ。サア〳〵いづれも去にがけに、慈尊院の境內を、探していのぢやあるまいか。若しもかどんで居よつたらノヨ、餘程な拾物」と、大勢引連れうそ〳〵と、二人の寐姿見付け出し、「コリヤ〳〵爰に何やら居るぞ。縛れ縛れ」と立懸るを、女之助飛んで出で、「何奴なれば旅人を脅かす、近寄つたら撫斬」と、きつぱ廻せど事ともせず、「爰に居る大金を、攫んで去ぬる」と取卷くを、「ヤ汝等は人賣か盜賊か、目に物見せん」と刀の電光、無二無三に切懸くれば、風に蜘蛛の子散らすが如く、逃散りながら口々に、「ヤイ〳〵玉屋、算用の合うた三人、見ぬ顏して助けるか」と、庄屋の一言聞捨て難

く、拔合せて支へたり。「扨はおのは盜賊の張本か、一人も餘さじ」と、女之助は根限り、火水になつて切結ぶ。死物狂ひにさしもの大勢、與次は元より構はぬ氣の、人が逃ぐれば共逃に、逃げて跡なくなりにけり。長追せば惡しかりなんと、刀を納めて二人を呼出し、「かく行先を盜賊に圍まれては叶ひ難し。此間に御供して、何處へなりとも立忍び、夜明けてお山へ登らん」と、いさめ申せば尤と、御臺若君甲斐〳〵しく、帶引きしめて草鞋の紐、結ぶ間遲しと三人は、跡をも見ずして　三重雲隱れ、星の逢ふ夜と結合ふ、かぶろの宿の玉屋の與次、内には水が月影の、させども宿へ歸らぬは、心もとなの日暮過、妻のお埒は埒明の、夜なべを捨てて圍爐裏焚く、自由自在なわが世帶、鑵子に沸るひと煎じ、女夫の中のこつちりの、出花も妹脊の端香かや。娘かどたは門の戸を、閉すと居眠る宵惑ひ、「コリヤそこなお船頭、モウ船を漕出すか、ほんにやれ〳〵嗜めよ。つれあひ與次殿は、終にお代官の顏も見ぬ人、それに今日呼びに來て今に戻られず、おれよりマア其方が案じる筈。なぜといや、アノ與次殿とはなさぬ親子、今にでも戻られ、眠たさうな顏見せて、心の義理が立つものか、寐所でもして置け」と、呵るも親身聞くもおろ〳〵、「母樣こらへて下さんせ、昨夜の大師講の持越で、とろ〳〵が來ました。デヱ寢所をして置こ」と、小迴りすれば、「オ、それ〳〵、もう初夜過、追付けであらう。寢間掃いて寢所しや、枕はおれが直すぞ」と、「二つ竝びや」を云ひかねて、娘賴まぬ心意氣、いらぬ遠慮と見えにける。此家を力に女之助、御臺若君うしろに圍ひ、息をはかりに駈來り、門の戸忙しく打敲く。お埒は驚き駈出でしが、待てよ、夫の足音ならずと、「何者なれば夜に入つて、けたゝましや」と咎むれば、「いや苦しからず。我々は旅の者、足弱二人召し連れ、盜賊に出逢ひ、やう〳〵切抜け、是まで參りしなり。三人の命助けると思し召し、御隱まひ下されなば、世に有難く候はん」と、餘儀なく云ふにいやとも云はれず、「主の夫は留守なれども、さほどの難儀見捨てるもお笑止、暫し此方へ御入あれ」と、門の戸明くれば三人とも、「命の御恩」と追從し、内へ通れば女房が、心を付けて表を締め、「イザ先あれへ」と圍爐裏の影、互に見合す顏と顏、「ヤお前は、繁氏卿の御臺所、牧の御方樣ではないか」「さういふ其方はお埒ぢやないか」「なに以前の女房か」と、女之助も惚りの、「ても」と「さても」が一時に、手を打ち俱に呆れしが、「さるにても此お姿、何故是まで遙々と、お越ありや」と尋ねれば、御臺は涙を浮めながら、「つれあひ繁氏卿御遁世遊ばし、國は大内に惱され、命危く逃げのび、我夫高野にましますと、人の噂を力にて、此處まで來りし」と、語り給へば俱に目をすり、「いかい御苦勞遊ばすの。若君樣の御成人、何か思へば一昔、變る浮世の有樣」と、憂きを涙に語り合ふ。女之助あたりを見、

「其方と離別せし折柄、かどたといひし水兒を添へしが、見事育て上げたるか、無事で居るか」と尋の詞、齒に衣被せず、「コレいはれぬ昔をお尋ね、誤り無き身に暇の狀、是非なく故鄕へ歸り、年寄つた母樣乳呑子を抱へ、どうして暮す當も無く、途方に暮れし折から、此家の主も以前は武士、尾羽打ちからした互の落目、俱過にするならば、母樣ぐるめ養うてやろとあり、一度の夫と思へども、親の爲子の爲に、此家へ嫁つた其年に、母樣も見送り、娘も成人したけれど、何の此方に逢はさうぞ、いひ出しても下さるな」と、けんと云はれて女之助、むつとはすれど宿を借る、無心に詞も無かりける。若君は大人しく、「只何事も堪忍し、今夜は爰に泊めてたも」と、涙含んだる御仰、「こは勿體なきお詞、見苦しけれど一間もあり、いざあれへ往てお休み」と、申上ぐれば御臺所、「主が戻り給ふなら、好きに賴む」と打悄れ、石童君の御手を執り、しをしを立つて入り給ふ。女之助は著きほ無く、俱に奥へと立上るを、お埒はやがて押留め、「御兩所はお主筋、好んでもお宿を申す、其元には宿叶はず、何處へなりと　お越しあれ」と、さし留められて重る强腹、「ヤ無禮過ぎた女め。御大切なる二方を預け、某何處へ行くべきぞ。お主ばかりの好みを思ひ、夫の好みは思はぬか」と、嵩にかゝれば、「サア其好みぢやに依つて猶ならぬ」「ソリヤなぜに」「さればいの、今自には玉屋の與次とて夫あり、其留守の間へ以前のつれあひ、泊めてくれとあつた故、泊めましたとはどの口で、どう云はれうぞ無遠慮人。まだ其元は昔の道樂なほらぬの。お二方は此お埒が、命に懸けて預つた、氣遣ひせずと宿無くば、軒の下へも一宿あれ。あたじだらくな」と引立てて、有無を云はせず門の戸を、明けて表へ突出し、理窟で締める鍵は、押すに押されぬ心の錠、稚なじみの合鍵も、工合ちがうて海老の腰、屈めながらに軒の下、暫しと宿るばかりなり。程なく歸る玉屋與次、道のどまぐれ夜を更し、闇を照する禿頭、門の柱でこつゝりと、あいたしこゝぢやと打叩く。お埒は待ちかね走寄り、明けるや否や、「テモけうとい、今まで何處に何して」と、お定りなる悋氣口、「措け〳〵、今夜はお上の御用筋、夜が更けてもけんべい、しやつともいふな」と圍爐裏の火を、さし燻べるうち表より、女之助が聲として、「一旦の理に逼り、軒に一宿致せども、寒風烈しく身も冷渡る。御亭主も御歸りと見受けたり、一夜の宿」と乞ひにける。與次は聞耳、「ありや何ぢや、何云ふのぢや」「イヤあれは最前旅人が盜賊に出逢ひ、難儀に及ぶとありし故、引くに引かれず、足弱二人は泊めたれども、お前が留守ゆゑ男御は遠慮して、外に寐さして置きました」と、語れば、「ハアテそれは大事ない事。これ旅の人、外に寐てなら寒からう、此方這入られい。圍爐裏にあたつて寐られい」と、だうらく詞も情はうれしく、門の戸明けて小腰を屈め、「御免なれ。とてもの事、少し焚火の御

報謝」と、何心なく圍爐裏の端、燃える明りで顔見合せ、「ヤア、わりや最前の侍か」と、俄に變る
與次がきつさう。女之助も拔放し、「さういふ汝は件の盜賊、出合た所か百年め」と切かゝればぬ
き合せ、爰を最後と切合ふ有樣、お埒は夢か幻にも、樣子は知らず、「ヤレ待つて、暫し」といへど
聞入れず、詮方盡きて茶の水を、引すくうて燃える火に、ざんぶと懸くればぱつたりと、消えて闇
の夜二人はハツと、猶豫しながら聲懸けあひ、「汝盜賊そこ引くな」「侍逃げな」と鵜の目鷹の目、
止めるお埒も暗がりで、すべき樣なき折柄に、又も圍爐裏がくわつと燃え、「其處に居るか」と互
の切先、南無三寶と杓の水、ばつと懸くればふつと消え、目先手先も知ればこそ。「盜賊め」「侍
め」と、聲を力に滅多討、燃えると切合ひ消えると探り、千變萬化の戰に、暫し時をぞ　三重移しけ
る。隙取る內に圍爐裡の明り、七轉八倒お埒は慌て、一間の障子引外し、切合ふ中へ打ちかぶせ、
身を捨ておもりと乘懸れば、互の太刀先押へられ、思はずどつかと居すわつて、ほつと息つくば
かりなり。音に驚き御臺石童、手燭携へ駈出で給へば、お埒はせきあげ、「これ待つてたべお二
人、別けて我夫與次殿、此方の事は所でも、人も恐るゝ男一匹、盜賊よ追剝よと、名を立てられて
切先勝負、若しもの事があつた時、妻子までの面汚し、何故さもしい名は取り給ふ。樣子を聞かね
ば爰放さぬ、サア仔細は」とせく詞を、「尤ぢや女ども、全く某盜みはせず、其侍が同道の、足弱

二人はお尋者。則ち此國の領主、筑紫より大內義弘到著あつて、此繪圖に合ひし者當國へ來りし
由、搦取つて渡せとの仰、證據は爰に」と懷より、出して見せたは紛も無き、御臺所と若君の、
お姿　書きし寫繪に、人々ハツト胸痞へ、膽を冷するばかりなり。お埒は常から賴もしき、夫の
心を能く見拔き、「コレ其繪のお二人、何國如何なる御方と、知つて此方は捕へるのか」「イヤそ
りや知らぬ。人違ひでも大事なし、捕へて來いとの仰、身にかゝらねば念押して、問ふ間もな
く歸りがけ、慈尊院で出くはし、見遁しならぬ庄屋の一言、其意地持つて此場の出逢、構ふな、
退け〳〵、そこ放せ」と刎退けるを、「イヤ放さぬ。かうなるからは何を隱さう、是なるお侍は
自が前の夫桑原女之助、お供しられた二方は、其繪に違はず筑紫大名、加藤左衞門繁氏樣の
御臺若君、私が以前のお主ぢや」と、聞くより與次はハツト飛退き、「左樣と存ぜず無禮の段、
眞平御免」ときをりの平伏、心ゆるさぬ女之助反うちかけ、「ヤア俄の三拜食はぬ〳〵。我等も
昔は家來筋などと、古手を以て油斷させ、大內が方へ注進する下心か卑怯者、立上つて勝負せ
よ」と、勢ひかゝれば、「ヤレはやまり給ふな、其言譯見する物あり、暫らく」と押宥め、簞笥
より刀一腰取出し、目通りに据ゑ、「孰もお見知りある刀、立寄つて見給へ」と、云ふに人々氣
を付けて、見れば目貫は菊流し、牡丹に獅子の國鍔は、擬ひもなき夫の差替。「實に〳〵繁氏卿

のお刀、コリヤどうして其方が、所持したる仔細は」と、不思議立つれば、「ヲ、御不審は尤、もと某は播州の浪人、尾羽打枯し都方へ、奉公かせぎに登る折柄、八幡山崎の間、狐川の渡しにて、さる浪人と口論仕出し、刺違へんと致せし處、其場へ繁氏卿通り合はされ、雙方一分立てよと、御差替一腰づつ下し置かれ、命助るのみか、外聞の腰を塞ぎ、夫より武士奉公の有付無く、此國の土民となつては候へども、御恩は忘れぬ昔形氣、命の親の繁氏卿、其御臺若君と聞き、何と手向ひ申すべき。お疑を晴され、御譜代同然に思し召し下されよ」と、餘儀なくいふに御臺は嬉しく、「實に其事はお物語ありし事。扨は其時お刀を貰うたは其方よの。遣つたる人は御遁世、御跡慕ふ我々が、力となつて今一度、繁氏樣に逢はせてたも。賴少き世の中や」と、卿ち給へば、「御氣遣ひ遊ばすな、天地の間に御座あるなら、尋ね逢はせ參らせん」と、奥底も無き心底を、見込んで猶も女之助、「ホ、、お賴もしき御一言、迚もの事に御誓言で承りたし、其上賴む事あり」と、云ふに居直り金打し、「諸天善神はおろか、佛意を懸け二言無し」と、聞いて安堵の胸を据ゑ、何思ひけんどつかと坐し、指添拔いて我とわが、腹にぐつと突立てる。人人是は狂氣かと、驚き騷げば、「ア、騷ぎ給ふな方々。思ひ懸なき最期故、御驚きは御尤。何を隱さう某は、生れ付いて好色深く、兄監物太郎が疑を晴さん爲、守宮の血を腕に塗り、誓を立てて國を出で、心を心で嗜めども、情なや宵の夢、わりなくも御臺へ戀慕、聞入れ無きを手に懸けて、殺さうとまでしたりしが、慈尊院の時知らす、鐘の響に夢覺めて、いつにない御臺には、我姿を見て御恐れ。南無三寶、夢とはいへど通ぜしか、はや切腹とは思へども、我亡くなりては御兩所を、守奉る人無きと、さあらぬ體にて是まで來り、今與次殿の心底見込み、賴み置いて相果てる。申し若君樣、是なる與次殿を力となされ、父樣のお行方尋ね、目出たう御對面遊ばせや。何の因果で此樣に、不所存には生れしぞ」と、我と我身の悔泣、見る目もともに哀れなり。與次は故と涙を隱し、「夢は五臟の煩ひ、何故本心を改め御先途を見屆けぬ。切腹とは腑甲斐なし」と、恥ぢしむれば、「イヤナウ、本心を改めても、夢となぐるになぐられぬ、仔細は腕に塗つたしるし、心の迷で守宮の血が、これ此如く消えたるは、罰か報か天命か。兄監物へ云譯の、種を失ひ是非なくも、かくは計ひ申せしぞや。よししるしが落ちぬとて、最早御臺は虎の子を、供に伴るゝと思し召し、片時も心安かるまじ。せめての冥加に御主人の、お心安めにする切腹、是まで盡せし忠節を、無にして死ぬる跡の儀を、賴む〳〵」と云ふ聲も、弱り果てたる息づかひ、與次は哀れの袂を絞り、「せめて最期の思ひ出に、娘かどたに逢はさん」と、呼びに立つを女房が、涙ながらに引留め、「定めて樣子を聞いても居ませう、駈出る筈が駈出ぬ

は、前の親を慕ふかと、思はれまいと思ふから、其氣な娘を呼出して、泣くも泣かれぬ苦をさそより、矢張小蔭で存分に、泣かしてやつて下され」と、子に擬へたる我涙、保ちかねて思はずも、わつとばかりに泣叫ぶ。御臺も倶に御涙、「惚れる身よりも惚れられる、此身の辛さ悲しさを、推量しや」としやくり上げ、歎かせ給ふ御聲が、冥途の形見、南無阿彌陀、「南無阿彌陀佛」と指添を、拔くが此世の暇乞、消えて果敢なくなりにける。ハツトばかりに人々の、縋り泣入る折こそあれ、遙に聞ゆる人馬の聲。すは事こそと與次は突立ち、「コリヤ〳〵女房、泣いて居る處で無し。察する所討手の輩と覺えたり。思ふ存分働いて、透間を見てお供せん。まづ夫までは一間へ入れ、聲すな音すな油斷すな。往け〳〵急げ」と追ひやり〳〵、七の圖まで尻引からげ、好む所のだんびらを、拔翳して待つ處へ、馬上に跨る大内義弘、松明提燈星の如く、手の者引具しどつと駈寄せ、「ヤア〳〵此家に繁氏が御臺悴石童、隱まひ置いたる條遠見の注進、急いで縄懸け渡せばよし、違議に及ぶとあばら屋を、乘潰してくれんず」と、くわつと睨めたる兩眼は、海に入日の射す如く、あたり眩く見えにけり。内には故と音もせず。「すは風くらつて逃げたるか、踏込めやつ」と呼はる聲、「捕つた〳〵」と捕手の役人、我劣らじと込み入るを、得たりと與次は眞向梨割車斬、さしもの大勢堪り得ず、一引さつと引いたりける。大内は

馬上に齒がみをなし、「所の代官駒形一學、あれ蹴散らせ」と下知すれば、「承る」と駈來る侍、早縄手繰つて大聲上げ、「ヤア〳〵與次、いか程に働くとも、かく十重廿重に取卷いては叶はぬ叶はぬ。違議に及ぶと飛道具、如何に〳〵」と罵つたり。流石の與次も飛道具に、心置かれし折からに、一間の内より「コレナウ御亭主、迚も遁れぬ我々、急ぎ縄懸け身の難儀、遁れてたも」と障子を明け、出づるを見れば妻のお埒、娘かどたを石童に、仕立てて出づる主思ひ。夫と覺れど恩愛に、心おくれて手をつかへ、「ホヲ、其御覺悟はさる事なれども、一旦隱まひし某が、むざ〳〵渡す無念さを、御推量下されよ」と、夫婦別れの涙をば、目に浮ぶればお埒も悄れ、「自は覺悟の前、只いとほしきは此石童、あらぬ形の男髪、不便にござる」と共泣に、泣きしをれしが、與次は突立ち、「これ〳〵役人、御尋の兩人、縄懸けてお渡し申す、受取られよ」と云ふ聲に、駒形一學内に入り、透間あらせぬ氣配り目配り、是非なく縄を懸ける内、御臺は駈出で「ナウ悲しや、妾こそ」と、云ふ口押へて立身で隱し、親子を引立て引渡す。表に控へし大内は大聲、「コリヤ〳〵一學、渡し置いたる繪圖あるべし、引合せて受取れ」と、遁れがたなき鶴の一聲、鷺を烏と爭うても、爭ひにくき姿繪を、明りへ出して引擴げ、見るも一生懸命、遁れぬ處と與次は身がまへ。つく〴〵眺めて駒形一學、「繁氏が御臺悴、繪圖の通りに違ひ無し」

と、表へ答へる慥の訴へ。與次は夢かと念に念、「其詞に相違無いか、跡で違變めされな」と、打つたる釘の詞を返し、「ヤアいらざる馬鹿念、駒形一學春秀が受取つたに相違無い。よく繩懸けて渡したよ、當座の褒美に一腰くれる」と、指添抜いて提燈の、明りへ出したは繁氏の、狐川にて情の一腰、「ヤこりや我夫のお差替」「扨は拙者と一時に、御恩を受けた侍か」と、云ふ聲高いを「シイしつ」と、押へて消して引立てる、昔忘れぬ武夫や、見送る夫も妻子をば、恩に替へたる涙の雫、身にふりかゝる御臺の歎き、餘處に見捨てるお埒は忠義、かどたは實の父にまで、後れの髪の男髷、今日は石童明日よりは、賽の川原の石の塔、十づつ十は百歳と、祝ひ飾りし命をば、捨てに行く身を捨てに遣る、思ひは同じ思ひぞと、泣いては送り送られて、屠所の歩と歩みかね、行きては戻り戻りては、泣く音もつらき明烏、かはい〳〵の聲名殘、引かれてこそは別れ行く。

第五

陰德あれば陽報あり、賢き敎まのあたり。御臺所石童丸、玉屋の與次が介抱にて、繁氏卿の御在所、尋求める高野山、小石交りの細道を、爪先上りたど〳〵と、辿り給ふぞ切なけれ。御痛はしや母君は、ならはぬ旅の疲にて、御心地例ならず、歩み難みて休らひ給ひ、「ナウ與次殿、誠や人のならひにて、榮え衰へ浮き沈み、ありとは豫て知りながら、餘所の事よと思ひしに、今身の上に思ひ知る。是につけてもいとほしきは、内寶お埒と娘のかどた、我々が身に代り、敵の中に憂き苦勞、定めて憂目に逢ふやらん」と、案じ過しの御涙、倶に悄るゝ詞を嗜み、「ハア、譯もなき御歎き、彼等が御身に代りしは、お主大事と一圖の忠義。さはいへ駒形一學は、情を知つたる侍、命には氣遣ひ無し。かやうな小事に御心を、痛め給ふが御病氣の障り、必ずお案じなさるゝな」と、口にはいへど心には、胸まで上す涙を押へ、「申し若君樣、親子御一緒にお供して尋廻り、殿樣に逢はせませんと存ぜしに、此御病氣では道捗も參らず、殊に女人禁制の御山、寺中へは行かれぬ御身、お前ばかり先へ駈抜け、繁氏卿を尋ね給へ。私はそろ〳〵と、御臺樣の御供し、女人堂にて待ち申さん。はや疾く〳〵」と勸むれば、今日ぞ戀しき父上に、尋逢ふよと嬉しくて、御心は急かるれど、「やう〳〵二歳の時別れ、夫から逢ひ見ぬ父樣なれば、お顏さへ知らぬもの、何を便りに尋ね逢はん。殊には母樣の御病氣、見捨てて一人私はいや、三人ながら一緒に」と、離れがたなき御風情。御臺所は目を開き、「ヲヽ、道理〳〵、さりながら、其方が傍を離れぬとて、此病がなほるにあらず、片時も早く父御を尋ね、女人堂まで

お供しや。殿様の顔見るならば、耆婆扁鵲が藥にも、百倍増したる藥となり、本復するに疑無し。お顔は知らずとお名を名乗り、加藤左衛門繁氏の、今道心は何所にと、出家に逢はゞ尋ねよや。湯水を取つての介抱より、是に勝したる孝行無し」と、息もたよわき御仰、稚心に聞分けて、「父様のお顔を見て、御本復さへある事なら、成程私が先へ參り、お在所を尋ねましよ。後からそろ〳〵與次を伴ひ、女人堂までお出であれ」と、しを〳〵濡るゝ笠と杖、取上げて立給ふを、顔つく〴〵と打まもり、「そんなら其方はもう行きやるか。西も東も知らぬ身を、手放して遣る氣遣ひさ、跡で案じは如何ならん。父御に廻り逢うたなら、隨分早う便りをしや。暫しの別れと云ひながら、人の命は電光石火、打つ石の火より果敢なき喩。母が顔もよう見て置きや、其方の顔も眺めん」と、物が知らせし暇乞。傍で聞く身の胸苦しく、與次は詞もなく涙、目をしばたゝき彼方向く。若君何の頑是も無く、「然らば母様後程」と、立出給ふ。「コレ山道を外見して躓くな、怪我ばしすな」と氣を付けて、見交し〳〵別れたる、是が此世の名残とは、後にぞ思ひ知られたり。與次は御跡見送りて、涙を拭ひ、「サア是から御臺様、坂の間を負ひ參らせん。いざさせ給へ」といふ所へ、女房お埒娘のかどた、息をはかりに駈來るを、見るより恟り、「ヤア女房か。ナウ娘のかどたか」と、御臺も俱に御驚き、浮木の龜の對面と、悅び給へば溜息つき、「不思議に命助かりしが御運の末、折角親子が心を碎きし、お身代りも質者と、新洞左衛門にいひさがされ、いとほしや駒形一學殿、直に其場で御切腹。我々も危き所を、やう〳〵切抜け逃げたれども、追手の來るは知れた事、早う立退く御思案」と、いふに驚く與次が面色、「出來した〳〵。併し此の如く御大病、たやすく遁れ逃げ難し。若君ははや御山へ。我も娘を引連れて、御臺様を肩に懸け、女人堂に預け置き、立歸つて防ぐべし。其間を汝踏止り、暫く追手を支へよ」と、さしたる一腰投出せば、「ヲヽそれ〳〵好い合點、爰は妾に御任せ。此所より一寸も、追來る敵を山へは登さぬ。氣遣ひあるな」と男勝り、脇差取つてわき挾めば、「よくせよ、ぬかるな女房」と、御臺所を負ひ參らせ、娘が手を引きいつさんに、山深くこそ急ぎける。「サア彼方がたさへ落したら、心に懸る事無し」と、獨言する折こそあれ、麓より來る大勢は、大内之助が雜人ばら、おつ取卷いて聲々に、「ヤア贋御臺の喰はせ者、逃ぐるとて逃がさうか。誠の御臺石童は何所へ落した、有樣にほざき出せ。僞ると肝先へ、太刀魚がお見舞」と、犇き騷げどちつとも臆せず、「ム、親子御の行方が聞きたいか。夫は天竺の四日市、太儀ながら上つてござれ」「テモ咽のえらい女め。叩き殺せ」と拔連れ〳〵、切つて蒐ればまつかせと、同じく此方も拔放し、「どれ御自慢の太刀魚を、鉾摺剝す繩だら料理、切味を賞翫」と、多勢を相

手に縱横微塵、火花を散して、三重戰ひけり。女なれども忠義の一念、飛鳥の如く駈廻り、なぐり立たる太刀先に、「コハ叶はじ」と雜人ども、はふ〳〵逃げて失せにけり。「ヤレ此隙が好い引時、長居は恐れ」と逃ぐるも追はず、御臺所と夫の跡、慕ひてこそは、三重行く空の、雲間に近き八葉の、峯に紫雲のたなびきし、高野山と聞えしは、三面に山連り、源一水にして萬水東に流れ、大師二尺に道を習ひ、開き始めし靈地とかや。いたはしや石童丸、斯る難所をたど〳〵と、心も空に浮草の、根ざしの父は顔知らず、名のみ知るべに尋行く、袖の涙ぞ哀なる。思ひ高野の谷川や、左手は岩間、右手はあまのの山風、峯に煙の一結び、見上げて通る不動坂、踏みも及ばぬ丸木橋、名殘なさけも横吹の、嵐に木の葉散りはてて、心細道つく杖は、おりつ上りつ行く先を、問へどいはねの松蔭に、暫し休らひ給ひける。百年の榮燿は風の前の燈火、悟れば吾も佛なり。煩惱菩提と諦めて、加藤左衞門の尉繁氏入道、苅萱道心と名を改め、佛法修行の山坂を、辿るも後世の便りかや。石童親子の機緣にや、思はず傍に走寄り、「申し御出家樣、此御山に今道心のましまさば、教へてたべ」とありければ、「コハ興がる少人かな。九百九十の寺々、毎日入り來る初發心、昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心。左樣に尋ね給ひては知れ難し、俗の時の名をいうて尋ねられよ」と身の上の、事とも知らず仰ある。「さればとよ、尋ぬるは自が父上、二つの年別れし故、お顔も見知らず。元は筑紫松浦黨、加藤左衞門繁氏樣」と、いふより扨は我子かと、取縋らんとしたりしが、待て暫し、佛前にて誓を立たる恩愛妹脊、爰ぞと思ひ餘所〳〵しく、「ムウ年も行かぬに遙々と、慕ひ來る志、誠の父が聞かれなば、嘸嬉しくも懷しく、飛びつく程に覺されんさりながら、此山の掟にて、たとへ廻り逢うたりとて、名のり合ふ事かつふつ叶はず。早々國へ歸り、母御を大事にかしづくが、又一つの孝行」と、いひ教ふれば、「イヤナウ我國は、大内といふ者攻惱し、母樣諸共此山の麓まで參りしが、悲しき事は母樣が、道の疲に煩うて、命の内に只一目、父に逢せてくれよとのお歎き。情と思うて御在所、御存じならば教へて」と、目に持つ涙はら〳〵と、押へかねたる有樣に、我こそと名乘つて聞かそか、いや勿體ない師の御坊の戒め。と云うて遙々來たものを、知らず顔見ぬ顔が、どうなるものぞ不便やと、胸に堰きくる血の涙、こたへかねて思はずも、わつとばかりに泣給ふ。石童丸は目賢く、「左程に歎き給ふのは、若し父上ではあらざるや、早く名乘つて給はれ」と、縋り歎かせ給ふにぞ、「亂れ心の折節に、後の方の岩蔭より、師の阿闍梨の聲として、「ヤア〳〵苅萱、棄恩入無爲〳〵の誓を忘れ給ふな」と、制せられて苅萱は、起上つて振返り、「ハア、さうぢや、迷ふたり誤つたり。今此三界悉是吾子、孰れを我子と思ふべき。師の手前も面目なし」

と、衣の袖を打拂ひ〳〵、「ハレ小ざかしき少人かな。哀を共に見捨てねば、我を父よと縋る事、穢らはしや忌はしや。おことが尋ぬる繁氏入道、此山におはせしかども、諸國修行に出で給ひ、今は行方も知れざるぞ。急ぎ下山し母親の、病氣の介抱召されよ」と、つれなく云へど何處やらに、殘る詞のいやまさり、「なに父上は行方も知れず、此お山におはせぬとや。ナウ情なや淺ましや。我はともあれ母様が、焦れ死をなされうかと、夫ばつかりが悲しうて、跡へ戻るも戻られず、似た人にても在るならば、逢はせてたべ」とかきくどく、心ぞ思ひ遣られたり。俱に張裂く思ひをば、押隱して懷より、包みし藥取出し、「コレ、是は師の坊一萬座の護摩を焚き、調合ありし妙藥、母御に用ひ看病あれ。來た道筋は難所にて、草臥足では叶ふまじ。此方へ行けば花坂とて、平地も同じ事、馬もあり駕籠もあり。いざ〳〵立つて行かれよ」と、心强くも引立てられ、石童丸は泣く〳〵も、藥とあるを力にて、押戴き〳〵、是非もなみだの泣別れ、迷ひ道をばそこ〻と、教へながらも苅萱は、心もとなさ思はずも、引かるゝ緣の友綱や、見えつ隱れつ　三重慕ひ行く。息をはかりに玉屋の與次、御臺所を負ひ奉り、娘を引連れ、女人堂まで來りしが、跡先眺め片蔭におろし參らせ、「お心持は如何ぞ」と、申上ぐれば御臺所、苦き體を押隱し、「自ら事は思はずとも、お埒を救うてたもるのが、我爲の良藥」と、のたまふ詞に跡先を、思ひ迴して猶豫せしが、「いかさま女の手業に追手を防がせ、見捨てて置くも心もと無し、仰に任せ引返し申すべし。コリヤ〳〵かどた、大事の〳〵御臺様ぢやぞ、お傍を離れず御介抱申せ。お腰でも撫らしてござりませ、つい往て參ろ」と口輕く、飛ぶが如くに引返す。御臺は重る病の床、涙ながらに「ナウかどた、向ふの道より石童が、歸る姿は見えざるか。戀しの我子や、懷しの我夫や」と、彼方を見ては打倒れ、此方を見ては伏轉び、最期も近き御有様。かどたは悲しく、「コレ御臺様、父様や母様の歸らしやるまで、どうぞまあ、死なずに居て下さりませ」と、あどなき詞かいしよなき、娘の肩に介抱せられ、「自も石童が、便り聞くまで〳〵と、氣の張弓も弦切れて、死ぬる今はになりしぞや。與次夫婦が歸られなば、石童事をくれ〴〵も、賴んで死んだと云うてたべ。せめて最期に夫や子の、顏見る事が叶はずは、聲なと聞いて死にたい」と、御山の方を打眺め、「眺めても口說いても、逢はれぬ事か」としやくり上げ、泣く聲もつらや息切の、露の命の果敢なくも、消えて跡無くなり給ふ。かどたは慌て「ナウこれ申し」申しと云へど其かひも、なくも泣かれず立つたり居たり、母様呼びに走らうか。父様はなぜ遲いと、坂を駈下り聲を上げ、「父様なう、母様なう、御臺様が死なしやつた。コレなう戻つて下され」と、聲をはかりの叫び泣、ことわりせめて哀なり。頃は臘月雪空に、餌ばみ乏しき山鴉、可愛

可愛を引替へて、死骸にたかれば、なう悲しやと駈けよつて、彼方を追へば此方から、たかりかゝればせん方も、小石を拾ひ打つ礫、そこよこよと駈廻り、體も息も絶える程、父を呼び烏を追ひ、追廻れども小娘の、泣く音もつらき折柄に、石童丸は徒歩跣、かくと見るより走りつき、群る鴉を切拂ひ、あへなき死骸を搖起し、「ナウ情ない母様、かくなり給ふ事ならば、何しにお側を離るへき。父上には得逢はず、お前に別れて私は、何とならうと思し召す。これ結構なお藥を、御出家様に貰ひました。是を上つて健になり、たつた一言石童かと、物いうてたべ起きてたべ」と、藥取出し嚙みこなし、かひなき母に吹込んで、「ナウ母様〳〵」と、起し立て抱擁へ、前後不覺に泣き給ふ。斯る哀を遠目から、見るより思はず苅萱道心、走寄りしが是までさへ、立てし誓を今更に、無下にはせじと目を押拭ひ、「コレ〳〵少人、悲しきは理ながら、いたく歎くは佛の迷ひ。いで〳〵迴向し參らせん」と、口に唱名心には、我を慕うて遙々と、海山越えて來りしに、妻子かとも得いはずに、餘所に扱ふ我心、草葉の蔭からさぞ怨まん、赦してくれよ我妻と、念誦に交る胸の中、止めかねさせ給ひけり。然るところへ與次夫婦駈戻り、「ヤァ御臺様は御最後か」と、驚き騷げば女房が、苅萱を一目見て、「なうお久しや繁氏様」と、云ふに石童、「何、此お方が父様か。懷しや戀しや」と、縋り給へば衣の袖、打拂ひ〳〵、逃げんとし給ふ後より、「ヤレ待ち給へ我君」と、聲を懸けて監物太郎、大内之助に大綱懸け、息をはかりに駈來り、「勅命請けて一戰に討勝ち、生捕つて參つたり。如何計らひ申さん」と、云ふより與次が踊出で、何かはなし急いで首を、既にかうよと見えける處へ、「暫し〳〵」と新洞左衛門、飛鳥の如く飛來つて、「謀反人とは云ひながら、未だ旗を揚げたにあらず、一家中の歎きを思召し、一命助け給はれ」と、平伏すれば苅萱道心、「助けるとも殺すとも、私には計らひ難し。都へ行きて奏聞遂げ、命乞して得さすべし。夫を我子石童が、筑紫へ送る轢」と、仰に依つて引立つる、大惡無道の强敵も、我神國の御注連繩、治る御代のためしとて、惡人亡び國安全、民も豐に萬々歳、千代を祝ひし筆の跡、長くも語り傳へたり。

菊萱桑門筑紫轢　終

發端

座本豐竹越前少掾

遙々爰に紀の路なる〳〵、牟婁の郡に著きにけり。抑〳〵是は熊野權現に、三山百度の大願を立てし、蓮花王坊と申す沙門にて候。我釋門に入りてより以來、多年三所の妙驗を仰いで、此度既に百度のナ願　九十九度に相滿てり。誠に妙なる御山の修行、今一度にして願望を滿てん事、行者たる身の悅びと、樂しみ登る山竝に、かゝるや雲の峯つゞき、岨を傳へば跡よりも、よばふを聞けば谷川の、流につれて遠近に、音する方を眺むれば、ふしぎや川邊に立ちならびし、柳の一木の動くと見えしが、忽人體の形を顯はし、「いかにやいかにや蓮花王坊。我こそ此山谷に生出でし、柳と柳の精靈なり。非情の類なりといへども、天成夫婦婚姻の契を籠めて枝を交へ、自然と連理のかたらひをなす。然るに御身修行の始、此谷川を行場と定め、折から柳と柳の連理を見付け、是夫婦交合の有樣、行場の穢と枝を切る。夫より夫婦二木と成り、連理の契りは空しくなる。されども不斷有りがたき、御法を聞

きし其功力、此身は非情の果を逃れ、今人界に生を受くる。又一木の柳は是女身を受けし縁によつて、互の中をさかれし恨、長く非情の果を離れず、一念仇を報ふべし。よく〳〵慎しみ登山有れ。我人界に生ずるも、法味を受けし恩有れば、告げしらしむ」といふ聲ばかり、形は消えて心中の、魂と顯れ大空に飛去りしこそふしぎなれ。此魂則中有に留つて、常陸の國の片邊に、横曾根の平太郎と生るとかや。闇然として王坊は、奇異の思ひをなしゐたる。誠や女身を受けたりし、柳の見入強かりけん、今の奇特を見るからに、王坊忽慢心起つて、「扨々ふしぎや。正しくも非情の椰の木人と成り、斯まで詞をかはす事、法の力と云ひながら、多年の功力に寄らずんば、いかでかかゝる奇瑞を見ん。凡山修行の人幾萬人か有るべきが、九十九度まで恙なく、難行せしは我ばかりこ。適身に在つて譽や」と、獨笑して居たりける。時に山鳴り震動して、其さま異形の客僧、忽然と顯れ出で、「ヤア穢はしや王坊、非情の精を化度しつるを、我行德と思ふ慢心、いまはしや勿體なや。さばかり垢穢たる惡念にて、此山上は叶ふまじ、急いで下山致すべし」と、はつたと睨む眼の光は、輝渡つて恐ろしゝ。されども王坊、魔性の心入りかはれば、ちつとも疑儀せず、「コハいかに、御身誰人なればさはいふぞ。我受戒灌頂せしより以來、六塵の境を去つて、六根淸淨と聖切つたる此行者、百度の荒行を勤めし我が心を、穢れたるとは、イヤハヤ過言千萬」と、信ずる氣色あらばこそ。客僧いかつて、「儕ぜひ〳〵出づまじきか。イデ思ひしらせん」といふより早く飛びかゝり、引攫んで投げれば、さばかり深き谷底へ、眞倒に落つると見えしが、柳の梢に貫かれ、骸は朱に死したりし、劍樹地獄は目の前なり。是一念の慢心より、天魔破旬の心にかはり、願望空しく果せしは、恐るべし〳〵。されど日頃の行德にや、王坊の尸より、瑤々たる一つの玉、悽愴として虛空に入れば、是も流轉に出生す。後三條院第一の皇子、白川の法皇こそ、彼蓮花王坊が再來たり。代かはり既に星移りて、娑婆往來の物語、昔々は斯くとなん。

三十三間堂平太郎緣起

祇園女御九重錦

枝葉美なる物は根莖を害ひ、世に全き事兩なしと、云ひ傳へたる語のごとく、人は萬物の靈として、忠讒賢否交起り、草木非情の產として、統て德化の風に靡き、治る時津秋津國、鳥羽の院の御宇にあたつて、萬機の糸も白川の、法皇と申し奉るは、聖德いみじき仙洞なり。此君御願の旨有つて、祇園大社に參籠ある、寰の車道、警蹕正しく御車先、時の攝政右大臣師實公、殿には太宰帥藤原朝臣季仲、押しさがつて北面の守護武者所時澄、各衣冠岌然と、供奉の官人仕丁まで、位爭ふ下馬石も、おのれと跼む威勢なり。かゝる所へ鳥居前、「奏聞、奏聞」と呼はつて、立ち出で來たるは備前守平忠盛、跡に續いて譜代の執權、進藏人家貞、大の男を高手小手、いましめ嚴しく、引居ゆれば、攝政師實いぶかり給ひ、「コハ心得ざる振廻かな、樣子いかに」と有りければ、忠盛兩袖刷ひ、「さん候、其曲者昨夜社内に忍び入り、神殿近く狙ひ寄る形相尋常ならざれば、某生捕り候」と、事もなげなる演說に、師實大きに驚き

給ひ、「見れば怪しき沙門の出立、面を改め仔細を問へ、ハレ藏人」とのたまへば、はつと答へて立ちかゝり、麥藁笠を引たくれば、内匠頭源義親なり。ヤアこはそもいかなるはからひと、攝政始め竝居る人々、呆れ果てたるばかりなり。始終呑み込む武者所、太宰帥と顔見合せ、工の臍の合はぬ同士、手持無沙汰に義親の、繩ときほどけば師實公、御聲高く、「ヤアいかに義親、法皇當社に參籠有る事、京童も能く知つたり。然るに怪しき僧形にて、神殿ちかく窺ひ寄る、心底甚いぶかし」と、問はせ給へば嘲笑ひ、「コハをこがましき御察度、某かゝる出立は、君を守護するかげの奉公。尤忠盛進藏人、宿直致すと聞きつれども、夜の間の油斷覺束なく、皇居を守る我が忠節、夫ともしらぬ不覺の忠盛、わざと繩目にかゝつたを、手柄顔なる言上は片腹いたし」と嘲つて、よわみを見せぬ減らず口。「ヤア過言なり義親、誠我君を守護する身が、何故我に眞劍の、勝負有りしは心得ず」と、のつぴきならぬ詞の先、季仲引取り、「イヤこれ忠盛、君を守護する身の要害、刃物帶せで濟むべきか。何角とおいやる貴公でも、ソレ其通り腰刀、さすが武門に產れても、手前の見えぬ猪武者」と、罵る中に進藏人、たまりかねてつゝと出で、「コハ季仲の御意とも覺えず、主人の太刀と義親の刃物を一所に論ずるは、事愚なる眼力」と、詞の釘を折返せば、脇よりぬつと武者所、「ヤアちよこざいな指出口、こま言いはずつこんで、似合うた樣に御車の、牛の番せよ藏人」と、いはせも果てず、「シヤ奇怪、其腮切つて切りさげん」と、つゝ立上る家貞を、「ヤレ早まるな」と忠盛卿、制し止めてこなたに向ひ、「イヤナウ義親、とつくと聞かれよ。某帶する此太刀は、君を守護する誠の太刀、又貴殿の打物は、上を恐れぬ眞劍なれば、芋がら荆も同然」と、嘲弄あれば怒をまし、「ヤア得手勝手聞きにくい。此義親が一腰は、武士たる者の魂なるを、芋莖なんどとさみするは、聞捨てがたし」と詰寄れば、忠盛につこと打笑ひ、「成程刃物は武士の魂、然りといへども、一天の君を守護する魂は、まづ此通り」と拔放すは、眞劍ならぬ木刀一振、追取直して詞を重ね、「此木刀を帶せしは、過ぎし節會の折からより、忠義一途の刃金を鍊ひ、物其數にはあらがねの、刃を賴まぬ我魂、よく見られよ」と指し付くる、木刀一本さしもの義親、何と返答口ごもる。太宰帥はさし心得、「イヤサ忠盛、廣言置かれい。夫程立派な魂持ち、コレ此扇」と取出し、「是に書きたる戀歌の取やり、察する所官女の内、不義働いてお樂み、スリヤ徒も軍用に立ち申すか」と押開く、扇の面は覺えの手跡、木石ならぬ忠盛が、心の外の戀歌の手詰、はつとばかりに、さしうつむき、誤り入つたる風情なり。折しも車の御玉簾、さつとかゝげて白川の法皇、祇園女御と諸共に、玉座列なる綾錦、さも貴なる粧に、諸卿も式禮厚額、笏を正して尊敬有る。法皇振た

る御聲にて、「今聞く所の詞爭ひ、互に越度は有りながら、さして咎むる譯ならず、或夜是なる女御が袖、引くは矢竹の武士と、見留め置きたる其樣子、女御委しく物語れ」と、仰の内に薄紅粉の、恥ぢてもみでる緋の袴、「コレ申し忠盛殿、其夜袖つま引き給ふは、よし有る人と見受けしかば、燈の油煙檜扇に、うつし取つたるかどり地に、楊枝の先の石摺を、思ひ付きたる歌一首、御手にあらば其由を、あかして誠武士の、身の潔白を見せ給へ」と、事を分けたる女御の仰、忠盛具に領掌有り、「斯く顯はれし上からは、何をか包み申すべき。其折給はる歌の返し、有り合ふ扇に書き認め、奥に相圖の鈴の緒に、結び付けたる心の迷ひ、直に餘人の手に入りしは、是忠盛が身の誡。幸ひ君の檜扇は、折から懐中致せり」と、指出す扇師實公、取つて捧げる車の内、法皇つく〴〵叡覽有り、「覺束な、誰が杣山の人ぞとよ、このくれに引く、主を知らずや」と、吟じ給へば太宰帥、折こそよしと進出で、持ちたる扇取り直し、「雲間より、たどもれきぬる月なれば、おぼろけにてはいはじとぞ思ふ。サア此上は不義明白、不所存者の平忠盛、きつと糺明遊ばせよ」と、扇さし上げ奏すれば、法皇肯んじ給はずして、「いやとよさにあらず、忠盛が手ずさみは、我敷嶋の道に入る、心やさしき扇の面、神祇釋教戀無常、皆これ歌の種なれば、沙門の身にて思ふ戀、忍ぶ戀路を詠む習ひ。忠盛戀歌を詠んだりとて、不義と咎むる事なかれ。又義親が帶劍も、武士たる者の身の守。是も野心と思はれず。只此上は先非を捨て、更に忠なる心を合せ、都の政務肝要ぞや。朕がかねぐ〴〵三熊野の、大權現を信ずれば、車を運ばん其爲に、則當社へ御暇の、法救をさゝげ通夜をなし、是より熊野へ赴けば、道の警固は忠盛時澄、洛中守護は内匠頭。必怠る事なかれ」と、仰も翠簾もやすらかに、事を納むる勅、皆々渴仰嚴に、立上つたる太宰帥、時澄諸共義親も、麥藁笠に邪を、覆ひ隱して墨衣、すまぬ詮議も方寸の、胸にからむる智仁勇、平忠盛藏人も、禮儀亂さず立茂る、神の園生に善惡の、道明らけき攝政補佐、懷け治まる君が代の、例を爰にみ輦、引わかれてぞ、大三重　行雲の、前の世の、契りを爰に三熊野の、谷の岸根に生ひ茂る、柳が本の休床、女主の作姿、赤前垂の色にめで、後生善所は此茶屋の、端香に足を留伽羅の、かをりも細き柳腰、お柳お柳と名も高し。爰へのかく出でくるは、小山の如き大の男、名は岩淵の和田四郎、山賊夜盗の鵰眼、きよろ〳〵そこら見廻して、「ナントお柳、けふは道者も多かつたで、えらう取れたで有らうの」と、腰打ちかくれば、「イヽ、エイナ、なんぼ通りが繁うても、お足の溜る事ではござんせぬ」「何ぢや、旅人の足を口合に、お足とはなまの事か。天窓數ばかりで、高の知れたつまみ錢、そんなとろい事せうより、此鼻と妹脊のかたらひする氣はないか。大勢の百姓どもに

這ひ屈まし、お家様の奥様のと敬はす。コリヤ命取め」としなだれかゝれば、「オヽなめ、そんな事は嫌ひでござんす」「何ぢや嫌ひぢや。ハヽヽヽ。わしや好ぢやといふ女はない。エヽ娘ばかり大事にかけ、蝮に見入られ、えらい目にがな、笑止な事。互に女なし夫なし、いつぞとは思うてゐた。コレ手付はかうぢや」と抱付けば、うるさながらも上手者、「夫程思うて下さんすを、何のいなとはいな舟、の二世も三世もかはらぬと、固めの盃した上で」「ヤア〳〵夫は近比忝い。ぢやが酒や肴が」「有るとも〳〵。爰に待つて居やしやんせ、つい拵へてくるはいな」と、云捨て庵へつつと入り、「いかいおせゝ、をとゝひごんせ」と戸をひつしやり。「なむ三寶取りおつた。につくい奴ぢや、と睨んで見たがこつちが悪い。此山中にたつた獨暮して居る大膽女郎、あら立ててはいかぬ筈、爰らが戀の辛抱ぢや」と、立ちすくばつた虫腹の、てつぺい押へる折も折、「岩淵それにお居やるか」と、間近く來るは武者所時濟、鼻と鼻とを突合せ、「何事も先達て申合せし通り、法皇を擒にし、祇園女御を奪ひ取り、太宰帥季仲卿の戀を叶へる手段といふも、第一は忠盛から仕舞うて取らでは何かの邪魔、隨分油斷なき樣にと、コレ季仲より賴の印、五十兩受取れよ」と手に渡せば、押戴いて、「何が扨、某も鹿島三郎義連といふ名を包み、とくより都を逐電し、顏見知らぬが幸究竟。殊に身が主人義親、季仲殿に同心のよし、滿足々々〳〵。軍用金用意の爲、かやうに形を略した幸、忠盛を討放し、女御を奪うて手に入れん。ちつとも氣づかひ候ふな」と、しめし合はする岨傳ひ、山踏分ける小鳥狩、鷹匠犬引列卒の者、大勢引連れ出來る、大宰帥季仲、其生付黑ければ、黑帥と異名に呼ばれ、髭の塵取る武者所、岩淵を引合せ、手を拱いて蹲まる。季仲桓々〳〵と見廻し、「和田四郎聞及ぶ早速の合體珍重々々。此度法皇が迎に登山せしが、陸路を下向といふにより、某は早歸洛の次手、小鳥を狩らせ遊覽せん爲、斯のごとく出立つたり。ヤア和田四郎、迎の船は新宮の濱に殘し置く。女御を奪うてナ合點か」「ハヤ仰までも候はず、法皇下向に極れば、旁油斷なりがたし。手下の者に告知らせ、所々に待伏せん。心しづかに御歸京」と、追蹤たらぐ〳〵岩淵は、住家をさして立歸る。跡には季仲四方に眼を付け、見上ぐる峯の木の間より、夫としら鷺羽をのして飛來る風情、「アレ時澄、大鷹にかけさせよ」はつと拳を放すやいな、鷺を追つかけ追ひ廻し、何の苦もなく引摑み、飛歸らんとしたりしが、梢遙に亂れたる、柳が枝に足繩かゝり、羽たゝきしたるその隙に、鷺は遁れて飛去つたり。季仲驚き、「あれを見よ、某が祕藏の薄雲、早々足繩切らずんば、暫時が間に狂死。ヤア〳〵者ども、梢に登つて助けよ」と、いへどあせれど遙の梢、あれよ〳〵といふばかり、誰登らんといふ者なし。時澄いらつて、「云がひなし。所詮

柳を切倒し、鷹を助けるより外はなし。近邊をかけ廻り、杣を呼寄せ切崩せ」と、季仲諸共下知すれば、畏つて列卒の者、皆我先と走り行く。爰に常陸の國の片邊に、横曾根の平太郎當吉といふ者有り、先年父を不慮に討たれ、敵の有家知れざれば、熊野權現に祈誓を籠め、背には母を老の坂、孝行深き谷道の、岨を傳ひに來りしが、斯くと見るより、傍に母をおろし置き、季仲が傍近く、「道すがら聞きしに違はず、見申せば梢と云ひ、鷹の命も危ければ、心せきは御尤、併しかほどの大木、切り崩さんとの御計ひ、憚ながら殺生かと存ずる」と、いはせも立てず季仲、「ヤア何やつなれば無用の止立。生ある鷹を助けん爲、非情の柳を切取る事、殺生とは何を以て、ちよこざい千萬、退れやつ」と睨付ける。平太郎猶進み寄り、「されば、草木心なしとは申せども、花實春秋の時を違へず、陽春の德を得て、南枝花始めて開くと申す。彼の釋尊の入滅には、叢林の諸木忽枯れし其例、其外飛梅老松いづれも心ある事は、人間にかはらねば、殺生と申したに僻言は候ふまじ。御家來の内射藝鍛錬の方に仰せ、弓矢を以て足繩を射切らせ給はど、鳥も助かり、柳も恙なく候はん」と、事も無げにぞ申しける。「ハ、、、、。夫を儕に習はうや。恐らく養由比衞が拳は知らず、叶はぬ事及ばぬ事。すつ込め、退れ」と嘲る内、老母聞きかね進出で、「御家來の内射人がなくば、此躬御覽のごとく賤しき土民の手業ながら、常

常弓矢を心がくれば、足繩はよも射かねまじ。仰付けられ下されよ」と、願へば時澄せゝら笑ひ、「ハ、、、。射藝鍛錬の某さへ、いかどと思うて扣へしに、順禮道者の分際、なまちよこざいとは思へども、望なら射させてやる」と、弓と矢渡せば平太郎、おめる色なく身繕ひ、梢遙にねらひをかため、きり〳〵と引きしぼり、切つて放せばあやまたず、足繩ふつりと射切つたり。鷹は悦ぶ其風情、羽だたき打つて飛歸り、拳に翅を休むる有樣、「扨も名人、射たりや」と、暫しは鳴も止まざりける。老女は嬉しさ飛立つ思ひ、「出かしやつた〳〵。ナウ申し御らうじたか。順禮道者の分際でも、見事射おほせましたぞや」と、母が自慢の先折る時澄、「ヤア犬の蚤の嚙みあて、時の拍子で射切つたは、辻放下のほででんがう、誠武士の弓勢には、敵を遠矢に射て落すを肝要といふはいやい。禁庭の武者所、此時澄が弓勢にて、先年横曾根次官光當といふ者、賀茂の競馬の折から、射藝の論も未熟の光當、某が放つ矢に、胸板を射止めたり」と、語る中より驚く母、我子が一腰拔放し、「夫の敵」と切り付くるを、「コレ〳〵申し」と平太郎、其手にすがり止むれば、「イヤ〳〵〳〵、放せ〳〵」と親子が爭ひ。時澄眉に皺を寄せ、「何と〳〵。扨は身が手にかけた、次官光當が所緣の者で有りしよな」と、切刃廻せば平太郎、「ィヤ〳〵申し、左樣な者ではさら〳〵なし。是なるは我らが母、ふと正氣を失へば」「ア、これ〳〵〳〵、どこ

に正氣を失うた」「ソレ〳〵さうおつしやるが則氣違ひ」「アレまだいの」「サア〳〵其氣違ひを直さん爲、夫故に本宮の、ナ、ハテ湯治に參つた。一廻りでは直らぬ筈、何事も私次第に。サアサア〳〵必何もおつしやんな」と、刀を鞘に指寄つて、「とかく本性でないから、慮外の段は御宥免、お詫び申す」と手をつけば、「ム、いか樣、目の内のきよろ付くは、氣違ひに極つた。必刃物を持たするな」と、時濟が納得に季仲も立上り、「御邊は今のを合點か、岩淵とも云ひ合せ、忠盛、ナ、たゞ打殺した其跡で、戀を叶へて首尾よう」と、目と目で知らす横車、坂口までと時澄が、「追付け吉左右仕らん」「ヲヽサ待つぞ」と季仲は、都をさして別れ行く。跡を遙に打詠め、殘り多げに立上る、母が手先もふるひ聲、「コリヤ平太郎なぜとめた。廻り逢うた夫の敵、いで追かけて」と行く先に、「マア〳〵お待ち下され」と、止める腕をふり放し、有り合ふ杖を追取りのべ、背骨髑容赦なく、打ちすゑ〳〵息をつぎ、「ヤア爰な卑怯者、年來の親の敵、我と名乘つて顯はしたは、權現樣の御手引、有りがたしと思はゞな、母より先へ飛びかゝり、一かせなりとも討つべきに、まんそくな此母まで、氣違にしたは何の爲、ようのめ〳〵と逃したなア。臆病者大腰ぬけ。憎や〳〵腹立や」と、身をふるはして無念泣。平太郎も諸共に、むせぶ涙を押拭ひ、「段々の御腹立、御怒は御尤、あらぬ事を申上げ、おとゞめ申した平太郎、いつかな憶れは致しませぬ。俱に天を戴かざる父の敵、夫ぞと名乘つた其時には、飛立つばかりの我が胸中。おめ〳〵此場をかへせしは、御覽のごとくアノ大勢、何程手しげく働くとも、叶はぬ時は返り討。死する命は惜しからねど、某が相果てなば、申し、誰か殘つて育みませう。とあつて討たねば父への不孝、二ッの道に迷ひしが、面體苗字知る上は、重て討つべき時節もと、寶の山へ入りながら、是非なく敵を助けしぞや。まだ其上に勿體ない、母人を狂氣にせし、御怒をしづめられ、平太郎が心の無念させつなさを、御推量下され」と、宥めつ詫びつ手を合せ、誤るも又涙なる。母も始終を聞くに付け、「尤なりさりながら、そなたに限りよもやよも、卑怯未練の心はない筈、老の一途に跡先なく、打擲したは母が誤り、麁忽で有つた。堪忍してたもこらへてたも、どこも痛みはせなんだか」「コハ冥加なき御仰、只今の御杖の跡、骸に痛みを覺えぬは、次第につもる御齡、御手の力もおのづから、お年の上の加減かと、思へば悲しうございます」「ヤア〳〵〳〵、今打擲した其杖の、身にこたへぬが悲しいとや。親がひに無體の杖、世には我子を折檻し、異見の爲の打擲を、かへつて恨むる者も有る。母が力の弱りしを、惜み悲しむ孝行が、又と類もあろかいの。宿世いかなる界境で、貧苦をさする、かはいや」と、親子手に手を取りかはし、互に詫びつ詫びらるゝ、涙の雨は時ならぬ、時雨に袖やぬらすらん。か

かる歎を、立聞きし、お柳は心汲む端香、茶碗もつ手もおもはゆく、しづ〳〵傍に立寄つて、「ナウ申しお二人様、殘らず様子は聞きました。扨も〳〵おいとしや。取分け旅はつらいもの、私が臥所は此庵、まばらには有りながら、暫くあれにてお休みあれ。獨住の事なれば、必遠慮は御無用ぞ」と、奥底もなき饗に、母は悦び、「是はマア様子を聞いたと有るからは、包隱さう様もなし。お詞にあまへまし、然らばお世話に」「ア、何のいな、一河の流谷の水、茶を入れかへて馳走せん。サア〳〵こちへ」と手を引いて、いたはり庵へ伴ひ行く。後をつく〴〵平太郎、「テモ扨も、行先に鬼はないとの世上の譬、かゝるけはしき山中にも、やさしき人もあれば有る。まだ年若な身を以て、何故の獨住、ハテしをらしや」と獨言、思ひつくまの鍋ならで、茶杓のえにし深縁、柳が本の肘枕、夢にうさをやはらしけり。春風に、糸よりかけて白露の、玉にもぬける青柳の、二世の紲にひかれくる、お柳は邊見廻して、おづ〳〵傍へ寄りながら、何といは洩る露雫。「申し〳〵旅のお方、申し〳〵」と音すれば、恟して起直り、「是は〳〵御女中様、母の介抱お世話の段々忝し」「オ、笑止、そりやマア何の事ぢやいな」「ア、いや〳〵、きつとお禮を申さにやならぬ。旅は道連、世は情と申せども、取分けあなたにはどうした御縁か廻り合ひ、心までがゆりたやら、寐るともなしにつひとろ〳〵。無禮は御免」と手をつけば、お柳も

につと會釋して、「是はしたり、其様にお禮に及ぶ事かいな。母御様にもお勞やら、今すや〳〵とお鼾が」「ハア扨は寐入られましたかな、嬉しや〳〵忝い。是と申すも一樹の蔭、何ぞの御縁でござりませう」「サイナ申し、其御縁に附きまして、問ひましたい事がござんする」「ハア、夫は何でか」「サア申し、外の事でもござんせぬ。アノナお前様には、アノお内儀様がござんすかえ」「ハア是は改まつたお尋でござります、が、お内儀様はまだ持ちませぬが、夫が何とぞ」「サアまだならば、持たしやんしたらよかろかと、いふ事でござんする」「されば〳〵、今やなど持ちましては、たつた一人の母人へ、おのづと篤末になる道理、不孝になれば」「イエ〳〵〳〵、夫は悪い御合點、さつきお前がおつしやるには、若し返り討にあうたらば、お袋様を育み申す者がないと、おつしやつたではないかいな」「ハアいか様左様」「サア夫ぢやによつて女房を持ち、やゝでも一人設けたら、其やゝと、お前様や、マア、アノナ、私が女房に成つたらば、夫こそほんにほん〴〵の母様と、倶に孝行盡さうもの。しんきな事や」と寄りそへば、「イヤもう先程よりの御深切、見ず知らずの我々、お禮の申し様もござりませぬ」「アレまだいな、何とお聞きなされます、お前さへ御合點なら、あなたは私が母様も同じ事、孝行が申したい」「サア夫は近比忝い。嬉しいは嬉しけれど、よもや今まで」「ヱ」「どこぞに可愛男があろ」「オ、わつけもない、男

もなけりや親もなし、兄弟もなし、何にもない一本立」「テモ嘘ばかり。見れば見る程爪はづれの美しさ、尋常な事はいの。よう人が只おこぞ」「ホ、、、恥かしい事ばかり。山家生れのぶ骨な私、お前の様なよい殿御に、そうて見たいと思ふから、花の盛も目につかず、夜を數へ日を數へ」「サア夫でもつんとどうやら誠と思はれぬ」「アレまだ深いお疑、眞實誓文で、ほんに誠でござんする」「そんなら合うたり叶うたり、談合せうか」と手を取れば、「ア、嬉しや」と抱きしめて、わりなき中の妻結び、深きえにしの始なる。「あひに相生の松こそめでたかりけり」、壽祝ふ母の聲、銚子盃携へて、二人が中に押直り、「ヤレ〳〵嬉しや、願ふ所の幸々。取りあへず祝儀の盃、嫁御さいて下され」と、母が手づから酌取つて、「めでたうござる」といふより外、三々くどき詞もなく、粋な老女の取結び、世界の母の手本なり　お柳は盃取納め、「此上ながらいつまでも、母様と存じます」「是はしたり、年寄つたわらはが身の上、面倒を頼みます」「イエイエわたしが」「イヤわしが」と、中よき中の挨拶に、お柳も嬉しく、「イヤ申しおふたり共、どうぞいつまでも此所に」「ヲ、成程々々、母人の生國故、是まで常陸に住みけるが、樣子有つて權現へ、年月歩を運ぶ我々、住所にとどまる間もなし」「サア夫なれば猶幸、三つのお山へ程近き、此邊を住家と遊ばせ。マア〳〵旅路の御勞、何かの事は寐ながらも、庵の内でお咄し」

と、打連れてこそ入りにけれ。有漏よりも、無漏に入りぬる道なれば、是ぞ佛の御本なるらん。此御歌の告により、白川の法皇は、御病惱のいたはりとて、本宮の御社湯本にとどまりおはせしが、賽の法施を捧げ、祇園女御諸共に、還御は車の本までと、山路の供奉は備前の守平の忠盛、賤が床几を幸と、御腰を暫しかけまくも、敬ひ傅き奉らる。法皇龍顏うるはしく、「ヤヨ忠盛、朕が重病悉除の爲、三十三度の祈願を籠め、歩を運ぶ驗にや、惱も輕く覺ゆるは、偏に神の御利益、悦ばしや」と勅。女御も笑を含ませ給ひ、「誠や妙なる三ツの山、始めて御供申せしが、聞きしに增さる靈地といひ、君の御惱もいつ〳〵より御怠らせ給ふとは、殊更神の御守り、有りがたさよ」と宣へば、忠盛はつと領　掌し、「往昔平城天皇を當山御幸の始とし、三十三所順禮の始と申すは、花山院瀧の流の元にして、三ケ年の其間、一千日の行より、修驗道の始とす。其後九穴の鮑の貝、瀧の本へ納めさせ、此度勅に隨ひて、忠盛海士に申付け、瀧壺へ入れしかば、何樣傘をひろげしごとく、れい〳〵と候へば、疑ふ所候はず。日本第一の名水　手の内に掬すれば、長生を得るとかや。御惱も全快たるべし」と、奏し申せば法皇も、叡感限りなき折から、吹きくる風の谺につれ、えい〳〵聲鯨波、山谷樹木動搖せり。コハ何事ぞと一方も、驚き給ふ御氣色、忠盛騷がずつつ立ち上り、心を配る其所へ、謀叛一味の和田四郎、ほくそ頭

巾に顔押包み、手の者引連れ追取卷き、「我々は深山に住み、順禮道者に合力受け、世を渡る山賊なり。路銀衣類を渡されよ。異議に及ばゞ此岨道、跡へも先へも通すまじ。何と〳〵一と呼はつたり。忠盛ふつと吹出し、「事も愚や、白川の法皇還御の道、備前の守忠盛が御供なるぞ。普天の下に住みながら、御恩を知らぬ蠅蟲めら。三拜九拜かつつくばひ、道を開け」と大音聲。「イヤ法皇でも烏でも、翅をもいで追拂ひ、女御ばかりを奪ひ取れ」と、下知にむらがる溢者、一度に寄るを寄せ付けず、蹴倒しはり退け嘲笑ひ、「祇園女御を奪へとは、よつ程實の有る山賊めら。忠盛が供奉の帶劒、切味見せん」と拔きかざし、一ふり振れば三人五人、岩淵始め逸足出し、逃ぐるをやらじと追うて行く。後には二方いかゞぞと、叡慮を苦しめ給ふ所へ、取つて返す惡黨原、「ソレ〳〵女御を奪ひ取れ」と、既に危き後の庵、一腰ぼつ込み平太郎、飛んで出でさままつかせと、弓手めでへ投げ退け〳〵、「コレ〳〵母人女房ども、御二方の介抱を」と、詞の内より「いざ〳〵」と、母とお柳が御供し、忍ばせ申せば平太郎、心安しと拔き持ちて、支へる族を大袈裟小げさ、眞向竪割車切、殘る奴原餘さじと、追かけ行くを、「ナウこれ〳〵、待つて〳〵」と聲かけて、お柳は母を伴ひ出て、「上々樣を預る上、お年寄られた母樣に、過有つては不孝なり。跡は私が受取つた、内で申した所まで、早う〳〵」と氣をせけば、「實も〳〵、

母も大事の其上に」「サア申し、お二方にも氣づかひ有るな。かういふ中も危い〳〵。然らばそこまで立退かん」と、背指し向けておいの身に、「孝行道はまつかう〳〵。跡から早う」と云ひ捨てて、谷道傳ひ急ぎ行く。韋駄天走に平忠盛、君はいかにといぶかる内、お柳が誘ふ法皇女御、「コレ〳〵忠盛、是なる者が介抱故」と、仰もあへぬに、「申し〳〵、土も草木も君が代に、住むこそ深き御恩なれ。何のお禮をおつしやる間に、新宮の濱手には、舟の渡海も自由なり。一先かしこへ御開き」「實尤」と悅ぶ忠盛、「情の禮は追ての事。恐ながら」と負ひ奉り、女御の御手を取り〴〵に、濱邊の方へと出で給ふ。又もや人音聞ゆれば、心に點き呑込んで、見ゆる柳に手をかけて、引けばしいわりしだれる枝、女力に押し撓め、腰打ちかけてたばこ盆、きせるに憂さをはらし居る。うろ〳〵眼の手下ども、「コリヤ〳〵女、法皇女御はどつちへ往た、早くぬかせ」「サア其お方はいッつの昔、あの坂口をまつ下り、二里も三里もさつきの事。マア〳〵ちつと休まんせ、茶も沸いて有りたばこも爰に」「ム、いか樣、夫程に違うては、天狗でもとゞくまい。ドリヤ一ぷく」と腰打ちかけ、てんでに煙草すつぱ〳〵。時分もよしとこなたは氣轉、「ドレ茶を汲んで」と立つ拍子、ぽんと刎ねたる柳の鞠、岩にぴつしやり打碎かれ、微塵に成つて死してげり。「扨も氣味よし心地よし。よし〳〵爰を立退いて、楊枝村のよしみを便り、思ふ殿

御といつまでも、母御に孝行盡すもよし。折もよし有る夫婦が中、ふしぎに寄るも三熊野の、神の惠のえにしぞと、悅びいさみて、三重走り行く。爰も岸打つ浪の音、新宮の濱先に、つなぎ捨てたる渡海づくり、季仲が殘したる、術と急ぐ武者所、鷲六猿平引連れて、岩淵諸共かけ來り、「忠盛めが勇力に、此時澄が家來まで、イヤハヤ案に相違な不首尾。何分我は知らぬ分、味方顏して裏切せん。岩淵はいかに〳〵」「サア某はあの森かげに身を隱し、法皇女御は足弱ども、此舟見付けて參るは治定、忠盛さへ討ち取れば、法皇は籠中の鳥、女御は安々都へ送り、黑帥殿の御簾中。ムヽうまい〳〵。此時澄はお公家樣、汝も大名合點か」合點々々としめし合ひ、身を潛めてぞ待ちゐたる。斯とはいざや、しら波の、砂を踏み立て平忠盛、見ゆる汀の大船に、人音なければ幸と、君二方の御手を取り、とく〳〵めさせ奉り、纜とかんとする所へ、待ちまうけたる惡黨原、それと聲かけ切り付くるを、ひらりとかはし楫追取り、はつし〳〵となぎ立つれば、爰の岩かげ森のかげ、我も〳〵と顯れ出で、茅の穗先白浪の、切先立浪どうどう、途を失うて逃げ行くを、餘さじやらじと追つて行く。しすましたりと和田四郎、「サアサア此間がよい首尾ぞ」と、ひらりと飛んで乘り移れば、「コハ何者ぞ」と驚く玉體、手ごめにし、「鷲六猿平合點か」「心得たり」と帆を引き上げ、艪櫂取りのべさつさ聲、半段斗り押し出す時しも、宙をかけつて平忠盛、「なむ三寶遲かりし。ヤア〳〵天子に敵たふ人非人、其船戾せ」と呼はつたり。岩淵どつと打笑ひ、「陸でこそは負けてゐた、かうしたからは此方の物。アノ馬鹿つらを見よ〳〵」と、いふに忠盛身をあせり、行きつ戾りつ見付けるもやひ、纜しつかと手に搦卷き、天のあたへのもやひ綱、戾してくれんとえい〳〵聲。岩淵あせつて、「ソレ〳〵ソレ、繩を切れよ」と下知すれども、刀は殘らず打落され、さすが一本あら繩を、ほどかん折もあらしの潮、磯にはえい〳〵引く力、戾すな行れよとゆふ浪の、とぢめん帆を卷き艪を押し立て、「ゑいやんざ」火水に成つて押す力、引き戾さんず金剛力、ゆらりゆら〳〵もみ合ひしは、小島の動くに異ならず。されども忠義の忠盛に、龍神部類の擁護にや、なんなく干潟に引き付け〳〵、ひらりと飛び乘る勢ひに、恐れをなして和田四郎、ざんぶと飛込み水底くぐり、行方知らず逃失せたり。這ひかどんだる二人の殘黨、手玉に擲んで投込む所へ、おくればせなる武者所、拾ひ首の血刀さげていかめしく、「山賊に出合ひ切りちらし、漸〳〵只今參上」と、鼻も動かぬ廣言たら〳〵。「ヲヽよい所へ武者所、君が御船の楫取して、長島まで守護せられよ。我は陸路に殘黨原、取つて返さば防ぐ爲、濱邊傳ひに御供せん」と、指圖に是非も時澄が、時の用には楫取役、君も女御も安堵の思ひ。忠盛勇んで下知をなし、時刻移るとゆふ浪に、「ヲヽサ合點

ぢや、エイヤンザ。工面が違うて、エイヤッサ」ふせうぐ〳〵に押すや此、艪柄を取つて時の間に、早舟手舟に乘廻し、數千艘にて寄するとも、忠盛かくて有るからは、腕もさゝ舟あま茶舟、軍船漁船押し切つて、破軍の釼先鉾先に、片端舟は一摑、ころり〳〵の丸太舟、てんたう天魔の障碍もなく、公にすゝむる　艤、敵は浪間にうつろ舟、守護する君が寶舟、千里一はね走舟、都の空へと還　御ある。

第　二

時を得て、威勢日に增す平家の館、備前守平忠盛、數度の武功の恩賞に、下し給はる閨の花、祇園女御と聞えしは、柳が枝に初櫻、梅の匂ひを含ませし、色香に勝りおとりなき、池殿御前と指向ひ、乞目爭ふ雙六の、左右に別れてお伽役、池殿方には進將監國貞、女御方にはお出入の、輕薄醫者の多熊法眼、勝負を二人が酒賭に、負方が呑む云合せ、おもひ〳〵の片贔屓、ハヤと媚めける遊びなり。「申し〳〵池殿樣、どうぞお勝ち遊ばせ。三度のお負でこの將監、續けさまに三盃、イヤもうどうもたまりませぬ。今度は極めてお前のお勝、法眼呑ますぞ覺悟召され。オヽさうぢや〳〵、其石切つて、マア〳〵六地をお塞ぎなされ」「アヽこれ將監助言ならぬ。したが助言ぐらゐで女御樣には勝てぬ〳〵。じたい忠盛樣、簒の目よりは人目を忍び、年月戀に乞目の君樣。ソレ〳〵今度は朱三が出ると、池殿樣は又むしぢや。しゆ三〳〵」と呼び立つれば、女御は却つて池殿の、勝になれかし我乞目、打たじ〳〵と直なる、心に連れて簒の目の、しゆ三とすわれば女御方、法眼始めいさみ立ち、「サア又勝ぢや將監殿、呑んだ〳〵」と盃を、突付けられて「池殿樣、コリヤまあどうでござります。女御樣は畢竟が勅諚のお妾故、お客樣同然、いかに亭主ぶりぢやとて、さうお負けなされては、此將監いきつきます」と、底意に針持つひいき口、「イヤコレ將監、其樣に負腹たちやるな。亭主ぶりでも客ぶりでも、負けるが下手ぢや。併し女御樣の勝ち續けで、此法眼酒がたらぬ、貴公は下手な池殿方で、酒が過ぎて面白かろ。あやかり者め」と嘲れば、女御は氣の毒、池殿は女心の一筋に、傍の手前もはぢ紅葉、思はず顏の色目立ち、「ほんに〳〵本意ない負け樣。したが忠盛樣の御祕藏の女御樣、ひよつと自が勝つたなら、忠盛樣が腹立てて、雙六ばかりか大事〳〵の、人の花まで乞目のお上手、今からあなたの弟子に成り、此筒よりは忠盛樣に、ふられぬ樣にせうかいなう。將監、さうぢやないかいの」「左樣とも〳〵、じたい此雙六の簒は恐ろしい性根な物、唐土の玄宗の官女、虞子君楊貴妃と乞目爭ひ、重三重四に朱をさいて、官職を給はる故、今の世までも重三重四といふ事を、朱

三朱四と呼びならはす。簒の二つは月日を表し、人で申さば本妻お妾。ナァ申し、お前様は御本妻、其本妻でも乞目ふりがナ、此白黒の石の數、夜も晝も筒を握り、五二五三に放さずば、本妻様はむし〳〵で、明目ばかりふつてがな。必油斷なされな」と、お爲ごかしに云ひ廻せば、法眼引取り、「コレサ國貞、法界悋氣おかれい〳〵。戀に前後のわかちはない。殊に女御は法皇様から勅諚のお妾、叶はぬ〳〵」と聞くより池殿せき立ち給ひ、「コレ〳〵法眼、自が女御様に叶はぬといふのかや。媚容はおとるとも、夫を大事大切に、思ふ心は負けはせぬ。勅諚沙汰はいや〳〵」と、怒の詞に付け込む將監、「いか様法眼が勅諚呼はり、又しても氣にくはぬ」と、眞顔の論を聞く女御、「是はマァ〳〵將監の詞とも覺えぬ、何しに自其様な、さもしい心を持つものぞ。いつまでも池殿を、頼まねばならぬ此身の上、心にかけて給はるな」と、氣の毒顔の御氣色。「イヤいつまでも末長うとおつしやるが、池殿様の聞き所、此將監は呑込まぬ」「コレ〳〵何ほ貴殿が呑込まいでも、忠盛様がお呑込、ナァ〳〵申し女御様」と、多熊と將監相槌の、拍子揃へて焚付くれば、悋氣に遺女氣の、穂に顯はるゝ盤の面、石も亂るゝばかりなり。間の襖を引き明けて、將監が嫁の若倉、しづ〳〵立出でしとやかに、「是は〳〵お二人様、おはしたないお顔持、法眼殿も舅君にも有られもない、鴨川の水と簒の目は、帝様さへお心にまかせぬとや

ら、勝負の知れぬが時の興お慰、夫を傍から何のかの、唐の倭の諺で、互にお氣の立つ様に、お伽ではなうて喧嘩の行司、少とお嗜み遊ばしませ」と、やり込められて顔と顔、まじめに成るぞ心地よき。「サァ〳〵申し女御様、奥の間へお越し遊ばせ、お二人置いたら又何か、池殿様にも倶々に、仕返しの勝負の雙六、所をかへて遊ばしませ。女御様からマァお出で」と、進め申せば立ち給ひ、「池殿様お先へ」と、姿繕ふ海棠の、花の袂を打覆ひ、妙引連れ若倉が、案内に付いて入り給ふ。跡を詠めて將監が、池殿の傍に寄り、「忠盛公とあの女御は、浮名の立つた深い中、法皇が呑込んで、勅諚のお妾、お前様は俗にいふ奥様の餅の形、日かげ者と同じ事、そこへ心の付かぬとは、身を知らぬと申すもの。かう申すもお馴染だけ、末の事まで思はれて、此將監さへくい〳〵思うてをります」と、實に見せたる空涙。聞くにましくる池殿の、胸の焔にそゝぐ水、「悋氣がましい事いへば、あいそのつきる事もやと、包むに餘る物思ひ、若しも女御に自が、見かへられたらどうせうぞ。恨めしや悲しや」と、身を震はしてかこち泣。二人は點きしすまし顔、膝と膝とをにじり寄り、「お道理〳〵、ナウ御臺様、法眼が醫術で、あの女御を忠盛様に飽かする仕様、ナァ申し、とつくりとお頼み有れ」と、吹込む毒氣を御臺は點き、「そんならどうぞ能い様に、法眼殿頼むぞや」「成程々々呑込んだ。仕様はかう」と傍に有り合

ふ料紙と硯、筆追取りてさら〳〵と、書認めて差出すを、池殿御前手に取つて、「ヤア是は」「さう恂りなさるゝは、御得心でないさうな。忠盛様から大切に、お前ならでと思召し、行末長う添はるゝ様、かうするもお前のお爲。サア御得心でござるか」と、二人が工に云ひ廻され、「ハテ添ひたいが定ぢやもの、女御にあいそのつきる様、必々頼むぞ」と、仰をハット呑込む法眼、「ちつとも氣づかひ召さるゝな。首尾した上では、一廉の御褒美ぢやが合點か」「ヲ、首尾さへ成れば望に任す」「イヤ夫さへ聞いたら實を入れて、お受合申します。必隱密々々」と、點き囁く折も折、勅使のお入と呼はるにぞ、二人は表へ、池殿は、「奥へお知らせ申さん」と、立ち別れてぞ入り給ふ。程なく沓音けだかくも、右大臣師實公、北面の武者所時澄を相隨へ、儲の褥につき給へば、館の主忠盛卿、進藏人諸共に、禮儀正しく平伏有る。右大臣殿正笏し、「いかに忠盛、貴邊の勳功勸賞には内の昇殿を赦され、其上女御を賜はる事、家の繁昌身の譽、有りがたくも思はれよ。今日の院宣餘の儀にあらず、法皇頭痛御惱頻によつて、熊野權現へ御立願有りし所に、三夜に續くふしぎの靈夢、法皇の前生は蓮華王坊といふ修驗者、三山百度の歩の内、九十九度にて慢心發り、忽破旬の怒を受け、谷底へ投げ付けられ、支體は微塵に碎くといへども、頭は柳の梢に止り、夫より星霜遙に移り、谷の柳は六十餘丈に生ひ茂り、梢に殘る前生の

髑髏、風の吹く度々に、動くに連れて頭痛の惱、是を平癒あらんには、彼の柳を切り取り、王城に於いて三十三間の御堂建立あらんとの結構。則ち忠盛へ任すべしとの院宣なり」と述べ給ふ。忠盛すさつて頭をさげ、「物數ならぬ某、かゝる宣旨を蒙る事、武士の大慶是に過ぎず、畏り奉る。ヤア〳〵藏人、大切なる君命、熊野山へ立越え、柳の在所を尋ね求むる其使、其旨心得たるか」「ハ、はつ」とばかりに藏人が、お受申せば、「ヤア其役目は此時澄、假初ながら天子の御用、陪臣づれは遣られぬ」と、支ゆれば師實公、「麁忽なり時澄、此度の造營は、忠盛萬事に構はれそ」と、仰せに時澄、「サア夫は夫で濟み申すが、濟まぬは謀反に合體した源義親、太宰帥が在家の詮議、爲義が預つても、サアいまだ有無の沙汰もなし。ナウ藏人、源氏の勇氣に氣を呑まれ、臆病風での延引か」と、儕が一味の空とぼけ、云ひほぐすれば師實公、「扨々いらざる作配立、平家の事は源氏が正し、源氏の惡事は平家より、源平兩家相互、君を補佐する武將の役。さりながら、義親が問狀今日中、忠盛きつと沙汰せられよ。まづ法皇へ領掌の旨奏聞せん。早退出」と立ち給へば、忠盛主從式禮に、見送る先へ武者所、肩肱はつて立歸る。引違へて出る奏者、「陸奥の冠者爲義、大宅四郎惟弘、召によつて參上」と、披露につれて入り來

る。智仁勇を備へたる、其源の爲義とて、十八歳の角額、長上下を爽に、遏武將の其骨柄、付添ふ武士は大宅四郎太夫惟弘、六十に餘る腰刀、進藏人家貞が、舅の禮儀内證口、威儀を正して座に直る。爲義忠盛に打向ひ、「今日の御召、御用いかゞ」と有りければ、「ヲヽ、早速の御來駕祝着々々。先達て館へ預けし義親の儀、改め申すに及ばねども、五年以前、法皇熊野へ御幸の折から、岩淵和田四郎といふ者、鳳輦に向ひ狼藉せしは、季仲が所爲なる由。彼の和田四郎は、義親の郎等鹿島三郎と聞き及ぶ。此程都に徘徊し、民間に亂れ入る事日夜の注進。是によつて黨類を搦捕り拷問にかけし所、太宰黑帥又源義親叛逆に紛れなき條再三の白狀。さるによつて義親を召捕り貴殿に預け、逐電せし季仲が在家、白狀させられよと申渡し置きたるは、親子一所でないといふ爲義の面晴。先刻禁庭より師實公別勅の趣、今日中沙汰致すべき勅諚なり」と有りければ、爲義謹んで畏り、「大切なる詮議の役、殊更父子の間と申し、旁以てゆるかせならず、百度千度責具を以て拷問に及び候へども、いまだ白狀仕らず、是なる惟弘が計らひにて、晝夜寐さゝぬ現責、十日餘りに及ぶ所、更に色目も見えざれば、此上は勅諚に任すべき外候はず」と、言上有れば惟弘も手をつかへ、「爲義の詞のごとく、樣々におどしつすかし責めとへども、白狀致さぬしぶとき魂。某とても存じの通り、義親を守り育てたる由緣によつて、何とぞ善心に飜へさせ、源家の汚名をすゝがんと、心を盡すかひもなく、愚老を始め爲義が胸中、御賢察下さるべし」と、詞も半涙ぐむ、心を察する忠盛主從、俱に心をいためしが、「ナウ爲義、今日改めての勅諚有り、季仲が城郭明白に相知れなば、討手には爲義たるべし。又義親が白狀なきにおいては、爲義が手に斷罪せしむる條院の勅命。急ぎ歸つて今一應問狀にかけられよ。扨々方々の胸中察し入る。幸薄酒到來せり、酒は愁を拂ふといへば、心ばかりの我饗應。藏人早く」と仰の内、急いで用意や有りつらん、長柄盃臺肴、お傍小姓が汲む酌に、忠盛受けてずつと乾し、「爲義一つ」とさし給へば、「コハ御懇志の御盃、頂戴申す」と取り上げて、てうど受けたる盃に、「肴を勸めん、それ〳〵」と詞の下、藏人立つて一間より、袋に入れたる太刀一振、忠盛に傳ふれば、取直し押戴き、「抑此太刀は、上平太貞盛將門を退治の時、朱雀帝より給はりし小烏丸の名劍、家に傳はる重寶なれども、義親白狀なきにおいては、是を以て刑罰せられよ爲義」と、紐を結んで祕封を付け、膝元に直さるれば、爲義心に急いたる面色、「ハツ義親が刑罰、志の賜、祝着には存ずれども、平家の家に小烏有れば、某が家にも鬼切と申す名劍、前九年後三年、數度の軍に勝利を得し源氏の重寶、何ぞや平氏の劍、源家に用ゐる謂なし。若輩者と思召しての御賜、申受けたる同前」と、押戻したる爲義の、心をはかつて惟弘は、

只默然と詞なし。忠盛大きに打笑ひ、「爲義には若輩故、麁急とばし思はれん。叛逆一味の義親は、爲義、貴殿の父ならずや。源家の重寶鬼切丸の劍を以て、現在父を斷罪せられば、御身は忽不孝の名を世上に觸れ、鬼切の名劍にて、同じ源氏を切りたりと、劍も德を失ふ道理。そこを察して此小烏、爲義の手を借つて、忠盛が討つも同然。さすれば不孝の科もなく、勅諚も立所に、拔群の忠節。惟弘いかに」と忠盛の、仁義を兼ねたる引出物、ハッと感ずるばかりなり。「ハァ遖名將聰明叡智。源平兩家と別るれども、直なる掟の忠盛公、志の御賜、頂戴有れ」と惟弘が、取つて渡せば爲義も、すさつて三拜押戴き、「忠義の道には父子兄弟、戰ひ挑むも武士のならひ、彌〳〵白狀なき時は、只一討」と跡云ひさし、恩愛親子のうき思ひ、さし俯いておはします、胸の思ひを汲み取る惟弘、「若しもや白狀召されなば」「ヲ、サ〳〵其時は、忠盛が身にかへて義親の命乞、禁庭宜しく奏聞せん」「ァ、有りがたし」と悅ぶにぞ、爲義は封印の、袋をつくづく見るからに、此小烏も音を出さば、父かはいとや叫ぶらん。思へば武士の身の上程。「忠盛公おさらば」と、涙隱して立ち上る。陸奥の冠者が元服して、六條判官爲義とて、保元以後の戰ひに、子の義朝にあへなくも、討たるゝ謂を今爰に、思ひやられて哀なり。惟弘も打しをれ、「イザお暇」と立ち上るを、忠盛「暫し」と止め給ひ、「酒はつれば何とやら、藏人一獻すゝめよ」と、仰にハッと惟弘が、戴く盃つぐは聟、肴は忠盛臺引き寄せ、手づから給はる有りがたさ。「兩人さらば」と忠盛公、「藏人來れ」と打連れて、帳臺深く入り給ふ。跡に惟弘手に受けし、肴を詠めてハァはつと、心に點き立上り、「若殿ござれ」「供せい」と、持つて立ちたる太刀袋、情もこもる口ごもる、肴を包むかみならで、心の底をほり川の、館をさして　三重「サァサァ申し義親樣、白狀をなされませ。敵の在家さへおつしやれば、存分に寐させます。アレまだいの。此樣な烏の羽でこそぐつてはお目が覺めぬ、責道具のどら太鼓、耳のはたで打たうぢやないか、まきの殿」「ヲ、夫がよかろ」と立騷ぎ、晝夜をわかぬ現責、詮議の底をほり川の、六條通りに一構、陸奥冠者爲義の館には、內匠頭義親を預りて、太宰帥季仲がたて籠る、在家を尋ぬる問狀の、役目もつどき妙ども、時かはりとは知られたり。「ヤイめろさいども、是程目を明いてゐるに、又しても耳の端でやかましい、置きあがれ」と、睨む目玉もとろ〳〵目元。「サァお目明てござるなら、所を早う御意なされ」「知らぬはい。同じ事を毎日々々、どの樣に責めたとて、知らぬ事はいつまでも、知らぬぞ〳〵」「サァ知らぬ〳〵とおつしやつても、お前より外知つた者がない故に、コレ申し〳〵」「サァ聞いてゐるはいやい」「サァ聞いてござるなら早うおつしやれ」「ソリャ何を」「何であらうと敵の在家を」「おりや知らぬ。何にも知らぬ。知らぬ

知らぬ」も白川夜舟、楫取り兼ぬる風情なり。源家の大老大宅四郎太夫惟弘が女房、夫の留主と氣を付けて、奥の襖をあけほのが、腰に梓の、弓取の、行儀は常の座敷に立出で、「是は扨養君、まだ白狀は召されぬの。其樣にうつら〳〵、いつ事が干まするぞ。お前の心が心なら、八幡太郎義家公の御惣領、家督をも繼がしやる筈。爲義樣はこなたのお子、まだ年はいかねども、武勇といひ、忠非の道を守り、八幡殿によう似た大將。お前はマア誰に似て、其樣な惡者にならしやつた。季仲が謀叛に一味して、天下を騷がす無道人。養ひ育てた我々、御先祖へ恥しい。アレ〳〵人にばかり物いはせ、うつら〳〵と夢現。ソレ女ども起せやい」「アイ〳〵。いやもうどの樣に致しても、お目の覺める事ぢやござりませぬ」「サア夫でも言はせねば埒が明かぬ。ドレ〳〵ちつと手がはりして、白狀ささう」と立ちかゝる折も折、「進藏人樣御出なり」と、書院に小姓が取次ぐ聲、「ヤア〳〵、聟藏人が見えたとは、ハテ心得ぬ。夫惟弘殿、爲義樣のお供して、聟の主人忠盛樣へいかしやつたに、歸りの遲いを案じる中、聟が見えるもいぶかし」と、出向ふ一間へ入り來るは、藏人ならで若倉が、襠姿のしとやかさ。「是は〳〵、聟殿かと思ひの外娘の若倉。シテ藏人は見えなんだか」「アイ、夫藏人は御用しげく、名代に參る樣にと申されました」「夫は大儀や、ようこそ」と、親子は膝を押しならべ、「今日は爲義樣とゝ樣諸共、いまだ忠盛樣と御内談の其間、藏人が申付け、内意に參りし其譯は、舅惟弘殿には、養君義親樣を預り、敵の在家を御詮議有れども、今に白狀ないとの事、そちも義親殿とは乳兄弟の事なれば、倶々に詮議して、お年寄の親々へ、心づかひを休むる樣にと夫の内證。夫故に參りしてござんす」と、聞いて點き、「サレバイノ、丁度けふで十日餘りの現責、今も今傍へいて、意見をしても夢中に成つてゐやつしやる。ソレ又俯いてぢや、起せ〳〵」と急付かれて、又打ち立てる太鼓の音、「エ、鈍なめろさいども。目を明いてゐるもの、眼玉にはかゝらぬか」と、呵る詞も現やたわい。「サア〳〵早う白狀」と、口々傍からせがめども、ふらり〳〵は糠に釘、こたへは鼾ばかりなり。「あれを見や若倉、毎日毎夜あの通り。幸ひおぢやつたそなたと二人、責めて見よう」と立寄つて、「コレ〳〵〳〵爲義樣や、夫の歸りも追付でござろぞや、今の内に言はしやれ」と、背中を突けば目をはつちり。若倉も躙寄り、「アノ申し母樣、もう御詮議には及びませぬ。何ほお隱しなされても、天命といふもので、連判狀の在所、季仲が隱家も知れました」と、聞くより義親立上り、「ヤア〳〵季仲が有家、近江に居る事知れたるな」「アイ其通りでござります。其近江路を聞かうばかり、夫程知つてござるもの、なぜにとうからおつしやらぬ。とてもの事に方角も所の名も、有りやうに言はしやんせ。彌お隱し召さるれば、今日中にお命がないとの

事、夫を知らせに來た私、根が乳兄弟の好だけ、サア〳〵次手に白狀」と、詰めかけられて空とぼけ、「ア、寐ぶたい〳〵。近江蕪の風呂吹はどうぢややい。近江は蕪の名物、あんな蕪を矢に矧いで、神通の蕪矢を射たらよかろといふ事ぢや。ア、ねぶたや」と伸欠、「是から奥でぐつたりと、ねさしてくれ」とふり切つて、羽がいじめなる縄取り〳〵、妙どもが「ならぬ〳〵、ねさしはせぬ」とどら太鼓、打ち立て〳〵追うて行く。跡を詠めて母娘、惘れる中に曙が、「ナウ若倉、誠に在家が知れたかや」「ア、母樣の何のいな、今の樣に申したは夫が智略。どうしてなりとかゝ樣やとゝ樣のお心を休める樣、義親樣には取分けて、白狀ないに極れば、彌敵へ一味の印、首討つて出せと有る大内の御評定。藏人殿も笑止がり、舅殿の養君、けふの日中が生死のさかひ、さつぱりと白狀させ、命助ける計略には、所も近江と聞いたれば、かう〳〵せいと夫の指圖。今の樣に申しても、中々氣强い義親樣。母樣仕樣はない事か」と、いへば點く涙聲、「そんなら白狀ない時は、けふ限に首討てとや。ハア夫はひよんな御評定。さりながら、どうぞ助ける仕樣には、隨分いはせて見る思案。そなたも奥へ」と勸むる所へ、「ヤア〳〵兩人暫く待て」と聲をかけ、西八條より立歸る陸奥冠者爲義は、手に持つ太刀の袋さへ、しんくの紐の解けやらぬ、胸の思ひを押包み、しづ〳〵と座に直り、「ヤア曙、同道せし惟弘は、宿願の旨有りとて、六角堂へ參詣し、跡よりも歸るべし。今日忠盛へ招かれたる仔細外でもなし、義親彌白狀せずんば、コレ此太刀を以て首討つて見せよと有つて、平家の重寶小烏といふ名劍、コレ此如く封を付け、忠盛手づから下されたり。つく〴〵心を察するに、義親は現在の父、我は又子の身として、親を討つは不義不孝、討たねば違勅の科遁れず、忠盛もそこを察し、いはぬ心は此袋、口を緘ぢたる封印、拔さしならぬは院の勅命。ナア曙若倉、われ達もつながる緣、ほどけ兼ねたる爲義が胸中、親を討つて忠義になるか、不孝になるや、是を以て思案をせよ」と、刀かけに直し置き、しを〳〵として爲義は、帳臺深く入り給ふ。跡には親子顔見合せ、ハテどうがなと取つおいつ、詠める刀詮方も、「女の智慧に是がマアア」「母樣さうでござんする、何分にとゝ樣が、お歸りあらば倶々に」「ヲ、夫もさうなれど、思案をせいと言はしやつたが、どうがよかろ」と手を組んで、額によせる皺の上、又もや皺を寄せにけり。若倉も諸共に、打傾いて居たりしが、「申し母樣、とかくは無い、奥へいて、義親樣を責めまして、白狀さへなさるれば、一味でない申譯、立ちさうに存じます」「ヲ、それ〳〵、夫がよかろ。其通りを爲義樣へ申すが、則思案の返事。サア〳〵おぢや」と打連れて、帳臺さして行く跡は、人のとだえを眞黑出立、かたへの井戸から忍びの頭巾、邊を見迴し相圖の笛、呼子のしらせも折義親、差足拔足、竊が耳に吁合

ひ、一卷取出し手に渡し、「夫こそ鹿島三郎より受取つた、諸國の廻文連判狀、甲賀山の陣所の案内も内に有り、季仲へ屆けてくれ。コリヤ將監、汝が忰藏人を味方に付ける手筈は追つて、萬事首尾よく仕果せなば、國大名に取立てるぞ、悦べ〳〵」「コハ有りがたい御仰、甲賀山へ出立も今宵が内、萬事しめし合さん爲、とくより忍んで最前から、樣子は委しく。あの太刀掛にかけたる太刀、忠盛から爲義へ、お前を殺せといふ事迄、コレかう〳〵」と呼けば、恟りしながら立寄つて、袋を取上げ打點き、「中には彌〳〵小烏丸、勅諚と有るからは、何でも大事の預り物、是も次手に持つていけ。紛失の咎にして、爲義めに詰腹切らすはよい氣味〳〵。我も跡より忍び出で、何事も重ねて〳〵」「げに尤」と太刀受取り、「然らば隨分首尾よう」と、しめし合する非道の庭、心おくには聲々に、「義親樣はいづくにぞ」と、尋ねる聲に驚く二人、太刀を大事と緣の下、忍ぶ將監、義親は、狸寐入の空鼾。「コレ〳〵爰に」と妙ども、追々に走り出で、「ナウ藤枝殿、人をねさせぬ報いやら、こちらも滅多に眠たうて、居眠つてゐた内に、よう拔けてお出でたなう。サア〳〵お目をお覺し」と、どらも太鼓も打交に、鳴せば耳に兩手を當て、「ヤレかしましや〳〵、こりや〳〵赦せ」と逃げ出せば、「又もや奥で寐ようでな」何國までもとどら太鼓、かやせ〳〵と畫狐、「だまされさんすな槇野殿」化されたとは白書院、襖の内へと追うて行く。

庭には將監しすまし顔、太刀を提げ一卷を、大事と見やる石垣の、水ぬき門の穴かしこ、人はしら洲に身拵。夫と見付ける若倉が、ひらりと飛びおり聲をかけ、「太刀を奪ふは何者ぞ。やらぬ〳〵」とむしやぶり付く。物をも言はず振りほどき、行かんとするを待て〳〵と、留めるをかはし當身を入れ、ばつたり轉ぶを見向もせず、うまし〳〵と四つ這に、はふ〳〵くどる土龍、體はふとく出兼ぬる間に、むつくと起き立ち若倉が、長押の手鑓追取りのべ、「曲者待て」と突き留めたり。ウンと叫ぶは塀の外、戻りかゝつて大宅惟弘、目覺つよき太刀袋、一卷口に盍つく竊。内には仕留むる聲高々、「小烏の御太刀を、奪取つたる盜賊を、若倉が突留めたり。出合ひ給へ」と呼はる隙、外には首をかき落し、袋も一つに引かゝへ、裏門口へと走り行く。何事かはと冠者爲義、曙諸共義親も、緣先に踊り出で、「盜賊はいづくにをる。太刀を奪うたは何者ぞ」と、仰天顔に驚けば、「則ち爰に」と引入るゝ、竊が死骸は、「コリヤどうして、太刀も首も」と驚く若倉、爲義は諸手を組み、ぐつともいはぬ心の工夫。曙親子は顔と顔、惘れ果てたる其中に、義親一人が打點き、「盜賊は突留めしが、奪はれた太刀、ドレどこに、小烏は忠盛が重寶、其太刀が無いからは、預つて來た爲義、言譯には痛い腹、切らねばなるまい。笑止や」と、何がなぬする口車、横に押すとは見て取る老女、「コレ義親殿、小

烏にもせよ其太刀を、爲義殿が預つてござつたを、いつ此方は見やしやつたぞ。サア何を證據に痛い腹とは、よう言はしやつたなう。こなたは〳〵。コレ、大惡人のこなたの首討てと有る勅諚、討たねば勅諚に背くといひ、討つて渡せば不義不孝。親のこなたを討ち兼ねて、此ばばや娘に太刀を預け、よい思案してくれと、賴んでござつたはいなう。まだ年がいかいでも、親子の道を辨へて、切り兼ねでござる爲義樣。夫に何ぢや腹切れとは、胴欲な、よういはれた事。其五音で盜人も、大方に知れて有るはいの」「ムン盜人が知れたとは、扨は若倉われぢやよな」「ヱヽィ、此若倉が盜んだとは」「ハテ盜人たけ〴〵しい。太刀を奪ひし盜賊を突留めた若倉、なぜ太刀は取返さぬ。サア其太刀、ドレ見よう。ハヽヽ。其死骸はわが舅將監國貞。嫁のわれと點き合ひ、盜んだに極つた」「ヱヽィ、そんなら此死骸は、舅御將監樣でござんすか」と、又恂りの若倉が、軀に立寄り見廻せども、「見知つたお首が無いからは」と、騷ぐ娘に驚く母、義親が獨笑、「コリヤどこへとばしりがかゝらうも知れぬ〳〵。若倉何と云譯有るか」「サア夫は」「サア何と」「すりやどうでも此死骸は」「ヲヽ將監に極つた。云譯立たぬと容赦はない。われから先へ」と立上る。「ヤア義親殿まづ待たれよ。盜賊爰に」と一間より、歩み出づるは大宅四郎惟弘、小脇に抱へし挾箱、眞中にどつかとおろし、「娘若倉に詮議はない。曙も控へて居やれ」と押直り、「ナニなう爲義公、今日と申し胸中嘸ぞと察し申した。追つて御安堵させ申さん」と、挨拶のべて惟弘は、義親に打向ひ、「イヤハヤ盜人たけ〴〵しいと、出はうだいに云ひさがし、身の科を人にぬる盜賊の正體、お目にかけう」と蓋押開き、上に竝べる太刀袋、一卷を哺へたる甲頭巾の首諸共、見るよりぎつくり義親が、胸に覺えもさあらぬ顏。惟弘騷がず、「ヤイ娘、此首の實檢で、盜賊でない明を立てよ」と詞の下、頭巾を取つて見る顏は、「ホンニこりや將監樣ぢや」「ドレ誠に將監殿。どうしてこなたの手に入りし」と、惘れる曙若倉が、「將監樣と知らなんだは、忍び姿の黑裝束、お首はとゝ樣お前の手に」「ヲヽサ〳〵。西八條より歸る道、爲義公に引別れ、六角堂へ參詣し、裏門通りを歸る時、水門を出る其將監。スハ曲者ぞと見る內に、見しり有る太刀袋、一卷を口に哺へ、逃げ出づる時も時、內の騷動そちが聲、何の苦もなく首かき切り、立歸つて能く見れば、姫の將監國貞。なむ三寶、日頃の積惡、斯く有らんは合點ながら、若しも此太刀餘人の手に渡りなば、ノウ爲義公」「げにも〳〵、此爲義が難儀の難儀重なるべきに、能き折に歸り合ひ、再び手に入る嬉しさ」と、父義親を尻目にかけてのたまへば、善惡正しき惟弘が、「ヤコレ義親殿、こなたはモウ目が覺めましたか、眠たうはござらぬか。大きな目玉をぎろつかし、一はな立つてさゝいこさい、盜賊の手引したは、彌〳〵こなたに極つた」

「ム、何と、此義親が手引とは」「イヤあらがふまい。證據といふは其死骸、將監とは又何を印においやつた」「サア夫は」「夫はとは。ハ、、、、。あのごとく眞黑出立、現在の嫁でさへ見違へた將監、首もなく印もないあの骸、將監ぢやと見知つた此方、手引といふに相違は有るまい。サア〳〵何と」と、一句の理詰にさしもの義親、コリヤたまらぬと逃げ行く首筋引戻し、老の手先も忠義に強き、用意の早繩ぐう〳〵と、しめ上げ〳〵どつかと引すゑ、「人に惡事をぬすり付け、身を遁れんとは卑怯者、科極つた大罪人。刑罰は爲義公、もはや猶豫に及ばず」と、太刀の袋を指出せば、爲義取つて封引き切り、鯉口拔きかけとつくと見、「いかに惟弘、季仲が在家の白狀、問落せしか何と〳〵」「さん候、斯くまで仕込んだ極惡人、問狀までも候はず。此一卷を御覽有れ」と、刀の笄拔持つて、口をこぢ明けこぢ放し、「連判狀に候」と、渡せば義親、「ヤア夫を」と、立寄る繩付惟弘が、「どつこい、どこい」と引居ゆる。其間に爲義押開き、一々とつくと讀下す廻文狀、「何々、叛逆の張本、太宰帥、季仲が在城甲賀山」と讀終り打點き、「ホヽ出かした〳〵。此廻文手に入るこそ、武運を開く瑞相ぞ」と、卷納め懷中し、「ヤア〳〵惟弘、勅諚の上預る小烏、義親の刑伐は其方に任すぞ」と、太刀を投遣りつゝ立上り、勇み進んで入り給ふ。「コレ〳〵申し」と惟弘が、續いて入らんも仔細は知らず、親子三人顏見合せ、とかう思案に落ちざりしが、心をしづめ、「ナウ曙、爲義公へ渡せしは、謀叛徒黨の連叛狀、敵のありかも明白に現はして有る上は、白狀も同じ廻文。義親白狀有る時は、斷罪にも及ばぬ筈。夫に今此太刀を渡し、惟弘に任すとは、ハテ心得ず」と眉に皺、じろりとしたる義親の、顏をつく〴〵曙が、「コレこなたに一味の將監國貞、惡の報いは目の前に、娘や夫が手にかけたも、天道樣が手引して、御成敗も同じ事。聟藏人も內證から、どうぞこなたを助けうと、若倉をおこされた志。ナウ娘」「アイ、成程さうでござんする。どうしてなりとお命が助けたさ、心を碎く我々より、とゝ樣もかゝ樣も、是程にまでとやかくと、心盡は何故ぞ。ちつとは心を改めて、善心に成つて下さりませ。申し〳〵」と取りすがり、鬼に敎化をするごとく、恨みつ泣いつ親と子が、涙に誠を顯はせり。惟弘瞼を數たゝき、「曙、娘、何にもいふな、悔むな〳〵、此上ながらへ置くならば、まだどの樣な不覺を取り、家の滅亡計りがたし。爲義公の仰に任せ、斷罪は只今ぞ」と、太刀取直し拔放せば、眞劍ならぬ木刀なり。是は〳〵と惟弘が、暫し詞もなかりしが、やゝ有つて打點き、「ハツァ誠や忠盛公、心を籠めし此小烏、義親白狀召されなば、助けよとの志添し」と押戴き、押直つて袂より、包みし物を取出し、「女房、娘、此內をよく〳〵見よ」と指寄すれば、あいと取上げあけほのが、つく〴〵みつの引肴、是はあられもアラふしぎと、娘も俱にいぶか

る内、諸肌ひん脱ぎ我と我が、指添腹に突込んだり。是はと妻子が右左、「情なや」「何故に」と、すがり嘆くを押退け突退け、一息ほつとつきあへず、「ソレ其肴は鶴の庖丁、まつかくせよと忠盛公の判じ物。けふ八條の館に招かれ酒宴の上、爲義公へ其小烏、眞劍の身を指しかへて、身變といふ木太刀の謎、某へは其肴、三切は則身を切れと有る御賜、戴いて歸る道、日比信ずる救世菩薩、六角堂へ暇を申し、死ぬる覺悟の月も日も、けふを冥途の門出ぞや。ナウ義親公、若倉もまだ未生以前の事なれば、是までいはぬ物語、爲義公にも帳臺にて、此身の懺悔を聞いてたべ。某武士の家に生れながら、若年の比はたゞ、劍を見る事かへふつ叶はず、其比度々の軍中に、鬨を聞く時は、忽正氣を取失ふ大臆病。時しも後三年の戰ひは、武衡家衡兄弟が叛逆を鎭めん爲、八幡太郎義家公、鎭守府の節刀を給はり、奥州に向はせ給ふ。親光任が願ひにより、我も御供申せしが、何をいうても臆病故、手柄は扨置き、何とぞして古郷へ歸らん我がそぶり。義家公御覽じ給ひ、「軍令に背く卑怯者、一矢を古郷の土産にせよ」と、切つて放させ給ふ尊、命からゞ〳〵持つて歸りし恥しさ」「ヲヽ、それ〳〵、思ひ出せば早昔、壺井の御所には剛臆の座を定められ、景政の高名、兼杖介兼秩父の妻女、剛の座竝の羨しく、來る日も〳〵此曙は、臆病の座に付いて、袂で顔を押包み、父平太夫國妙殿と、泣かぬ日とてはなかつたはいな

う」「其時給はる烏羽の、ヲヽ、夫よ、氷といふ字の謎も解け、鬼切丸の御太刀を、持參せよとの御内通、我が臆病の其元は、母人の御不便餘り、麝の肝の祕符の業。其云譯に母人は、其座で自害のいたはしさ。夫より心も剛と成り、鬼切丸を携へて、又奥刄に馳向ひ、君の不例も忽に、安々敵を討ち隨へ、めでたく凱陣ましませし」と、語るも聞くもめざましょ。「ナウ義親殿、其時の勳功に、藁の上から預りし此惟弘、麒麟も老いの手業にて、引かれぬ弓を腰に張り、矢よりも早く立つ月日、いつの間に其樣な惡人に育てたと、思へば此身の科ぞかし。我が臆病の其昔、今切る樣に其時に、腹切つて死んだらば、こなたの樣な胴欲な顔も見まい。さりながら、臣下は主を諫めて死す、御先祖へ申譯の此生害、又一つには忠盛の、三切の謎をといたりと、こなたを助くる此身がはり。娘よ必ず藏人へ、此由とくと云ひ傳へ、見捨てられぬ樣にせい。心にかゝるはそちが身と、義親殿の成行が、迷ひに成るは」とどうと伏し、痛手の齡喰ひしばる、血汐の涙ぞやるせなき。夫の歎に曙は、「自とても此上に、ながらへて何とせう、俱に冥土の供せん」と、刀取る手を若倉が、「ナウコレ夫は」とすがり付き、なだめるも又涙なる。「ヤア〳〵聊爾めさるな」と、進藏人かけ入つて、漸〳〵刀もぎ放し、「コハ舅殿、早生害召されしな。主君忠盛には、法皇頭痛の御惱によつて只今院參。申付けたる其趣、忠節あつき惟弘、忠盛が胸中は能く察すべし、

叛逆に一味の義親、白狀に及び及ばずとも、惟弘忠死を遂ぐる上は、義親の罪一等を宥め、出雲國へ流罪との院宣なり」と、高らかに呼はる内、早舁き入るゝあやしの張輿緣先に扣ゆれば、惟弘は只嬉しげに、「死ぬる今はの際までも、心にかゝるは義親の、行方いかにと案ぜしに、よくも計らひ給はるものかな。それ〳〵早く用意を」と、いふに義親轉倒敗亡目を覺し、「何々、此義親を流罪とは、ハァしたり〳〵」と身を悔み、「何事も叶はぬよな。ハァ、さうぢや〳〵。惟弘が腹切つたは、おれを助けう爲で有つたか。コリヤ今まで世話に成つた上、命を捨てて夫程に、思うてたもる夫婦の衆、嘸や腹が立つたで有らう、堪忍してたもこらへてたも。モウ流されて行くからは、又對面は未來で逢はう。さらば〳〵」としをるれば、「ナウ和子、こなたは心が直つたか、善心にならしやつたか。嬉しや〳〵。ナウ〳〵曙聞きやつたか」「アイ聞きました〳〵」「其善心を今一時、早う直して下さつたら、ナウ娘」「アイ、とゝ樣の切腹も、どちらぞ遲いか早いかで、長い別れに成りました」と母と娘は手を取合ひ、わつと一度に聲立てて、歎きは盡きぬ涙なり。俱に心も藏人が、袂をしぼり居たりしが、傍をきつと、見付ける生首、「ヤァ親人將監殿、是はいかに」と驚く藏人、若倉が立寄つて、「夫には段々申譯」「アゝこりや〳〵娘、其云譯は此親に任せよ」と、藏人が傍近くにじり出でて息をつぎ、「ソレ其ごとく形をやつし、小

烏を奪ひ、逃出づる折も折、夫とは思はず首かき切り、頭巾を取れば姫殿。廻文の連判まで、我手に入るも天道自然。身も此通り腹切れば、敵討は五分々々。藏人了簡しておくりやれ」「ハァ、何が扨、年來諫言申しても、用ひない父が一徹。日頃を思へば惡事の報い、何か遺恨を殘すべき」と口は立派に云ひながら、色目に出さぬ武士の、心を計りて惟弘が、「ヲゝ、愁傷は尤なり。分けて大事は此小烏」と、袋に納め紐引しめ、「忠盛公の志、謎をといたる此切腹、疎ならぬ平家の重寶、戻し申す」と手に渡せば、藏人取つて「實尤。今日は先主人が名代」斯くては果てじと立寄りて、義親の繩ときほどき、「イザ〳〵輿へ」と勸むるにぞ、しをれながらも立上り、用意の輿に乘り移る時こそ有れ、館の外面に鬨、貝鐘の音かまびすく、殿中響くばかりなり。竝居る人々大きに驚き、「思寄なや、コハいかに」と、見やる襖をさつと開き、陸奥冠者爲義公、緋縅のもえ立つ鎧、龍頭の金兜、虎の革の尻鞘太刀、采配取つて立ち給へば、數多の軍兵家の旗、白月毛の駒引立て、御出陣と呼はり〳〵、廣庭に込入つたり。爲義辭まず馬引寄せ、ゆらりと跨り、「ヤァ〳〵惟弘、汝が與へし一卷に、敵地の案内くはしく知る。季仲が立籠る、城は江州甲賀山。是より直に馳向ひ、一戰に切靡け、法皇の宸襟を休んぜんは、此爲義が一擧に在り。御邊が忠死に義親の、御身の上も安堵せり。八幡殿より二代の家督、陸奥冠者爲義が此出立、未

來の土産に臨終せよ」と、諫め給へる骨柄は、適ゆゝしく見えにけり。皆々勇む其中に、手負の惟弘這寄つて、義親の誠繩、疵の口にしつかと卷き、「ホヽウ適大將武者ぶりや。悅ばし悅し。御先祖太郎義家公、奥州へ進發に、父光任が見送りし、例を我も見覺えたり。イデ門出を祝はん」と、扇追取り押披き、「けふ出陣の御大將爲義公、抑十歳の初陣には、栗栖山に打向ひ、南都の衆徒の大勢を、終に攻伏せ追返し、花々しき御凱陣、君も御感の勸賞には、陸奥冠者を下されたり。扨季仲が要害は、甲賀山の嶮岨と聞く。前後の隊伍能く守り、弓矢持楯廻りをかこひ、山かげ谷かげ森の内、むら〳〵鳥の立つ時は、伏勢有としろしめせ。扨陣取の第一は、風雲龍虎の習有り。春は霞夏は雲、籏と見まがふ山城の、麓の岡に屯して、深田を前に後は山、秋は田の面或時は、水鳥なんどのかけ引有り。軍は奇正を先として、敵の不意を打つ事は、只夜軍にしくはなし。六韜七書の教には、萬卒を憐みて、下知に應ずる其時は、たとへ小勢の味方なりとも、勝利を得る事疑なし。委しく申すは恐有り、八幡殿の軍略を、胸に覺えの爲義公、頓てめでたく凱陣を、待つといふ惟弘は、かゝる痛手の今はの時、君の長生末遠き、門出を見るが見納めか」と、苦痛をこたへ氣は張弓、やたけ心の爲義も、鎧の袖にもる涙、あやしの輿に義親も、別れを惜しむ涙の袖。若倉は將監が、首をかゝへて泣く〳〵も、有りし次第をつど〳〵に、夫に見せて泣きわぶる。「コリヤ〳〵娘、此親が切腹で、仇も恨も嫗どし」「實も〳〵」と藏人が、早追ひ立てていづもの國、船場へ送る警固の役、馬上は勇む出陣に、駒を早める鞭障泥、ぽんぱかしつたん丁〳〵、蹴上ぐる鐙くり返す、冥土の門出と惟弘が見送り、見返る名將勇士、中に立ちたる曙が、此世あの世へ別れ際、悅び有り、悲しみ有り、六つの巷や六條の、館に哀を殘しけり。

第三

熊野路は、海と山とを引受けて、漁夫は鯛釣る鰹つる、杣は樵りてたつぎとも、五穀なければ春秋の、花や菓の畑主、庄屋組中が誘合ひ、都の使者の御出と、ゆふ暮時の鬧しさ、袴羽織のかた短、地に鼻付けて待つ所へ、早御入と披露させ、備前守忠盛の執權進藏人家貞、旅の用意の挾箱家來引連れ歩み寄り、「いかに方々承はれ。此度白川の法皇頭痛の惱頻によつて、豫々當山權現へ御祈り有る所に、或夜ふしぎの御靈夢、此谷陰に年ふる柳の大木有り、其柳を以て棟とし、三十三間の御堂、都に建立有るならば、病平癒有るべしとの告に任せ、其柳を求めん爲、遙遙と參著せり。方々に案内させ、今明日に穿ち取り、都に送らん其爲なり。急ぎ案内仕れ」と、事の次第を述べにけり。皆々はつと手をつかへ、「是は〳〵、何事かと存じました。成程お尋ね

なされます其柳は、此先の谷間にござります。ナウ茂六」「いかにも〳〵、何かいとも知れぬ大きな柳、三十三間の棟には慥々。したがあの柳は何年ほどいか古い木にて、主が有るの化けるのと申す噂がござります」「ヲ、夫々、あの木をお伐りなさるゝには、よつ程しゆらいがかゝりませう。今明日には何として〳〵」「ヲ、成程、左程の大木輙くは切取りがたし。併し今いふ通り天子の御用、袖人歩日雇なんど、一山に觸をなし、手柄次第に人を寄せよ。いか程なりとも價に構ふな。夫とも農業拝の妨にならぬ樣。勅願によつて一字の棟に成る大木、人歩に怪我過のなき樣、隨分いたはり心を付けよ。いざ我も見分せん、案内頼む」と和らかに役儀に誇らぬ藏人が、仁義を兼ねし詞なり。庄屋組中口々に、「ア、有りがたい御仰、かやうな事も所の賑ひ、隨分と精出して、大勢人を掛けませう。まづ御案内申さん」と、庄屋を先に藏人は、柳が元へ急ぎ行く。跡には組中畑主、「サア〳〵何でも急な御用筋、かけ廻つて呼集めう。達者にさへ有らうなら、錢金の摑取」「ホンニ角力取の入舟へも知らしてやりや。袖へは茂六、人歩へは此才兵衛が觸れませう。ヤレせはしや」とゆふ暮過、立別れてぞ急ぎ行く。爰に出雲の流人源義親が郎等、鹿島二郎義連は、謀叛に合體してけるが、荷擔の人數をかたらうて、軍用金をしこだめる、此山奥に身を隱し、夜は山賊の山道を、のつか〳〵と歩み出で、「エ、今夜は何ぢややらそぶ付いて、素手ばかり引いてゐる。まん直しに一ぶく」と、火燧こつちり三服つぎ、きせるくはへて寐腹這ひ、人まつ蔭に小提燈、「くるぞ〳〵」と咽ずんばい、上足打つて待つ所へ、來かゝる男が頰かぶり、行き過ぐを、「コリヤ〳〵待て〳〵、其火を借らう」と聲かくれば、立戻り透し見て、「何ぢや火をかせ。コレたばこの火ならならぬ〳〵。くはへぎせるは堅い御法度、火を借す事はマアならぬ」「ハヽヽヽ、そりや町中の事ぢやはい。此山中で何用心。小言いはずとかさいでな。云ひかけた無心、此儘でもおかれぬ。火が成らざ脫ぎおれやい」「ム、脫げとは何を」「ハテ知れた事、とつとと脫げやい」「ハア扨は聞及んだ岩淵とやらいふ剝ぢやよな」「ヲヨう知つて居るなア」「ヲ、知らいぢや、此邊で噂の有る追剝、仕舞うてやらうと思うたが、今夜は大事の公用で、柳を切る人歩にいく、こんど逢うたら覺悟をせい」と、いかんとするを、「コリヤ待て〳〵。われはよつ程骨が有るはい。われが樣な丈夫な者は、幾人でも手下に付けたいのぢや」と、云ひつゝ寄つて帶をぐる〳〵眞裸。「テモよい褌してゐるなア、夫もおこせ」と手を出せば、「ア、これ〳〵、おれや入舟風之助というて、小角力も捻る者ぢや、此褌はおれがもとで、やる事はマア成るまい」「ム、何ぢや、見事捻るか、面白い。力の有る者は望む所、力だめしぢや、何と一番出かけぬかい」「ヲ、角力なら好ぢや。何時でも相手に成るが、見事取るか」「ヲ、サ、

角力は知らねど押す」と、ひやうまづいたる懐手、「ヲ、おれも前髪は有るけれど、白山新三を見事投げた。此寒いに裸に成つての一番勝負、賭どくの約束せう」「ヲ、われが勝つたら其褌を褒美にやるは」「ヲ、合點ぢや」としことん〳〵。「西は岩淵々々、東は入舟々々、名乗は濟んだ」と居合腰。やつとかゝれば岩淵が、ひよろ付く足元踏み留り、「まだぢや〳〵」「ヲ、合點ぢや」と砂をもみ手に打拂ひ、ヤァ〳〵と手合して、どつこい〳〵と聲かけ合ひ、はねつ飛しつ四ッ手に入り、むさう返し腰もぢり、相手はぬからぬそれ者の手取、四郎は無法の力足、透せば付入り得手に入り、押してくる身を肩すかし、コリヤ〳〵〳〵あしに廻つてはね付くれば、岩淵胴骨打付けられ、起きも上らぬ高うめき。「ハ、、、、、追剝でも山賊でも、角力取の一徳には、裸に成るとこつちの得物。この花は入舟に下さる」と、著物も帶も引抱へ、跡をも見ずして逃げ歸る。四郎ははふ〳〵起上り、腰をさすつて、「テモ扨も、むごたらしう投げをつた。コリヤ〳〵ばりめ待ちあがれ。今一番取り直せ」と、呼べど叫べど山道の、がつくりそつくりだくぼくの、脚引きずつて追うて行く、跡の山路ぞ物淋し。谷の水、松の風のみ音信れて、深山は猶も冴え返り、餘寒に雪もとけやらぬ、ましてや夜は猿の聲、おほつかなくも呼子鳥、鳴く音しるべにくる人は、横會根平太郎、お柳が情縁ふかく、母諸共に隱れ家も、早五とせと立つ月日、二人が中に設けたる、

緣丸に手を引かれ、鳥目の闇路とぼ〳〵と、かたげし鍬に畚さげて、雪の深山の山畑、岨を傳ひてたどりくる。「コレ〳〵とゝ樣、そちらは谷で危いぞや、こちらがよい」と右左手をひかゆれば、「ヲ、ようういうてくれたなァ。誠や負うた子に教へられ、淺瀬を渡るといふ譬。晝は毎日權現樣へ參る道、夜はかいもく盲目同然。モウ月は出やしやつたか」「イエ〳〵やつぱり暗いはいの」「ヲ、幸ひ」と、畚をおろして鍬取りのべ、畑の畦を爰やそこ、片手に探り手にさはる、蕪の畑土大根、取つては入れつ鍬入れて、盗みとりめの闇なれば、「緣よ、そこに居るかよ」と、いうては探る雪分ける、草の匂ひに夫ぞとて、畚に入れたる獨活山葵、夜は人目もあらく吹く、松の葉越に出る月は、廿日亥中の雲晴れて、山の端白く澄みのぼる。「坊よ、誰も來やせぬか」と尋ねればかぶりふり、「イエ〳〵誰も來やしませぬ」「ヲ、よい〳〵、誰ぞ見るなら知らせよ」と、問うては探る畦々に、月はさせども知らぬは父、「緣よ〳〵、どこにゐる。人はこぬか、見やせぬか。見るならちやつと知らせいよ」「アイ、あれ〳〵見てぢやはいの」「ヤァ〳〵誰が」「イヤ誰でもない、お月樣が見てぢやぞや」「ヤァ〳〵〳〵何といふ、お月樣が、ドレ〳〵〳〵」と鍬を杖、ふりあふぬけど眞の闇。「ソレ上から見てぢや」と指をさす、我子が詞は正直の、頭の上に大盤石、大地にどうと平太郎、我身を打伏せ〳〵て、「ハァ〳〵〳〵勿體なや恐ろしや。天道樣

御赦されませ〳〵、赦させ給へ」と伏拜み〳〵、目にもる涙を打拂ひ、「貧苦にせまり粮につき、纔の畔の作り物、農業の脂を盗む、天の冥罰立所に、稚子が詞を以て、天道より我を禁しめ給ふかと、今身に犇と思ひ知る。ハツアさうぢや、天に錄なき人は生ぜず、地に根なき草ははえぬといふは、天地自然の道理なり。周の代には虞芮の民、畔を讓ると聞くものを。あさましの身の成る果。昔は北面に仕へし武士、横曾根次官光當が躬、弓矢は誰におとらねども、時世につれて心まで、深山烏か苔猿の、餌に苦しむ世渡りは、是が次官が子や孫の、成行なるかと抱き寄せ、聲も忍びのむせび泣、子は辨へも「ナウとゝ様、何悲しうて泣かしやるぞ。おれもどうやら悲しい」と、膝にもたれて歎きしは、物の哀の至極なり。漸〳〵心取直し、一ハア、誤つたり我ながら、盗み取つたる畚の内、此儘に捨置かば、枯凋れんも無益なり。翌は幸ひ、佛の忌日、持つて歸つて備へんもの。願望だに成就致さば、十增倍にてお戻し申す。赦させ給へ」と押戴き、鍬をさぐりて指通し、水母に海老の道しるべ、「緣よ手を引け、歸らん」と、元來し道へさしかゝる、後へ戻る和田四郎、夫と窺ひ指足拔足、「畑盗人見付けた」と呼はる一聲恟りに、かたげし鍬を投捨てて、我子大事とかき抱き、こけつ轉びつ逃げ歸る。「ハ、、、、、よい氣味な。おどしてやつたりや恟りして、鍬を捨てて逃げをつた。エ、殘り多い、ひつ捕へて眞裸、剝ぎむくつてこまそもの。今夜は宵から出かけが惡い、是なと德にしてこませ」と、畚をかけたる鍬の柄を、臑に引かけ、「テモ扨も、鍬をかたげて手を放した、譬を見た」と打笑ひ、かたげてこそは三重歸りける。補陀洛の、岸を南にみ熊野の、九里八町の川端に、里離なる一つ家は、横曾根平太郎當吉が侘住居、老母に仕へる暇には、日毎に三所權現へ、歩を運ぶ留主の宿、妻のお柳は獨子を、生し育てて五とせの、春の半も冴え返り、深山の雪に降る雨の、しよぼ〳〵髪に櫛入れて、撫でつさすりつ愛盛、「コレ緣丸、じつとして結はしやいの。そしてとゝ様の迎ひに、坂口までいておぢや」と、いひ聞かすれば、「アイ〳〵〳〵、あのばゝ様のいはしやるには、けふは佛様の日ぢや、山へいたら花を折つてこいというてで有つた」「ヲ、夫も怪我せぬ様にいておぢや」と手を放すれば飛んでおり、「アレ又雪が降つて來た」蓑よ鎌よと取集め、笠もちよつぽり愛らしく、「雪やこんこん霰やこんこ、溜れや小雪」走りごくらに出でて行く。「コレ〳〵〳〵又とばついてこきやんなや」と、立つて見送くる門口へ、先走が聲として、「都のお使者御出なり」と呼はらせ、進藏人家貞、禮儀正しく入り來れば、老母も奥より立出でて、嫁のお柳も諸共に、手をつき敬ひ饗せば、威儀を繕ひ上座につき、「此度當所へ立越えしは、忝くも白川の法皇の勅命、謹しんで能く聞かれよ。過ぎつる年、法皇當山權現へ參籠の折から、反逆徒黨の族、還御の道を遮る所に、

お柳とやらん、女ながらもかひ〴〵しく、御危難を救はれし段、甚叡感、早速御褒美の使者參るべきに、法皇御不例によつて斯まで延引。それ〳〵」と詞の内、はつと家來が臺の物、二人が前に竝べさせ、「輕少には候へども、忠盛よりの志、頂戴有つて然るべし」と、慇懃にこそ述べにける。お柳は會釋も年だけに、老母は膝を摺寄せて、見れば黄金の一包、「是は〳〵冥加もない、かゝる山家の埴生へ、お使者のお入り下さるとは、所の聞え、ナウ嫁女、是はそなたへ下され物、お受申す覺が有るか」「サレバイナ、とんと忘れてをりましたが、思へば五年跡の事、平太郎殿と夫婦に成つた其時しも、さのみ手柄といふ樣な、覺とてはなけれども、上々樣の危き所を、倶々にお見つぎ申したばかりに、御褒美とは冥加ない。殊に夫も留守といひ、イヤもうやつぱり此お金は」「チ、それ〳〵、受けましたも同然」と、母諸共に押戻す。藏人大きに感じ入り、「扨てかゝる山中は、無骨とばかり存じたが、都に恥ぢぬ爪はづれ、老母といひ御子息の心底まで、嘸有らんと奥床し。我等進藏人家貞とて、忠盛が家臣、萬事心おかるゝな」と、世に賴もしき詞の内、老母も扨はと手を打つて、「成程都で聞及んだ、忠盛卿の御家臣とや。絶えて久しき都の噂、思ひ出すも涙の種、わらはが夫は横會根次官光當とて、北面を勤めし武士にて候ひしが、同じ北面の武士武者所時澄といふ者と、弓矢の論の遺恨にて、夫の次官を時澄が、討つて立退き月も日も、けふが即十七年の祥月命日。其時は平太郎も幼少にありし故、母が故郷常陸の國へ身退き、五年以前願望の仔細に依て、此所へ引越して、是なるお柳を嫁に取り、綠丸と申して一人の孫を設けしが、ナウ申し、其時澄こそ怦が爲には親の敵、討つに心はおくれねども、若し返り討に討たれなば、年寄つた此母、路頭に立つが悲しいと、仇に暮すも孝行故。此年月の憂き艱難、御推量下され」と、涙ながらの物語、藏人横手を丁ど打ち、「ハツア扨々始より由有る人とは存ぜしが、いかにも聞及びし横會根次官光當殿の妻子にて候な。某とても此外に、法皇の院宣を蒙り、次の宿まで參つたり。所用終らば都に歸り、忠盛へも委しく語り、お爲惡しうは計らふまじ。必時節を待ち給へ」と、聞くより老母も打笑みて、「世に有りがたいお詞や。シテ院宣のお使に、次の宿までお出とは、いか樣な儀でござります」「サレバ〳〵、右申した白川の法皇 御不例と申すは頭痛の病、一天の主でさへ、かゝる御惱は遁れ給はず、諸山の祈和丹の典藥、いかな驗も見えざりしが、ある夜熊野大權現、三夜に續くふしぎの靈夢、法皇の前生を告げ給はく、先生は蓮花王坊と云ひし修驗者にて、三熊野に歩を運び、つひに當山に入つて身まかりたる、修驗道の奇特によつて、今日白川の法皇と生れます處、前生の其髑髏、柳の木の梢に留る、夫故頭痛の御惱頻なれば、其髑髏を尋ね求め、王城の東におい

て、三十三間の堂を建て、一宇の下に彼髑髏、納置くものならば、忽平癒有るべしとの夢の告。さるによつて次の宿なる柳を切り、堂の棟に寄附せらるべき院宣なり」と語るにぞ、「扨は左樣で候か」と、黠く母に驚くお柳、「スリャあの柳を切崩して」「サレバ〳〵、普天の下王土にあらぬ所もなし。今日中に切取らん其爲に、多くの人歩をかけ置きたり。平太郎殿には又重ねて」と、立上りしが以前の黄金、再び取るもいかゞぞと、見やる向ふの佛壇に、竝ぶ位牌に手向の露、いはぬ色なる捧物、「さらば〳〵」と禮儀をのべ、供人引具し急ぎ行く、「扨々やさしき武士や」と、老母が見送る門の口、とつかは戻る綠丸、「コレばゝ樣、とゝ樣もモウ爰ぢや。コレ花折つて來ました」と、渡せば取つて、「ドレ〳〵〳〵、祖父樣へ進ぜうぞ」と、悅ぶ母に勇まぬお柳、「オオそなたは何とぞしたかいの。俄に聲の色も惡う、目には涙が」「ア、いえ〳〵、どつこも惡うはござりませぬ」と、目を押拭ひ、「綠、戻りやつたか、つめたかろ〳〵。ドレ足洗うてやろぞや」と、圍爐裏の鑵子水いらず、母は佛間へ、親と子が、盥引寄せ取々に、樗折りくべしゐろりの傍、添乳ながらの肱枕、したしむ中ぞわりなけれ。扨も横曾根平太郎當吉、弓矢の業も隱れ笠、蓑には孫晨が藁を結び、老いたる母に孝の道、憂きを深山の苔筵、雪を凌いで立かへる。お柳はそれと見るよりも、「アレとゝ樣が戻らんした。コレ綠丸、モウ乳を放しやいの」と、いへど寐付のすや〳〵鼾。母は聞付け立出でて、「オ、お柳よいはいの、よう溫めてやらしやれ」と、いひつゝ庭に、「ヤレ〳〵〳〵、けふは雪やら霙やら、嘸や足が草臥れう。幸ひ盥も爰に有る、ドレ足洗うておませう」と、湯を汲入るれば、「ア、申し〳〵、わつけもない。私が洗ひます、お前はゐろりへ」「ア、いや〳〵、此母が達者なりや、折には代つて參るけれど、山坂があぶないとて、厭うてたもる孝行。殊に權現樣の誓には、一度參詣する者には、證誠殿の階を下り給ひ、三度禮をなさるげな。年月歩を運びやつたれば、權現樣のお足を洗ふも同じ事。ナウさうぢやないかいの」と、母の詞も理の當然、「是は〳〵、左樣おつしやれば、御意を背くも却て不孝、然らば御免下され」と、差出す足を洗ふ内、表に立つてつく〴〵と、樣子窺ふ和田四郎、鍬にかけたる畚投げ捨て、「平太郎内に居やるか」とずつと這入れど見知らぬ顏。「イヤ氣遣ひな者ぢやない。是の息子は名にうてた孝行者、佛平太郎といふ噂を聞き、おれも親が有る故、孝行の仕樣も見やうし、又女房のお柳は、こゝら一番のてんとれ、あんな美しいげん妻を、抱いて寐るのも孝行の德ぢや。おれも孝行を見習はうと、來て見れば有らう事か、母親に足洗はして、夫でも孝行といふ物かい。見ると聞くとは鶯の嘴、あんまりで臍がくねる。ハヽヽヽ」と高笑ひ、笑ふも構はず平太郎、母の手を取りゐろりの端、「たばこも是に」と押直し、「扨々世に

は物好な人も有るものぢや。イヤもう其日暮しの平太郎、錢金入れては得仕ませぬ、本の足手ばかりの孝行かと存じます」「ハ、、、、、讀めた、夫で今の樣に、足洗はして居たぢやまで。又おれが孝行いうて聞かそか。マア春は乘物で花見、綾や緞子に毛蒲團しかせ、二の繕かの繕かまはこ三つ、夫も骨の立たぬ樣、藥研でおろして進ぜる。何ときつい孝行か」『ハ、、、、、そりやモウ親に窮屈がらせ、困らすといふもの。とかく年寄には何事も、氣儘にさすが孝行。今足を洗をとおつしやる、ハテ勿體ないとは知りながら、そこを戻かはず、云狀に付くのが、孝行で有るまいか』「コリヤ尤。そんなら婆さまが言はれる事、逆樣な事でも、用ゐるが孝行ぢやまで」『ハテ知れた事』「ムゝよいく。コレ婆さま、あのお柳は五年跡から惚れて居る、貰うて下はれ。コレばさま」と、思ひがけなき難題に、三人顏を見合せて、惘れ果てたるばかりなり。「サアどうぢやい。コリヤお柳、物を言はぬかい。返事をせぬかいやい。ア、笑止な、平太郎が首が飛ぶも知れまいぞ」と惡口存外出はうだい。聞き兼て平太郎、「ヤアいはせて置けば樣々の譫言。主有る女房に無體を云ひかけ、某が首が飛ぶとは何が何と」『ムゝ、、ハ、、、、、　コリヤ證據を出して首にするぞよ』「ヲ、夫見よう」「見せいでは」と、門に捨てたる畚提げ、「何と覺が有らうがな」と、放り付けたる畚の中、山葵よ獨活よ土大根、嫁菜が手前母の前、差俯いて平太郎、誤り入つたる風情なり。「ハ、、、、、、天道は正直、此畑主が見るとも知らず、小びつちよと一人連。昨夜ばかりぢや有るまい、年々の取溜、代官へ引ずつて、法に行ふ。サアうせい」と、引立つる手に取付く母、お柳も今さら見すぼらしき、夫婦が心ぞ切なけれ。母は中を押分けて、「マアく待つて下さりませ。常はずんど正道な者、かやうな事仕出したも、露命を繋ぐ粮ではない。あのごとく權現樣を信心して、常燈明の油代にがなせう爲に、ふつとした出來心、暖になつたれば、順禮や道者衆の宿をする故、賄ひも出來まする、何かに不自由な山家住居、何事も年寄つたばゝに免じ、御了簡下されませ」と、手を合せ詫びければ、「サイヤイ、そんな事で有らうと思うた。そんなら了簡してやらうが、お柳を女房におこす氣か」「サアそこでござります、あの樣にまだ乳を放さぬ孫も有り、殊にちつと義理も有れば、どうも此儀は」「ムゝ、夫もならぬか」「サアそこが御了簡。アノ世間には、首代の、イヤ過料のというて、金を出して命を償ふ品も有れど、マアあなたには、そんなさもしい金を取つて、了簡のなんのといふ樣な、お心ではござりますまいけれど、年寄のくどくと、いうて見る樣な物の樣に」と詞のはしく、耳峙てて、「何といふ、首代に金を出すか」「サア過料でどうぞ」と手を摺りて、詫びる傍から平太郎、「申しく、其過料と申して一錢の貯が」「サアよいはいの、此母次第に。ノお柳」「アイ夫々、

ば樣のおつしやる樣に、コレお前には留守の内、都のお人に貰うて置いた心宛』「ハテやかましい。盜みかやきの分際で何の首代。口先でぬつぺりこつぺり。手短にお柳を渡せ」と立寄る足元老母は頓て、備へし包を投出せば、欲にぎろ付く黃金の包、取上げて、「コリヤ金ぢや、しかも黃金十枚とは」始めて驚く平太郎、お柳が呼く勅使の噂、片頰で金を見改め、「とうから出せばよいもの、首代とは不足なれど、是で了簡してこます」と、懷へしつかと納め、「エ、けたいな、えらう腹も減つたれど、次手に了簡してやる」と、邊を見廻しのつさのさ、心殘して立歸る。跡を詠めて三人が、ほつと溜息つく中に、平太郎身を悔み、「非義非道忽に、天道免し給はぬ道理、母人女房面目ない」と、後悔淚の男泣。「ヲ、悔しいは道理々々。さりながら、武士の落目に切取强盜、恥に似て恥ならず、必無念におもやんな。またも神のひかへ綱、そなたの留守に都のお使者、佛に手向けて歸られしが、幸ひそなたの命の代り」「成程々々、只今お柳が物語、拙者も登山の道々、見馴れぬ京家の侍達、大勢の人歩を寄せ、柳の本に足場の拵へ。ヤア何や彼やで忘れてゐた、佛前へのお備は」「ヲ、どれ〳〵お飾りを」と、華足に飾る粟の餅、是も貧女が志、佛間にこそは入りにけり。お柳は添乳を漸と、軒端は雪の風寒く、餘寒を凌ぐゐろりの火、お神酒の餘り燗鍋に、溫め入れてこて〳〵と、盃のせる丸盆も、心有りげに携へ出で、

「ナウ申し平太郎殿、お前が日比の孝行が、神佛へ通ぜし故、思はぬ金を貰ふといひ、災難を遁るゝも、皆信心と孝行の德。あの緣丸も成人して、お前に孝行仕やる樣、あやからせて下さんせーと、盃を指置けば、「是は〳〵改つた事いやる。したがおればかりぢやない、そなたも隨分長生して、孝行にして貰やゝ」と、いへばほろりと淚ぐむ、顏をつくぐ打守り、「是は扨、そなたは何が悲しうて、其目元の其淚は」「ア、いや申し、是見やしやんせ、緣の寐顏の愛らしさ、つい思はずに」「ホンニナウ、たわいもなう寐てゐるは。したが緣ばかりぢやない、おれも山坂をあるいた上、色々と氣を揉んだりや、どうやら迎が來たさうな。ドレ一ッ呑もかい」と、丁ど受けてつつと干し、「コリヤ坊よ、母上のお賴ぢや、とゝが孝行にあやかれ」と、寐顏へちよつと戴かせ、「そなたも一ッ呑みやいなう」「あい」と取上げ押戴き、「ホンニ此樣な、めでたいはかない事が又有らうか」「ヤア〳〵、はかないとは、何がはかない事ぢやいの」「さればでござんす、お前の留守に變つた咄を聞きました」「フンそりやどんな咄ぢや、それ聞かう」「サアまあ、あのあの、エ、つんと、ハテ云ひ兼ねる咄ぢやが」「何ぞ指合な事ぢやないか、母者人は奥になり、何のおれに隱す事。サア早ういやいの」と、いへども夫と云ひ兼ぬる、胸の思ひは目にもるゝ、淚見せじと身を背け、漸〳〵胸を撫でおろし、「アノナ、咄といふは外でもない。アノ谷陰に

生ひ立ちし、梛の一木の其傍に、大木と成つた柳の木と、女夫に成つてゐるといな」「ムウ夫が何とぞしたかいの」「サアまあ譬へていふ時は、梛の木はお前柳は私、かう夫婦に成つて居れば、取りも直さず連理の中、お前に譬へた梛の木は早佛果を得て、今人界に生を受け、又女の柳は今に非情の果を離れず、假に人間に交りて、夫婦妹背のかたらひに、一人の子まで設けしが、國王の御爲に、母の柳は切崩され、消ゆる命は惜まねども、馴染重ねし夫や子に、別るゝ事が悲しうて、此胸を裂く樣な、夫が悲しい〳〵」と、語る聲さへかき曇る。平太郎何の氣も付かず、「夫は笑止な咄ぢやが、そなたは何の構はぬ事、其樣に泣かずともよいはいの」「サア夫でもよう似たお前と私、あの子の寐顔を見るに付け、身につまされて悲しさに」「ハテわつけもない。モウ〳〵そんな咄は置いたがよい、どうやらおれも胸つぼらしい。サアわつさりと、も一つ呑まう、北の方つぎ給へ。酒は愁の玉箒、今の樣な哀な咄は、熊野の浦へさらり〳〵」さいつ押へつ汲みかはす、妻が思ひは露しらぬ、夫は肱を手枕の、うたゝに夢や結ぶらん。妻は傍を立退いて、奥を覗いつ立戻り、おづ〳〵傍へ立ちながら、「コレ〳〵申し我夫」と、いへど寐付の高鼾、風が持てくる斧の音、伐木とう〳〵ちやう〳〵と、木を伐る音やこたへけん、お柳は身節びつくびく、苦しき胸を押へる涙、じつとこらへて立寄れど、得もいはしろの結び松、

我は柳の綠子が、顏を詠めつとつ置いつ、「ハアさうぢや待てしばし、互に顏を見て居ては、中中語るも面映ゆし。必ず夢とおほさずと、白地に聞いてたべ。ナウ我こそ誠は柳の精、雨露の惠に生育ち、かやうに夫婦と成る事も、一方ならぬ因緣ぞや。今餘所事に云ひなした、咄は皆互の身の上、先の生にて誓ひたる、契りを結ばん其爲に、假に女の姿と變じ、柳が本に待受けて、夫婦と成りしも五とせの、春や昔の春の比、季仲が鷹狩に、鷹の足緒のかゝりし時、數多の武士に切崩され、既に枯れなん其時に、お前が一矢の手柄故、鷹を助けて葉柳の、枝に障りも、アレ〳〵〳〵、又もや爰に散りくる葉は、我を迎ひに來るか」と、思へばやる方詮方も、なく〳〵震ふ膝の節、押ししづめ〳〵、「其時の情の恩、送る月日も重りて、柳の花の綠丸、おとなしうなつたれば、乳がなくとも育つべし。成人の後々は、父の弓矢を受傳へ、潔い名を上げてたも。コレ、母は今を限りにて、元の柳に歸るぞや。必草木成佛と、回向を賴む夫よ子よ。離れがたなや悲しや」と、いふ聲さへも忍び泣、忍ぶに餘る身のつらさ。「名殘惜しやいとほしや」と、立つて見居て見聲を上げ、わつとばかりに伏轉ぶ。音に目覺す平太郎、「扨は夢とも現とも、聞きしは誠で有りけるか。何とて難面やるべきぞ」と、抱き留むれば一間より、老母も俱に轉出で、「樣子は聞いたコレお柳、嫁女なう」と呼ぶ聲も、散りくる柳の葉隱れに、形は消

えて失せにけり。そこよ爰よと母と子が、尋ぬる音に綠丸、「かゝ樣何處へいかしやつた」と、父が後に斷廻り、「かゝ樣いなう、かゝ樣なう。ばゝ樣呼んで下され」と、庭におり立ち門に出で、尋ね迷ふを見るつらさ。父も思はず聲を上げ、「綠が母よ、お柳やい」「かゝ樣いなう」『嫁女』と、聲をはかりに慕はれて、又も引かるゝ執著心、形はしをるゝ青柳の、母の姿とみどり丸、「ヤアかゝ樣」と嬉しくも、立寄りすがれば「嫁女か」『女房なるか』と立寄つて、「非情の草木と云ひながら、情有ればこそ是までに、睦じくも馴れなじみ、一人の若を設けし身が、何として振り捨て歸りしぞ。せめては母人を見送るまで、供に介抱してくれよ」と、託ち歎けば漸に、しをるゝ顏をふり上げて、「傳へ聞く、安倍の童子が母上も、丁ど我身と同じ事、一人の子を殘し置き、信田の古巢に歸りしとや。夫は野干の年ふる身、我は元來草木の、歸る古巢の柳は今、伐崩されて枯柳、歸るといふは消ゆる身に、何とて形を殘すべき。白河の法皇の御惱頻とて、都の使來りつゝ、我身を切捨て申すなり。斯くて姿は見えながら、もはや朽木も時を得て、一宇の棟と成る事も、一つは妙なる法の緣、逢ふ事稀に優曇華の、花物いはぬ草も木も、王土に住めば是非もなし。今より佛果の身となるも、夫の先生梛の木の、佛果に連れし緣あれば、情の恩を報ぜん爲、一ッの筐を參らする」と、平太郎が手に渡し、「夫こそはかけまくも、白河の法皇の前生の御頭なり。夫を手柄に御身の上、再び出世をなし給へ。必々緣が事、お賴み申し參らす」と、夫の顏を見ては泣き、若を引寄せ抱きしめ、離れがたなき輪廻の紲、「アレ〳〵風の音に連れ、柳の糸を切拂ふ、斧鉞がちやう〳〵〳〵、谺は爰に玉きはる、時こそ來れいざさらば、さらば〳〵の聲の下、姿は見えずなりにけり。不便や憂きをみどり丸、「かゝ樣は又いなしやつたか、コレかゝ樣」と呼びたけり。かけ出でては、「かゝ樣なう〳〵」と足摺し、辨へしらぬ稚子を、膝に抱きて平太郎、「ナウ母人、我よりは此若が、愛著に引かされて、嘸や名殘の惜しからん。たとへ姿は見えずとも、柳は妻が亡き俤、今一度此緣に見せもし、我も見もしたし。藏人とやらんにも對面せん。母人には此髑髏、佛間へ直し下さるべし」と手に渡し、「サア來よ緣」と手を取れば、「かゝ樣呼びにいくのかや。おりやモウ乳が呑みたいはいなう」『チヽ道理ぢや〳〵、可愛や」と、涙隱して二足三足、深山隱れの山寺に、入相告ぐる鐘の音、數へながらもそろ〳〵と、探る足元見付ける母、「コレ平太郎、そなたは何とぞ仕やつたか」「ハア、いや何とも」『夫でもいかうと〳〵仕やる」「コレばゝ樣、とゝ樣は目が見えぬはいなう」「ヤア〳〵そりやマア何時から」「ハイ、さればでござります、一月餘り、ふと鳥目が發りましたが、斯くと申さば嘸お案じ、お心に障らんかと、女房に云含め、是まではお隱し申したが、昨夜までは女房が

引取つて介抱して、ハア、いや〳〵、お氣遣ひなされますな、ずんどよう見えまする」と、いひつゝ探るを見せまじと、思ふ心ぞ闇のやみ。「コレ〳〵とゝ樣こちらぢや」と、手を引く孫を見る母も、涙隱して跡に付く。「ア、申し〳〵、母樣何にもお構ひなさるゝな。したがおまへ樣も此坊めも、今夜から嘸便りが」「ヲ、そなたは猶の事、おれもがつくり力がない。孝行にしてたもつたお柳、最一度逢ひたい禮も云ひたい。よしなき老の長生して、憂き事を見る悲しや」と、親子手に手を取りかはし、流涕こがれ歎きしは、理とこそ見えにけれ。外は二月の、雪空につれて寒さもいや增る、行燈の火を挑燈に、移し持つたる緣丸、蓑よ笠よと打著せて、「然らば參つてさんじましよ」「ヲ、怪我せぬ樣に、緣よ手を引け」「あい〳〵〳〵」あいろは見えぬ鳥目の父、杖は我子を力草、柳が本へとたどり行く。母は佛間の看經に、家の忌日も嫁が日も、倶に回向の發願以、鉦も幽に六字詰、「南無あみだ佛〳〵〳〵」風も身にしむ黃昏過、心の鬼の和田四郎、晝の衒の兼てより、夜は山賊の大膽不敵、何でも掘り出ししこためんと、大だらさし足窺ひ足、ぎしつく疊の物音に、「誰ぢや〳〵」と聲すれば、「イヤ苦しうない、盜人ぢや」ヤアと恟りしながらも、立出る遠の母、「イヤモウ折角はひらしやつても、見込のない此内、了簡していんで下され」「イヤコリヤばゝ、おれぢや、顏見い」と、頭巾を脫げども、「見知らぬ〳〵」

「ハテ晝きた者ぢやが、見しらぬか」「ムウナニ、晝來たといやるからは、扨は晝のも」「ヲ、畑主というたは嘘ぢや」「アノ、夫は」と驚けば、「へ、、、、、、山家のとろくに似合はぬ、黃金十枚はよい仕物、まだ臍くりが有るであろ、有りたけそこへ浚へ出せ。命は助けてくれうぞ」と、鯉口鳴らしおどしける。「エ、口惜しい。夫と知つたら其時に、やみ〳〵とは遣るまいもの。平太郎は戾らぬか」と、表を詠めつ奧を見つ、心をいらち身をあせる。「エ、直では出しをるまい、搜してくれん」とかけ行くを、そふはさせぬと取付く手先ふり放し、蹴飛し〳〵のつかのか、納戸を引出す古葛籠、あたふた明けて手にあたる、親子が著換に包んだ大小、鮫は鼠がまだ外に、御明上げた釣おまへ、備へし髑髏を見て恟り、どこやらぞゝ髮立退きしが、打點いて、「コリヤばゝよ、葛籠に刀が有るからは、浪人に極つた。あの晒頭は誰が首で、何の爲ぢや、夫ぬかせ」「イヤあれは大事の物〳〵」「ムン其大事がる譯聞かう」「ヲ、あれはの、息子が出世する大事の物じや」「ム、何じや出世する、其出世が猶耳寄。イヤ」應ではぬかすまい、どす開かざなるまい」と、段平引拔き、「サア是ぢやが」と突付ける。「ア、これあぶない〳〵」と、追廻されて踏みはづし、庭へどつさり。「落ちても逃げても問ひ貫く」と、追詰められてかぶり振り、「ヲ、ずだずだに刻まれても、言はぬ〳〵」「ハテしぶといひばり骨、いはせいで置かうか」と、命もあら

縄見付け出し、がんぢがらみにぐるぐる巻、見上げる燈籠の釣縄ほどき、結び付けたる猿縛り。「サア〳〵ぬかせ〳〵、ぬかさぬか」と、いうては引つぱり釣縄に、しめ上げられてかよわき體、次第にしまる縛り縄、血筋赤らむ蔦、桧、命の蔓ぞ危けれ。「ハ、、、、、もがくは〳〵。情の剛い根性から、痛い目を見をるはい。下は滑の溜り池、氷の地獄ぢやサアぬかせ〳〵」と責せつちやう。老母は苦しき聲も出ず、降りくる雪に爭ふ白髪、かもじほどけてばら〳〵ばら、齣にしたふ血の涙、見やる向ふに挑燈は、「なむ三寶、人影ぞ」と、縄を放せば眞倒、水の溜りへおちこちの、むざんなりける次第なり。遉の四郎も狼狽眼、表へ逃げんも一筋道、やり過して行かんずと、庵の庭に身を忍ぶ。斯とは知らぬ平太郎、案内はいつも我門に、常燈明の光さへ、挑燈の火にみどり丸、「コレとゝ様、佛様へとぼした行燈が落ちて有る」「ヤアどれ〳〵」と探寄り、「ホンニこりや落ちて有る。ふしぎ〳〵」と門の口、「母人、申し、漸〳〵今歸りました」「ばゝさん、坊も戻つた」と、いへど答もあら笑止や、門の溜りに水の音。「緣よ、明りで見てくれ」と、詞の内に透し見て、「ヤア、あれ〳〵ばゝ様が池へはめて有るはいの」「ヤア〳〵〳〵」と恟り敗亡、探り尋ぬる手先へ障る縄引寄せ、「誠に母のうめき聲、コリヤ何者が所爲ぞ」と、縄を力に親と子が、漸〳〵にかづき上げ、「コレ〳〵申し母者人」「ばゝ様なう」と撫でさすれど、體は氷と冷え切つたり。「こりや何とせう、どうせう」と、かけ出してはかけ戻り、立つたり居たり氣は半亂、虚空を摑むごとくにて、かけ出れば緣丸、「とゝ様はまつて下さんな」と、すがり歎けば縋りよせ、「エ、〳〵目が明きたい開きたい。とり目は何の因果ぞ」と、母に取付き身をもだえ、聲をはかりに歎きしが、漸〳〵心取直し、「ハツアさうぢや〳〵、水に溺れし體には、藁を燒いて溫むれば、再び息を返すと聞く。それよ〳〵」とてゝ親が、指圖に蓑をかき集め、蠟燭の火を指寄せて、心を焦す、烟さへ、「若しも返らせ給はずば、是が未來の燒香か」と、口に念佛片手には、我身を添へて溫め烏、蠢めく體に立ちかゝり、含みし水を、「ア、いや〳〵、現在の親人に、足ではどうも。さはいへ水を出さずんば、忽苦痛を助ける爲、免させ給へ母人」と、戴きながら、ぐつと踏み出す濁水、手足をあがく其風情、嬉しとばかり耳に口、「母人、申し母者人、平太郎でござります」「ばゝ様なう」と撫で廻し、肌身を添へて呼び生ける、心が心に通じけん、苦しき息をほつとつき、「平太郎か遲かつた。緣はどこに」と探る手に、「申し〳〵、お心が付きましたか。コリヤマア何奴が此所爲、名はお聞きなされぬか」「ヲ、何者とは、畫來た奴が」「何とおつしやる、畫の奴とは。ム、扨は術で有つたか。モウ〳〵よい〳〵、お氣を慥にナ申し、緣も傍にをりまする」「ヲ、二人のまめなが嬉しい〳〵。孫が顔ももう見えぬ。平太郎

さらば。孫よ〳〵、さらば」とばかり此世の名殘、其儘息は絶えにけり。「ハァ御臨終か、南無あみだ〳〵。緣よ可愛や、モウばゝ樣も死なしやつた」と、大聲上げて取亂せば、緣もおろおろ立騒ぎ、「ばゝ樣いなう、ばゝ樣」と、空しき體に打ちもたれ、辨へなみだ、親と子が心ぞ、思ひやられたり。樣子をとつくと和田四郎、後に立つてせゝら笑ひ、「ハ、、、、、ばゝめはくたばる、爺めは眼がつぶれたな」と、聲を聞くより平太郎、「さういふは畫うせた衒よな。へゝ、有りがたい忝い、母人が是討てと有る手引なるか。緣よとゝに引添うて、サァ〳〵こい」と身繕ふ。「コリャやい、あの晒頭は大事の物ぢや、われに出世さすとぬかした故、おれが出世をせうと思ひ、樣子をとへどぬかさぬから、あのざまにしてこました。うぬも小忰が不便なら、有りやうにサァぬかしあがれ」「何とぬかす。うぬ畫の金に味を得て、ようも〳〵母人まで、胴欲な目に逢はしたなァ。緣よ刀を取つてくる、此手を引け」と行く先に、立ちはだかつて、「動くまい、其大小は引つさらへ、爰におれが持つてるる。是が欲しいか、ほしくばサァぬかせ。ぬかさゞ是ぢや」と引拔く大だら、突付け〳〵閃めく刃先、目前は見えぬ眞の闇。「怖い〳〵」と緣丸、刀に恐れ逃廻るを、引摑んで小脇に抱へ、「此小びつちよからさいなもか、但しはぬかすか、サァ何と」と、人質取つたる手詰と手詰。「とゝ樣怖い」と悲しむ聲、我身にこたへ肝先へ、突通さるゝ思ひ子が、命大事と手を合せ、「聊爾せまいぞコレ申し」「そんならぬかすか、いやなら突こか、刳ろか」「サァ〳〵申し、どうぞ忰を」「イヤならぬ。助けてほしくば早ういへ」「サァ申します」「サァぬかせ」「ヱヽ、〳〵目が明きたい、目が明けてほしいなァ。南無權現樣。お柳やい」「とゝ樣なう」と泣く緣。「おとぼね立てると串刺ぢや」と、鋒指付け「サァ〳〵〳〵。どうぢや〳〵」とせちがうたり。叶はぬ所と平太郎、「申し〳〵、忰はどうぞ助けてたべ。何を隱さうあの御頭は、白河の法皇の髑髏にて、渡らせ給ふ」と皆までいはさず、「モウよいは、つい一口にいはるゝ事を、よつ程儕もしぶとい奴、ソリヤ餓鬼めをこます」と投げやれば、親子が嬉しさすがり寄り、溜息ほつとつく空に、烏の羽音二聲三聲、雲間をさして飛んで行く。其隙に和田四郎、髑髏を小脇にしたり顔、「白狀をひろいだ褒美、是を食へ」と切り付くる。かい沈んで身をかはし、利腕摑めば、「コリヤどうぢや、うぬが眼はいつの間に」「ヲヽ、開いた段か、蟻の這ふまで見えるはやい」「そんなら生けては」「合點ぢや」と、はずみを打つて引かたげ、池の深みへ頭轉倒、直に刀を脇ばさみ、尻引からげつゝ立つたり。「とゝ樣強う成つたの」と、いき〳〵悅ぶ緣丸。「コリヤ〳〵坊よ、大切な此髑髏、大事にせよ」と、しつかと渡す後の方、されども我武者の和田四郎、這ひよつて又一打、「まつかせ」受けたろ鍬のほろ。「かう目が明けば百人

力、山賊ふぜいの儕等に、刀を當てるは刃の穢、うぬに似合うた鍬の刃先、老母が敵觀念せい」と、打つてかゝるをはつしと受け、「ヤア身を山賊とは片腹いたし。源義親公に譜代の家臣、鹿島三郎義連、此程までは都に在りしが、季仲の謀反に組し、軍用金を集めん爲、山賊夜盜は假の渡世、和田四郎が手にかゝると思ふな、源氏の武士が鋒に、苔猿めらが命の宿がへ、一々そつ首竝べん」と、廣言たかゞ〳〵付け入るさそく。こなたも弓矢は手練の若者、受けつ流しつ切結ぶ、鎬を削る吹雪の空、霙交りの雨の足、踏みすべれば踏み留り、組んづ轉んづ挑みける。平太郎は多年の誠、神や力を添へぬらん、切伏せ〳〵乘つかゝり、「緣が爲にも當座の敵」と、指添渡せば拔き持つて、こゝをちよつりかしこをはつり、松の木丸太の手斧打、大の男をへつり切。「よいは〳〵」とてゝ親が、とゞめをぐつと指通し、「嬉しや敵は討つたり」と、死骸を池へ踏落し、悅ひ勇む親と子が、暫しは息をつぎゐたる。既に更闌け靜まりて、影か有らぬか緣が母、「ナウ平太郎殿、今母上の御最期に、苦痛有りしは先生の、業苦を見せしめ給ふなり。御身多年の孝行と、信心の功德により、月日の兩眼明らかに、敵を討ち給ひしも、大權現の神勅なり。此事疑ひ有るならば、肌の守を見よ〳〵」と、いふ聲ばかり聞ゆるにぞ、「實々ふしぎは我兩眼、いまだ八聲の鷄よりも、烏の鳴く音を聞きしより、ふつと目の内涼しくて、眼前敵を討つたるも、偏に神の加護なるか」と、懷中の守より、牛王取り出し能く見れば、數多の烏のかげもなく、「扨こそ大靈權現の、不思議を見せしめ給ふか」と、肝に銘ずる折もこそ、又も羽音は悅び烏、飛連れ〳〵、目下開きし紙は忽に、元の牛王と成りにける。かゝる奇瑞をみ熊野の、牛王の威德末の世に、門戸に押して盜人を、防ぐ守ぞ有りがたき。早東雲の街道筋、木遣はやして地車の、轟く音ぞ勇ましや。「和歌の浦には名所がござる、一に權現二に玉津島、三にさがり松四に鹽釜よ。ヨイ〳〵ヨイ〳〵〳〵、アリヤ、コリヤ、よいとな」揃のゆかた染頭巾、件の柳を引きおろし、修羅にかけ手木にかけ、漸〳〵爰に來りしが、俄に車地に据り、ゑいや聲して人歩ども、入舟が木遣でも、後へはすさり一寸も、先へ行かぬぞ不思議なる。警固の武士進藏人、心に點き、「思ひ當る事こそ有れ、急くな〳〵」と制する所へ、身拵して平太郎、緣を連れて出で迎ひ、仔細は夜前の對面に、老母が身の上有增語り、「扨こそ此木の動かぬは、目前親子恩愛の、別れを惜しむと覺えたり。妻が靈をもいさめる爲、何とぞ網を此忰に、引かさせて給はらば、有りがたからん」と願ふにぞ、「實尤の御賴、何か違背候はん。左樣ならば此柳、新宮の濱前まで、後は海手を流さん」と、錦の袋を手に渡し、「御頭を是に包まれて、平太郎殿は一子を連れ、後より上り給へかし。我は先立ち法皇へ、此趣を奏聞せば、御身の願ひ立所に、

横曾根の家を引起し、父の敵時澄、折を以て某が、宜しう手引仕らん。一刻も濱邊まで、イザ御用意」と勸むれば、「殘る方なき御懇情、忝し」と一禮のべ、「用意とても此儘」と、緣諸共立ちかゝり、木やり音頭は父が役、かざす扇もしをれ聲、「むざんなるかな稚き者は、母の柳を都へ送る、元は熊野の柳の露に、育て上げたる其緣子が、ヨイ〳〵ヨイ〳〵〳〵、アリヤ、コリヤ」「こりやおれがかゝ樣か」と、綱引捨ててわつと泣き。「最一度乳は呑まれぬか」と、縋り歎けばてゝ親は、涙に聲もかれ柳、枝に流るゝ血汐の涙。是や目前哀別離苦、動くも不思議はゝきどの、草木心有ればこそ、引けばひかるゝ恩愛の、孫よ〳〵とゆうべまで、いとしがつたる老母さへ、今は子知らず親知らず、道の街に葬らんと、かき抱きたる孝の道、忠義に厚き藏人が、諫めて歸る都の土產、梛と柳と契りたる、連理返りや楊枝村、女夫坂とて今も猶、いひ傳へたる物語、憂きをみ山や三熊野の、柳の棟の由來は實、此因緣と知られたり。

第四　道行親子の友鴉

爰に哀をとどめしは、緣丸が父上なり。妻にも憂きをみ熊野の、谷の柳のいとし子を、後に殘して消え失せし、母の柳も今ははや、都の方へ引く牛の、棟となるも法皇の、詞も重き親と子か、御頭を包みさし荷ふ、肩と肩とに置く霜の、白き髑髏を道連に、母の棟の後慕ひ、都の空へと思ひ立つ、心の内ぞ物憂けれ。比は如月末つかた、まだ山々に消え殘る、雪はあれども母と呼び、妻とも呼んで青柳の、枝葉も倶にちり〴〵の、今は筐の緣丸、思ひ出しては立ちどまる、住家を後に紀の路の海も、はてなし坂の松檜、杉の木立にむら烏、かはい〳〵と鳴く聲も、我が哀を友泣に、すゝめ伴ふ稚子が、石を拾うて石なご礫、打つや現かうつとりと、父は歎に氣も閉ぢて、そゞろ心のけら〳〵笑ひ。されども髑髏は大事ぞと、かたに引かけ先に立ち、「都へ還御の御幸道、御先を拂ふ警固の武士、横曾根次官が一子平太郎が御供申す。車は我が肩車。ハヽヽヽヽ、思ひ出でたり、漢王は李夫人の別を悲み、甘泉殿の夜の床、夫人の姿を、畫にうつし、九花帳の内にして、反魂香を炷き給ふ、其俤は有りながら、物を言はねば笑ひもせず。ましてや我も其の如く、妻は非情の柳の精、あゝ心なやつれなや」と、往來の袖にすがり付き、憂き事の數々を見給へや人々。春は梢の花とのみ、心を寄せて短夜の時鳥、雪見草淺澤の杜若、あやめ卯の葉も枯れ失せて、螢もうすく、かちこ顏なる我が涙、落葉時雨に濡れ初めて、我ながら恥かしや。百夜千夜のなじみかや、谷の柳の年ふりて、まして雪霜厭ひなく、一夜を待たで消え失せし、妻故に物狂ひ、あなたへ走りこなたへ走り、「アレ〳〵〳〵妻は爰に」と指

させば、俱にすがりて綠丸、「かゝ樣戻つて下されなう。コレかゝ樣」と聲立てて、呼べど叫べど其かひも、なびく梢は吹き亂れ、物もいはね根の苔むしろ、木の根を枕に親と子が、疲れ臥すこそ哀なれ。實恩愛に、ひかれくる、母が姿は幻に、「ヲ、道理なりさりながら、さほど心を亂されては、綠も何となるべきぞ。最早心を取直し、とく〳〵都へ入り給へ、道の案內」とゆふしでの、神隱れして失せにけり。親子はふつと目を覺し、ふしぎと見れど俤は、草葉に殘る露ばかり、夢か現かいつの間に安部野の道も遠里や、小野の古跡も早過ぎて、難波の春邊あたたかに、野もせ堤にさいたづま、未央柳の綠丸、さきに立ちては打まねく。跡には父が呼ぶこ鳥、空には越に歸る鴈、今ぞ都の雲に入る。鳥羽の近道はゝきどの、見えつ隱れつ敎へ行く、人こそ知らね神垣の、大內山にぞ三重著きにけれ。人はいざ、苦は色かへぬ松原を、引きもちぎらぬ物詣、六角堂の御緣日、往來の人を拂はせて、進藏人家貞、跡に續くは橫會根平太郎當吉、綠丸諸共に、昔に返る花の袖、肩衣袴大小も、さすが內裏の北面に、仕へし父が本領に、今日安堵の參內遂げ、打連れ歸るぞゆゝしけれ。「ナウ藏人殿、法皇の御頭は先立て差上げ、卅三間堂の棟上も、早明日と承る。某も熊野にて別れたる老母が追福、昨日までに明け候へば、不淨を拂ひ服を改め參內し、橫會根の家を起すべきとの綸旨頂戴仕り、以前の武士に返る事、偏に

貴邊のお取成。是より普請の場に立越え、忠盛卿へも今日の首尾、申上げなば嘸御安堵。此上ながら一ッの願ひは、父が敵武者所時澄、年來の鬱憤散ずる時節と存ずれば、此の儀も宜しう御斗ひ下されよ」と、賴めば藏人打點き、其儀も主人忠盛へ、達て願ひ候所、右三十三間堂御普請の其間は、法皇始め奉り、忠盛も、精進潔齋、其上に非常の大赦を行はれ、罪有る者の命まで御赦免有るも、彼の堂事故なく成就あらせんとの結構。何事も落去の後、此藏人が指圖して、御本望は受合ひ申す」と、事を分けたる家貞が、詞を聞いて「實尤。何かの事はともかくも、貴邊の心に任する」と、互の挨拶退屈して、「コレとゝ樣、かゝ樣の柳の木に逢はさうといはしやつた、こんな美しいべゝ著たのを、かゝ樣に早う見せたい」と、悅ぶ顏を見る父は、胸までぐつとせく涙。心を計る藏人家貞、「ヲ、しほらしや健氣にも、出世の身を悅んで、見せたいとは自然の孝行。則柳の枝を以て、一千一體の佛像を刻まれ、彼堂に納め給ふ大願、枯れたる木にも花咲くとはかやうの道理。ヤア何かいふ間に時移る、いざ同道」と打連れて、急ぐ卅三間堂、普請場さして伴ひ行く。跡へしと〳〵四枚肩、揃への看板醫者乘物、人まつ蔭に舁き居ゆれば、町とは見えぬ絹被、妙が付く鋲乘物、是も木蔭に立てさすれば、出迎ふ多熊法眼、こなたは忠盛の御臺所、池殿御前立出で給ひ、「是はく〳〵能い所で逢ひました」「ハッ成程、拙

者も是より直ぐお館へと存ずる所。シテ彼方の様子は」と、小聲になれば、「さればいの、先達ての療治によつて、右の姿に仕課せしが、マア聞いて下さんせ。腹が立たうか立つまいか、忠盛殿の種を孕み、五日跡に輕い産。しかも逞しい男の子、血の上の事なれば、日廻でも出ようか、恟りでも召されうかと思ひの外、常よりは結句氣合もよく、あの手ではいかぬ故、外に仕様が」「ア、成程。又其上は我等が祕方、家の祕藥を一ぷく呑まさばころり山椒、産後の上日まひも見せずついべた〳〵。法眼きつと請合々々。したが大切な藥料、謝禮には金子百兩、御合點か」と、弱身へ付込む欲頬は、疫病神より醜しょ。御臺は點き、「ソリヤ合點、夫に限つた事かいの。自が胸のほむら、イヤアノ癪さへ直る事ならば」と、邊の人目を憚りて、夫といはねど呑込む法眼、「然らば明日お見廻申す」「そんなら必待ちまする。幸ひ明日は御堂の棟上、忠盛様の留守の内」「サア夫も合點。今日は六角堂の緣日、隨分匕の廻る様、參詣致す。シテあなたにはお下向か」と、目と目でたくま法眼は、乘物釣らせ別れ行く。跡を見送る池殿の、心はしらぬ妙の、衣江は中にもべれんそう、「此間は祇園女御のお安い産のお禮參り、淸水から六角堂、御深切な御臺様、夜晝お伽のお氣ばらし。ナウおらん殿、ちとおひろひもよかろぞや」「ヲヽそれそれ、片詰つた屋敷を出て、町々を歩いたりや、厚鬢男をたんと見て、目の正月をしたはいの」

「イヤ厚鬢より惣髮の法眼殿、此おいやは氣に入つた　苦味の走つたあの顏が、癪にはずんど妙樂やら、御臺様の相醫者ぢや」と、様子しら齒が追蹤口。池殿も打笑み給ひ、「いか様、心を晴す爲にそろ〳〵歩をひろはん」と、のたまふ折から向ふより、雙紙の鑓に蘭草履、ふりかたげたる一文奴、子供童に囃されて、「彌正平〳〵、京の町の彌正平。振つたる鑓は何々、羽熊鎌鑓大鳥毛、小鳥毛。花の國入しつかとせい。合點だ〳〵まつかせろ。文の取りやり、拔いたりさいたりせまいか。晩の泊は呑んだりはつたりしてこめさ。是も戀路の手管鑓。サア〳〵鑓はお望次第、持鑓だて鑓むしやくしや鑓、やりばなしは家の藝。臺笠立笠雁がさまで、振り分けて、御覽に入れる。鑓先達者女中の氏神、見てやりなされ」と出はうだい、口合交りの前口上、物見だけい妙婢、「アレ申し評判の彌正平奴、御臺様へのお慰、所望々々」と立ちかゝれば、おつと心得たんぽの底、口を叩いてうかれ歌、「振れ〳〵ふり込めさ、ふり込め〳〵さ、お先を拂うてあれはさ、アリヤンリヤリヤ、コリヤンリヤリヤ、いてさヨイ、行列揃へてぼつ立てろ。行くもヤレサテ、通ふも忍ぶも亂れ、風が吹くやら、追風が、連れて〳〵サツサ、縫ふてふのサツサ、我里の花の詠めん、投げかけゆりかけ、しとゝんとん〳〵しとゝん〳〵、しだれ柳のソレしだれ黑じゆすの帶、ゑいやらさらさ〳〵。とゝんととん〳〵とう參ろ。投げかけゆりかけ、しとゝん〳〵とん

しとゝん、ソレ〳〵、しだれ柳のしだれ黒じゆすの帶、きりゝとしやんと〳〵、結びしめたる。ヤレ扨ナ、花は九重、櫻しなゞ〳〵、彼岸櫻や糸櫻、君は楊貴妃塩釜普賢ぞ虎の尾桐が谷、ふけんぞとらのを桐が谷、吉野初瀬の花の盛ェ。アレアレ〳〵あのお供の擔げた御長なぎなたは誰が御長なぎなたぞ。あれこそ姫の御長なぎなた、草履取には可介可内出來助出來平、草履賣るのは此彌正平、彌正平〳〵、花見辨當丈夫なかどうぢや、そこに油斷は少しもござらぬ、行列崩すなとお先の女中、被衣姿でしやな〳〵〳〵や。お上薗が見ゆる。やは〳〵ござれ、呂白傾城、色の盛りは起請まで書いて、其處に如才は少しもござらぬ、粹なきまりは中居の手管、横に帶してしやな〳〵〳〵や、お上薗が見ゆる、やはやはござれ。賽の河原の地藏尊、櫓の上より駒引寄せ、どんぐわらり、ちやんぐわらりと乘つたるは、めざましかりける次第なり。閻魔大王三途の川を、笠かぶりかたむけて逃げらるゝ。お宿はどこぢや、山の手〳〵。ハツァはいや德利かんなべ地獄世界に著きにける」ヨイヤ〳〵と見物は、拍子に乘つて歸りけり。妙達は口々に、「みだい樣御らうじたか、テモ面白い見物事。ソレ侍衆、お足をたんとお引出に」と、いふに彌正平、「ァ、申し〳〵、お足はきなかも取りませぬ、お足よりはお足にめす蘭草履、御めい〳〵に一足宛、お買ひなされてやは〳〵と、お履きなされて下さるが、代物纔八錢宛」「そんなら求めてやらうか」と、立寄れば、「申し〳〵、六角堂へ大願有る故に、我等が手づから履かして上げるがお觀音への御奉公。マァかう召させますればお女中方には、達者な男を持つが奇妙。たとへ色事でしくじり有つても、第一足の上らぬが佛方便、はくも後生、履かるゝも五障、三從の罪を滅する草履の威德でござりまする」と、いひ並ぶれば「テモ扨も、耳寄な草履ぢやないか。サァ〳〵はかして下されと、脛もあらはに履く足の、白い衣江が尋常さ。次は鍬平おいがや跟、黑う太いはおらん殿。水仕のお龜が足の甲、十文に餘るは中居のお杉、皆夫々に履きかへて、「扨てもしつくり心地よい、豆の痛が直つた」と、笑へばみだいも打笑みて、「是へも持て」と詞の中、「ナイ〳〵〳〵」と蘭草履、「恐ながら」と召しかへさせ、後ずさりしてかつつくばふ。供の侍「夫々」と、價を渡せば、押戴き押戴き、「大勢の附々故、手間入らずに賣切つた。さらば是から一休。ちつとお寄りなされませ、我等が宿は此園、鍋にも釜にもコレ此炮烙一つ、悉皆猫の子同然ぢや。そんだいなんぼ寐とぼけても、途に迷ふ氣遣なし。藁屋の雨は出にや知れぬ、果報は内で一寐入。さらば閉帳」小家の戸に、筵垂れつゝわぶといふ、住家にこそは入りにけれ。こなたもいざと夕日かげ、「男の卒都婆小町ぢや」と、どつと笑うて乘物釣らせ、池殿御前は御歩路、打連れ館に歸らるゝ。天に不

時の風雲有り、人にも不時の煩ひを、心に工夫の多熊法眼、歩より爰に立歸り、乗物先へ舁居ゑさせ、家來を近付け呵けば、畏つて小屋の内、とつくと窺ひ、「成程々々。彌正平が住家と相見え、能くふせつて居りまする」「ム、幸ひ〳〵。ソレ爰へ呼出せ」と、聲より早く立かゝり、「彌正平御用が有る、あれへ出ませい」「出をらう失せい」と引出され、あら立てんも仔細は知らず、只ハッ〳〵と引きずられ目通に蹲り、「御用が有る、罷出ませいとござる故、罷出ましたが、シテ召しまする各様方は」「尋ねて汝が何にする。用が有る、つつと出をらうさ」「ナイ」「夫へ出させい」「ナイ」「いやさ出をらぬか」「ナイ」「早う出ませい〳〵」「ヤイ〳〵、口々にわめいてうろたへさするな、彌正平そこへ出よさ」「ナイ」「呼出すは別儀でない、無心が有る聞いてくれうか」「ハア、見ますればお歴々様、彌正平めに御用とは、先いか様な儀でござりまする」「聞いてくれうか」「身に叶ひました儀でござらば」「聞いてくれうな、ソ、そこへすつと出よ」「ハイソン」と這出づる。ソレと一聲相圖の詞、二人一度に「捕つた」とかゝる。「まつかせ」居ながら膝車、續いてかゝるを小手返し、どつさりころりと打付けたり。四人が互に先手後手、左右にかゝれば身を固め、はつし〳〵と急所の當身、ころ〳〵轉んで「ひい〳〵〳〵」隙かさず法眼腰刀、討つてくる身を拔合せ、受つ拂ひつ上段下段、いらつて掛る多熊が刀、はずみを打つて打落し、切先反らして顆へ、突付け〳〵差付けられ、思はず跡へたぢ〳〵、「待て〳〵」彌正平手際は見えた。刀を引け」「サア」「サア引け」ぢり〳〵すさつて眼を付け、「何意趣有つて此狼藉。身に覺ないからは、どなたでもどいつでも用捨はないぞ」「ホヽウ 適々。其手練を見よう爲、いやはや〳〵驚入つたる今の働。彌正平、無心とは別儀でない、身どもが家來に抱へたい」「何が何と」「イヤサ身は多熊法眼というて、平家の大將忠盛公へ出入る者、此ごとく帶刀致せば、長袖ながら、武士といはんに頭振はふらじ。仔細有つて力量有る者を望む故、只今の狼藉、見所有る汝が手練、彌正平、奉公してくれまいか」「ムン抱へ樣が面白い。成程奉公仕りませう」「してくれうな」「いかにも家來に成りませう」「ホヽ早速の得心滿足々々〳〵。切米は追つての事、當分の拵料、金子十兩認め置いた、汝が手形印形せよ」と投げやれば、押開き讀下し、「其日暮しの一文奴、印形とては持合さず、印は斯く」と指つんざき、しつかと居ゑたる血判見て、「出かした〳〵適氣轉。此上は違變なく彌主從、悅ばしゝ」「ハア、拙者も安堵仕る」と、金子の包を懷へ、「お納めなされ」と落ちたる刀、取つて渡して一同に、鯉口ちやんと納りける。羽繕ひして法眼が、「乘物參れ」と呼はれども、四人殘らず生兵法、彌正平くつ〳〵吹出し、「ハヽヽヽ尻引からげた亡者達、六道の辻で草鞋錢、直切つて居らるゝ最中ぢや。エヽ主人の傍でぞんざい至極。

さらば行儀を直してやろ」と、一人々々に死活の手際、性根付けられむつくく、起きて見合す顔と顔、砂打ちはらふ面目同士、彌正平が名對面、「今日よりも傍輩づから、以後は萬事を引廻し」「成程下拙は入口八兵衛」「身どもは六助」「又内吉平」「互に別懇々々と、挨拶取々乘物へ、多熊はしづくく乘移れば、直ぐに舁出す四枚がた、お草履「任せ」と彌正平が、後に手をふる腰をふる、主をとり毛のふり仕廻、目見えの晴と藺草履、足を揃へて　三重　歸りける。六波羅は、都の巽鹿鳴草、紅葉かつ散る山館、忠盛卿の北の臺、池殿御前の介抱に、祇園女御の御安産、けふ髪垂の規式の中、妙達が取々に、産後の補藥煎じ樣、常にかはりし違例とて、看病等閑なかりけり。「進藏人家貞が女房若倉お見舞」と披露の聲、寢所にかくと傳へてや、池殿御前しとやかに立出で給ひ、「珍らしや若倉、近うく」の御挨拶。ハット手をつき膝摺寄り、「此程はお次までお見舞は申せども、女御樣の御病架へは、あなたより外餘人はお除けなさると聞き、御容體の伺ひも人傳の噂のみ。御前樣にはいかがお氣もせ、御苦勞樣や」と會釋する。「ヲ、夫は奇特やようこそく。したがナウ若倉、尊きも賤しきも、おなかにやゝを娠しては、姫ごぜの身の一大事、何とぞ御産も安かれと、淸水の觀音樣へ祈り申し、御寢所には燈明を掲げ立願せしに、其利生にや其、曉、御産も安うなされし故、ヤレ嬉しやと思ひの外、例ならぬ御難病、人に逢ふを恥ぢ給へば、お伽には自ばかり、妙まで遠ざけて、中々お傍へ寄せ給はねば、折角見舞に上りやつても、よもや逢ひはなされまい。上りやつた樣子は自が云ひませう。大儀にもこそ有れ」と、にべなき仰に猶ずり寄り、「成程御難病の樣子も承はりました。私も數ならねど、お家の執權藏人が女房、何事もお心置なく、御用を勤むるが家老の役。大切な若君樣、御誕生の折から御前樣に成りかはり、産家のお伽何かの事も承はらいでは、夫が手前もいかど。ナ申し、左樣でござりますまいかな」「サア、いやる所は尤なれど、今いうたを何と聞きやる。常體の産家なれば、倶々伽をして貰へど、とかく人に逢ふ事を恥しう思召せば、心を明し合うた自、夫で餘人は一人もお傍へやらぬはいの」「サアそこでござります、お前樣は御本妻、女御樣はお妾、其お妾に御男子ができたれば、どうでも本妻樣が慆氣嫉妬の心が有つて、ひよつと毒藥、サ毒藥などといふ樣な、左樣な事ではござりますまいけれど、世間の口には戸が立てられぬと申せば、お前を惡樣に噂さすも氣の毒、何とぞ今宵は私が代つて」「ム、何といやる、自が慆氣で毒藥をもるとは」「サアお前樣に限つて左樣な事はなけれども、世間の噂には色々と、ない事まで申すがならひ。殊に忠盛樣には法皇樣諸共、三十三間堂御普請の其間は、精進潔齋故、お館へはお入もない筈。多熊法眼といふお手醫者ばかり、是も忍んで參るとの事。さすれば

人が疑ひまするも、尤かと存じますはいな」「サイノ、其法眼は産前産後の名人、手負に譬へし産婦の療治、自が頼んでかけて置いた。夫程に疑はしくば、御寢所へ同道して、女御の姿を直に見せう。今いふ通り、人に逢ふを恥しがり、衣を被いでござるはいの。自も此襠、顔を隱して問ひ音信。そなたも襠をかづいておぢや」「アイ〳〵、然らば左樣」と立ち上れば、池殿御前先に立ち、「ホンニ次手に和子の顔も見せませう。毎夜の夜泣で迷惑をするはいの」「ホンニ左樣に承はりました、いかい御難儀でござりまする」「サア〳〵、お出。コレ〳〵、必ず顔を隱す事忘れまいぞ」と打連れて、寢所にこそは入り給ふ。跡を見送る妓ども、「何とおいや聞きやつたか。御家老のおかもじは又格別、いかな奥樣も理詰には是非がない」「ヲ、夫いの、いかな事覗かしもなされぬ御寢所、難病とは何ぞいの」「ハテ今いうてござつた怪しい影が映るといふは、女御樣のお頭が鹿の首に映つて、股の有る角が兩方へ、かうしやつきりと立つといの。まだ其上に産子の和子、逞しいよい子ぢやが、夜に成るとおぎやア〳〵と泣き續け、あの樣に夜がな夜ぴと泣かしやるのは、犬にならしやる下地ぢや」と、いへばおいやが、「ソリヤなぜに」「ハテ母御樣はあの通り生きながら鹿に成つてござるぢやないか」「ホンニさうぢや」と口々に笑ふ、後へ立出づる、若倉が思案顔、池殿御前も續いて出で、「何と若倉、是まで傍へやらぬ譯、とつくりと見やつたの」「いやモウお道理でござります。したが、今宵のお伽は、此若倉が致しませう」「ムンすりやまだ疑が晴れぬかや」「イ、エ左樣ではござりませぬ」と、云ひつゝ立つてお次に向ひ、「若倉が供の者、其箱持て」と呼ぶ聲に、あいと出でくる妓が、一ツの箱を直し置く。「モウ用はない、歸れ〳〵」と追歸し、ふた押明けて取出すは、ゑぼし狩衣。「是は是、忠盛樣守護の間召されたる裝束、夫藏人を以て仰せ越されし其仔細は、すべて産家に先例有り、男子ならば桑の弓に蓬の矢を刎げ、障碍を拂ふ事故實なり。忠盛樣にも、藏人も法皇樣の守護に參れば、汝かはつて其役を勤めよとの御仰、女ながらも忠盛樣の御名代、今宵の直宿は此裝束。ナア申し、是でもお伽は成るまいか」と、辯舌さつぱり申せしは、實藏人が女房なり。池殿も點き給ひ、「夫の仰と有るからは、何しに違背の有るべきぞ。寢所の次の廊下口、小座敷が直宿の座」「然らば左樣」と狩衣ゑぼし、小太刀も腰に指足の、お次をさして入る折節、「多熊法眼樣御出なり」と取りつがせ、醫術に眼光らす頭殘切髪、頤先へのつか〳〵、進むる席に大あぐら、池殿御前慇懃に、「コレハ〳〵御苦勞樣。ソレ煙草盆お茶上げい」と、饗し有れば多熊法眼、「シテ〳〵女御の御容體、別條は御ざないか」と、眄の挨拶呑込む御臺、「ヤア婢ども、圍の爐に炭ついでおけ。衣江は襁褓の役ではないか。おらんはお乳に氣を付けよ」と、人を除けるは密談と、皆々立つて入りにけり。法

眼邊見廻して、「新參の若黨やい、藥箱是へ〳〵」「ナイ〳〵〳〵」内玄關の切戸の庭へ入來る奴の彌正平が、菖蒲革のぶつさき羽織、仕きせの大小藥研鍔、銀金具の藥箱、緣先にかつゝくばふ。夫とみだいも不審顏、「あの者は、きのふ慥に」「ア、成程〳〵、六角堂にゐた一文奴、中々力量の者なれば、召抱へて斯くの通り。ヤイもう用はない、玄關に扣へておれさ」「ナイ〳〵ナイ」切戸の口に彳めば、「イヤサ密に談ずる仔細有れば、御前にも人を除け召された。用有らばこちから呼ぶ、罷立て〳〵」「ナイ〳〵〳〵」切戸の外へ立出でしが立留り、「アノ御臺樣は、きのふ慥に草履を賣つて覺えた顏。ムヽ〳〵何にもせよ女中ばかりの此館、身が旦那も療治にかこ付け、女性と二人指向ひ、ハヽヽヽ、どうでもコリヤ色事に極つた」と、つぶやき〳〵出でて行く。池殿御前小聲になり、「きのふ途中で申した通り、女御の姿の異形の體、血の上の惚りで、氣を取失ふか、目でも廻かと思ひの外、けふで六日になるけれど、何の驗も見えぬ故、心をせくは外でもない、三十三間堂棟上も早今日、忠盛が歸られて、此事を知らせては、折角仕込んだ心づくしも水の泡、けふの日中に殺す思案、賴んで置いた毒藥は」「シイ、成程〳〵」調合して參つた、則是に」と取り出す包。「此祕藥の奇妙といふは、男に呑ませば目鼻口から血を吐く、女には幸究竟、彼月の不淨のおりる如く、人知れずに命を取る。幸ひ爰に藥の風呂」水の加減も法眼が、手づから仕かける火をおこす、扇の風も六天の、魔風を爰に吹立つる、毒藥とこそ知られたり。法眼が仕濟し顏、「大切な祕藥の料、金子百兩引かへの約束、お渡し有れ」といふ内に、池殿は手箱より包取出し傍に置き、「イヤなう法眼殿、疑ふではなけれども、假初ながら女御の命、生きる死ぬるの大事の場、慥な證據が有るかいの」「エイ何と」「サア忽ち命を取るといふ、慥な事が見たいはいの」「ハテ疑の深いお方、女御の姿をあのごとく、鹿の影に映したも我祕方、眼前慥な證據でないか。煎じかけた此藥、早う呑して」「サア其試が見たいといふ事」「ム、然らば妙どもか」「イヤ〳〵、夫では結句傍輩同士、女御に洩れては猶大事」「ハテどうがな」と法眼が、「ム、夫よ〳〵、新參の若黨め、さうぢや〳〵」と打點き、「彌正平參れ」「ナイナイ〳〵、御用いかど」と蹲る。「呼立すは別儀でない、無心が有る聞いてくれうか」「ハア、こは改つた御詞、無心とはいか樣な儀でごはります」「イヤ外でもない、爰にコレ煎じた藥が有る、汝是を呑んでくれ」「エイ、私めはどこも惡うはござりませぬ」「イヤサ主從と成るからは、主人が用に立てん爲さ」「左樣ではござれども、篤と樣子を聞かない内は、めつたに藥は」「ムン尤」と包みし黃金投げ出し、「夫で呑め」エヽと取上げ、「コリヤ金さうにござります、是で呑めとの仔細はどうでござります」「チ、サ〳〵此藥は家の祕方、汝が如き力量有る者に呑ますれば、

忽に力も落ち、燈心を持つ力もない、又力量なき者が呑めば大力と成るによつて、是なる池殿御前、釼術を好み給へども、高が女性のかよわき體、力量の増す樣にと勸むる藥、試なくては呑むまじと有るによつて、指詰汝へ身が無心、則褒美の金子百兩、汝が力をあなたへ讓る忠義の藥、早く〳〵」と法眼が、僞り飾る詞の端、彌正平も當惑し、「何ぼ左樣御意なされても、能く思うても御らうじませ、生れながらの中風はしらず、男と生れて力がなくては」「サア〳〵そこぢやて、力がなくても其金を、身に付けなば一生は安樂、此法眼藥を盛り、人を助くるが醫者の役、汝が爲に惡い事を勸めうか、ぜひに呑め、早く呑め」「アレまだおつしやる、神佛に手を合せ、息災延命家内案全と祈るは何の爲でござります。我人體を達者にして、子孫の榮を繁ふ身が、何ぼ金がほしいとて、生れも付かぬ頑と成り、骨なしに成る事は、御免々々」と逃出づる。法眼先に飛んでおり、切戸の口に「どこへ〳〵、逃げるとて逃さうか。畏つたと呑めばよし、呑まぬと素頭押へて呑ます。サア〳〵夫でも」と立戻る。此方は御臺が長刀構へ、「呑まずば是に載せうか」と、左右を立切る錠鎖、跡へも先へも彌正平が、地獄落しに合ひたる如く、遁るゝ方もなかりしが、思案極めて、「さうぢや〳〵、成程藥呑みませう、が其藥は、力の落ちるばかりぢや有るまひ、命も落ちるでござりませう」「何と〳〵、扨は樣子を立聞いたな」「ア、いや〳〵、何にも聞きは致さねども、斯く手詰に成るからは、得心でたべませう」「ヲ、出かした、迚も免さぬ儕が命、有りやうは毒藥ぢやはやい」「エイ」「ヲ恟り仕やるは理、コレよう聞いてたも、殺さにやならぬ人が有る故、調へた此毒藥、試にどうぞ呑んでたも、コレ自が賴んだぞや。若しも親兄弟妻や子でも有るならば、死にやつた跡で自が、念比に屆けてやらう。彌正平、そなたの命百兩に買うたぞや。サア早う呑んでたもいの」「アこれ申し、大切な人の命、澤山さうに、雜魚鰯か何ぞの樣に、藥を呑むと忽ち死にます、死んだ骸に千萬兩の金貰うて、何の役に立ちまする。屆けてやらうとおつしやつても親はなし、女房がなければ子は元より。併し兄弟がたつた一人、夫も幼少で別れたれば、顏も知らず有所も知れず、心がかりは夫ばかり。此樣に二本ざしに成つたも、漸ときのふから。すかんぴんな一文奴、面を晒すも命が惜しさでござります。哀不憫と思召し、毒藥を呑む事は、御赦されて下さりませ。見ますれば此樣な、結構な御殿造のお長者樣、申し〳〵」と手を合せ、「旦那樣、法眼樣」と手を摺つて、拜んで廻る男泣、目からこぼるゝあら涙、白洲は蜂の巣をなせり。法眼がむつと顏、「猶豫する程付上る胴張者め。御前には其長刀、生殺しにしてくらはす工面」「ヲ、隙取つては妨ぞ」と、かい込む長刀刃向になし、ひらりと薙ぐればきりりとかはし、「こりやどうでも呑ます所存でござりますな」「おんでもない事、叶はぬ〳〵。大

事を知らせて助けうか」と、打ふる長刀かい摑み、「フ、、、、ハ、、、、美しい器量をして、人を殺す毒藥とは、どうでも是は悋氣の沙汰、聞いた者はおればかり、人が知つたら免さうか」と、いはれて御臺もたまりかね、「モウ遁さぬ」と引たくり、切込む長刀たぐつて取り、石突丁ど急所の當身、御臺は跡へたぢ〳〵、「コハ狼藉」と法眼が、するりと拔いて切りつくる。「まつかせ」沈んで素股させ、同じく石突眞の當、ウンとのつけに反返る、手練の程ぞ心地よき。されども騷がぬ彌正平が、茶碗に茶をうつし入れ、庭に伸つたる法眼が、體へぐつと活を入れ、「コレ〳〵親方氣が付いたか、息つぎに茶を一つ」と、渡せば取つて押戴き、「どなたか是は過分々々〳〵」と、呑込む毒茶息する內、こなたに轉ぶ御臺の傍、脈取つて見つ足の脈、つく〴〵考へ打點き、抱起して死活のさそく、むつくと起きたる池殿御前、落ちたる長刀取直し、「彌正平やらぬ」と討つてくる、刃先を潛つてしつかと取り、「御臺所急くまい〳〵。望の毒藥試見せう」「ムンそりや誰を」「ハテ誰というたらソレ其處に」と、ひやうまづいたる詞の下、法眼が白黑眼。「よつく身どもを當てたよな、イデ毒藥を」と立寄る目先、鍋を突き付けさし付けて、「此中には雫もない」「ヤア無いとはいかに」と惘れる顏、打ながめて高笑ひ、「息次に茶というて、呑したを忘れたか」「ヤア〳〵〳〵、主に毒を呑したとは憎い奴」と、睨んで見てもびくともせず、

「かう成るからは此方から緣切つて、主でない家來でない、證據は爰に、コレきのふ仕た身が證文、當身の間に著服した。ほしくは冥途の土產にせい」と、ずん〳〵に引さき〳〵打付けられ、「重々儕」と立上る、足元ひよろ〳〵臑腰まで、忽ち廻る毒藥の、驗は目口に血を吐いて、七轉八倒のた打つ有樣、己が手盛の鴆毒に、報いの程ぞ醜しょ。池殿御前も醜しながら、心に點く安堵の思ひ。彌正平ずつと立寄つて、とどめをぐつと足の先、落ちたる包を拾ひ上げ、みだいの傍に直し置き、「驚き入つたる毒の試、最早ちつとも氣遣なし。殘つた藥を前じかけ、嫉妬のほむらは只一ぷく、女御の命、ナ」「ム、スリヤ樣子は」「殘らず聞いた、お前の味方、合點か」「ヲ、嬉しい〳〵。そんならやつぱり此金は、毒藥の價の金、彌正平そなたへ褒美にやる」「ハハ、、、、法眼が大欲頰、人に洩すまじと思召さうが、此上に十增倍金の山をつみ、法眼を詮議せば、其金に目がくれ、白狀するは知れた事、そこへ心の付かぬが女性。最前より見屆けた、お前の性根に見所有り、今より彌味方して、本望の後楯、命を的に懸ける仕業、金貰うて何にせう。慮外ながら男でえす、金で賴れる樣な魂でごんせぬ。褒美もいらぬ金もいや、そつちへ取つて置かしやませ」と、口も心もさつぱりと、實一疋の男なり。みだいも力を得給ふ風情、「賴もしょ〳〵、彌賴み賴まるょ、證據が見たい」と詞詰、「ヲ、尤、互に心を合すといふ、印

の金打まつかう」と、刀するりと抜き持つて、長刀の刃にちやう〳〵〳〵。「ヲヽ忝い落付きました。かう成る上は何をか包まん、あの祇園女御の身の上、勅諚とはいひながら、妬しい其上に、男子まで出來たれば、彌瞋恚が燃え返る。心をせくは夫の留守、一刻も早う取殺す、思案はかう」と、呼く點く庭の草、露も洩さぬ密事と密事。「若し毒藥で仕損ぜば、彌正平が段平針、肝先へ一思ひ」「成程〳〵、女御が寢所の廊下へは、其切戸より左の方、出合所は築山の、艶の庭」とゆふ暮方、土圭の六つもせはしなく、「必待つぞや」「合點」と、別れてこそは三重艶葉の、風に散りくる色見れば、物思ふ人の胸の火か、焦がれ出づるぞ恐ろしや。瞋恚のほむらいや增しに、消えもやらぬか池殿御前、執念き心穂に出づる、麥藁笠を眉深く、手に持つ油さしそへて、いとど思ひを焦せとや、おどす姿は我獨、外には人もしろ小袖、心の劍とぎ立てて、女御親子を目の前に、取殺さいで置くべきかと、夕闇照す燈籠の、火かげに映す我形、女とも見え又男とも、見えつ隱れつ御寢所の、廊下の庭にをりもよく、誰も木立の築山傳ひ、忍び入るこそ怪しけれ。直宿守る身は油斷なく、始終を窺ふ若倉が、ゑぼし狩衣引きまとひ、心も細太刀脛高く、したひ寄るともしら洲の庭、「曲者やらぬ」と引き留めたり。此方も怒力強氣の姿、寢所をさして行かんとする、猶組み留める後抱、「放せ」「放さじ」蔦かづら、風にもまるゝ風情なり。漸〳〵にふり放し、廊下を目がけ駈出せば、「どつこいどこい」と引戻し、笠かなぐりて顔と顔、「ヤアみだい樣か」「若倉か」「ヱヽお前樣はく〳〵大それた此お姿、今宵は私が直宿と知りつゝ恥ぢもせず、悋氣嫉妬の心から、女御樣のあの樣な、怪しい影も合點がいた。剩さへ親子御共お命を斷たんとは、夫程にまで憎いかえ。夜晝ともした燈明へ、油をつぐのにマア仰山な此出立、おどしの正體見付けたから、此水瓶の油さし、こつちへおこし」と取らんとする。「イヤイヤく〳〵渡さじ」と、隱す袂は蝶の羽か、取らんとすがる狩衣の、袖は牡丹の花競べ、互にせり合ふ其内に、ばつたり落ちたる水瓶の、油は殘らずなむ三寶。「モウ赦さぬ」と隱せし刃、「若倉やらぬ」と切付けたり。心得受けたも鞘ながら、打てば拂ひ、なぐれば受ける、後妻打、あしらひ兼ねたる刀の鞘、打つは鐵杖劍の笞、二ッの鍔音ちりりん〳〵、悋氣かうじて茜さす、顔の照葉や紅白粉、亂るゝかもじ髻の香の、梅花にあらぬ紅葉の庭、二疋連れたる獅子奮迅、花踏みちらす如くにて、疼まず去らず打ちあふ刃音、行くも止めるも姫ごぜどし、支へるこなたは弱弓の、おくれて跡へたぢ〳〵〳〵。「コレ〳〵〳〵御臺樣、此裝束は忠盛樣のゑぼし狩衣、夫に敵たふ心ぢやな」「ヲヽ夫忠盛殿、女御に我を見かへしつらさ。女御が無くばと思ふより、瞋恚の燃ゆる度々に、胸が裂ける腹が立つ。そこ退け若倉、退くまいか」「イヱ〳〵〳〵、かやう

な事もあらんかと、忠盛樣の仰を受け、直宿申す此若倉、微塵も爰は動かぬ〳〵」「ヲヽ動かずばまつかう」と、又切付くるを受留むる、鞘は碎けて飛びちつたり。「申し〳〵、お主に手向ひせぬ印、今まで鞘であしらうた、私が心を推量し、本心に成つてたべ。頼み上げます御臺樣」「イヤ〳〵〳〵意見立聞かぬ〳〵」とゆふ暮暗き嫉妬の念、こなたは止める忠義の道、果しなければ聲を上げ、「彌正平はいづくに在る、出合へ〳〵」の聲の下、「まつかせ是に」と走り出で、支へる若倉かい摑み、二三間投退けたり。「サア〳〵邪魔は拂うた」と、いふより早く刀追取り、みだいの脇腹ぐつと一突。わつとばかりに玉ぎりながら、「取違へたか狼狽へたか、自を何故に」と、苦しみ給ふを耳にもかけず、ゑぐれば傍に若倉が、「思ひがけなき此有樣、彌正平とは何者で、みだいを手込になしけるぞ」と、いぶかるも又道理なる。「ホ若倉殿の御不審尤。我身の上を一々次第、語つて聞けんよく聞け」と、手負を突きやりどつかと坐し、「コリヤ池殿、味方顔した此彌正平は、現在そちが兄ぢやはやい。ホヽ恂りは理、元來某は南部春日の社人、三笠兵衞宗久が躬。親にて候ふ宗久、妹が生立、器量も勝れて見えながら一つの疵は右の足、裏にあり〳〵鱗の痣。元來父は神職なれば、未然を察する妹が生立、父母一所に育てては、必ず親に祟るといふ、詞の内に先立つ母。扨こそと驚きて、捨てねばならぬ品と成る。さはいへ親の不便さ餘り、とても生立つものならば、立身出世の相も有り、都の内に捨てんずと、此王城に來られしが、比は大内節會の夜、御溝水の其邊に、捨歸りしとの物語。此兄も其比は、辨へなければ不便とも、悲しいとも思はざりしが、成人するに從うて、弓馬の道を心がけ、武者修行に家を出で、當夏南都へ歸りしに、何者の所爲にや、父の兵衞を刺殺し、家に預り大事にせし、千年劫ふる白鹿、奪取られしと家來が噂。顔も知らず名も知らず、申譯も立たざれば、三笠の家は沒收に遭ひ、夫より所を立退いて、何卒敵も見出さん。又幼少で別れた妹、存命で居るならば、築地の邊へ捨てたとの、父が詞を思ひ出し、一文奴の鑓振りして、内裏上﨟と見る度に、女草履の突付賣、願望の譯有りとて、拙者が手づから履かせしは、幾千人といふ中に、昨日六角堂の我門前、乘物へ草履を突付け、足の裏を見た時に、扨こそ尋ぬる妹ぢやと、思へど夫と名乘もならず、アヽ儘よ、折もあらんと思ふ中、あの法眼に抱へられしは究竟一、此館へ來て顔見た時、父の最期も語らんと、折を窺ふ無道の法眼、嫉妬の相槌毒藥まで、工の臍をこつちから、味方したはコリヤ妹、とて變もせぬ嫉妬の恨、見遁しならぬ今夜の時宜、ぜひに及ばず此有樣。親には捨てられけふの今、廻り逢うたる兄妹、名乘らぬ先に殺すといふ、是もやつぱり因緣か」と、語る内にも目にたもつ涙ぞ、眞身の印なる。傍に樣子を若倉が、「扨は誠

の妹御か。コレ申し御臺樣、お心はいかゞぞ」と、始の恨今更に、涙もろきは女同士。池殿は苦しさも、血筋の兄の物語、「思ひ合はする事有り」と、若倉が介抱に、漸〳〵と起直り、「扨は誠の兄上かや、自が假の父、大炊三位有敎卿、今はの時の遺言に、内裏に節會の有りし夜、御溝の池の邊にて、拾ひたる其方なれば、所を直に池殿と、付けたりとの物語。誠の父は奈良の里三笠兵衞樣で有つたか。ハア、悲しやコレ兄樣。誠親の敵といふは、此妹でござんすはいなう」「ヤア〳〵〳〵、父兵衞殿は何故に、其方が手にかけしぞ、仔細いかに」とせいたる顏色。「ヲヽ、驚は尤でござんする。樣子語るも恥しながら、自といふ妻有る上、忠盛殿の武勇を感じ、白河法皇より、祇園女御を給はりて、一つ枕の閨の内、始の程は中々に、悋氣妬もなかりしに、二月立ち三月立ち、早五月のいはた帶、自が生得に、常々から物妬、生れつきとは氣も付いて、必ず女の嗜事、思ふまいと思ふ程、いや增しまさる胸のほむら、焚付ける多熊法眼、女御を殺すはよい術、三笠兵衞が預る鹿、千年過ぎた男鹿なれば、其油をしぼり取り、空青石の水を以て、彼が祕方と調合して揭げし燈明、淸水の觀世音を祈ると僞り、夜晝產家に灯せしより、女御の影は忽に、鹿の頭に映りしぞや。まだ其上に產子まで、夜泣の魔も其業かと、悅ぶ此身は欲界の、魔王に等き今此形。源義親が祇園の社へ忍びの姿、遠目に鬼と見えたるよし、忠盛殿の噂にて、聞き覺えたる此出立。實物うしの時まうで、人を呪咀へば身に報う、此苦も覺悟の前。兄上赦して下され」と、有りし次第をつど〳〵に、聞くより彌正平、「コリヤ〳〵妹、其鹿こそ親人が、預り給ふを能く知つて、父を討つたは法眼よな。思はず知らず毒藥で、敵を取つたは父兵衞が、手引なされたものでがな。忝い有りがたい。さりながら、藁の上から捨てられても、やつぱり產の親人に祟をなし、法眼に討たせたる、元は現在我妹。現在兄が手にかけて、妹を討つも因緣づく。毒蛇の鱗の痣有れば、嫉妬の災有るべしと、見付ける親も妹も、因果の因緣なりけり」と、不便さ增る目に涙。若倉も打しをれ、「いかに嫉妬なればとて、親御といひ其身まで、ひよんな最期の此有樣、懺悔に罪を滅すれば、未來は成佛し給へ」と、いへども御臺は、「いや〳〵いや、此身此儘死ぬからは、生きかはり死にかはり、女御親子を取殺し、安穩でおかうか」と、怨念凝つたる其かんばせ、艶をちらすごとくなり。彌正平猶も齒がみをなし、「因果の道理を聞かしても、いまだ發起の心はないか。コリヤ〳〵妹、祇園女御の胎内より、出生の緣子は、白河法皇の、御胤なりと世の風聞。かほどの事を辨へぬも、輪廻に心の暗む故、先立つた親々まで、地獄へ導く不孝者、エヽ、見下げ果てたる其根性、最早此世の暇をくれん」と、突込む刀に手をかけて、互に見合す顏と顏、思へば不便と手もなまり、「一筋な心から、悋氣も出づる嫉妬

も起る、鱗の痣は惡龍が、此世へ生れて妹と成り、人を殺すの呪咀ふのと、目の前鬼を兄弟に、持つたる兄も過去生の、報いか罰か淺ましや」と、人目も恥ぢぬ恩愛の、血筋の涙ぞ道理なる。漸〳〵涙の目を拂ひ、「ハッアさうぢや誤つたり。迚も斯くても助けぬ命、觀念せよ」とふり上ぐる、其手にすがる若倉が、「待つて〳〵」と留むるにぞ、「イヤ〳〵〳〵放されよ」と、爭ひ果しなき所へ、「暫ざふ」と聲をかけ、備前守平忠盛、法皇を供奉し參らせ、悠々然と入り給ひ、「いかに方々承はれ。三十三間堂御棟上の規式より、頭痛の御惱も全快にまします間、恐悅に存じ奉れ。忝くも法皇此館に遷幸なる事、女御の異例產子が夜泣に、叡慮を苦しめ給ふ餘り、我とてもいぶかしく、若倉を直宿にいひ付け、密に歸つて見屆けたり。彌正平が忠節御臺が愚癡、誠や内心夜叉に譬へたる、佛の誡目前なり。迷ひを晴せよ池殿」と、忠盛の詞の内、しづしづと法皇は、寢所の方に入御成り給ひ、うつる障子のうちとけぬ、女御は衣を身に覆ひ、恥しぶりの御風情、「いかにや女御」と召されつゝ、邊輝く燈明に、立寄給ふ法皇の、影はあり〳〵小男鹿の、女御を始めお傍の女中、「こは〳〵ふしぎ」と立寄る忠盛、映る男鹿の影ぼうし、希代なりける妙術やと、在合ふ人々一同に、靭れて詞なかりしが、忠盛騷がず扇を開き、打消す光一時に、像は消えて誰々も、今ぞ不審は晴れにけり。折しもむづかる產子の夜泣、姚達が取

取に、いぶりすかせど彌增すおびえ、法皇御衣に抱上げ、「夜泣すと、たゞもり立てよ綠子は、淸く盛ふる事もこそ有れ」と、一首の御製の奇特にや、夜泣は忽靜まりけり。忠盛ハット恐れ入り、水子を抱へ立上り、「全く君の聖德に、夜泣も納る歌の德、立入り給ふ下の句の、淸く盛の文字を取り、名を淸盛と改めて、忠盛が家督となし、忠孝怠る事なかれ」と、育て上げたる平家の芽出し、大政大臣正一位平朝臣淸盛とて、官職上なき繁昌は、此稚子の生立なり。法皇御感淺からず、「祇園女御が不例といふも、池殿御前が一筋の、道を守る心より、嫉妬の念も理なり。たとへ死すとも彼が名を女御に讓り、祇園女御を今よりは、池殿御前と呼ぶならば、兩人ともに添ふ心、恨を晴れよ池殿」と、いとも賢き勅、皆々アット平伏の、中に忠盛頭を下げ、「世に有りがたき院宣に、何か遺恨の殘るべき。兄弟が亡父は、三笠兵衞宗久とや、彌正平とてもつながる緣、彌〳〵平家に仕ふといふ、心を以て今日より、彌平兵衞宗淸と改名し、淸盛がめのとと成り、池殿と名を殘す女御が傅、心得たるか」「ハ、〳〵〳〵重々厚き御惠、コレ〳〵妹聞いたるか」と、問へばにつこと打笑みて、物いひたげに手を合せ、夕の露と消え果てたり。法皇重ねて、「いかに宗淸、唐土には楚の元王、雲夢の地に獵し給ひ、鹿の塚を築かせて、白鹿庵と號けし例、妹が亡骸は、鹿の油と諸共に、淸水寺の邊りに葬り、鹿間塚と名に呼ば

ば、彌〻成佛得脫せん」と、勅諚有れば悅ぶ宗淸、君も還御の御催し、供奉は忠盛警蹕の、御先を拂ふ武將の役、彌平兵衞宗淸は、妹が亡骸淸水寺へ、送り營む鹿間塚、庭のてり葉もちりぢりに、ちるや紅葉の八重九重、錦をかざる產衣の、祇園女御の名もかへて、爰池殿の六波羅に、育つ水子の夜泣まで、納る歌の御威德、家督の若子を若倉が、抱きかゝへて、ねん〳〵ころろ、いとし殿よ花やろ、花の都の聲に、たゞもり立てよ末の代に、淸く盛ゆる因緣謂は、コレこの〳〵〳〵此若君と、仰がぬ人こそなかりけり。

第五

秦の徐福が口ずさみ、奇異の深山といひ初めて、紀伊と號けし國の中、牟婁の郡の御社、三所權現と崇め奉り、歩を運ぶ靈地なり。白河法皇御參籠の御供には、横曾根平太郎當吉、一子緣丸諸共に、證城殿の階の本、通夜を申しの年籠り、信心深き夜もすがら、眠催す肱枕、夢の告をやまつの戸の、御帳開くと覺しくて、神童顯れ出で給ひ、いとも妙なる御聲を上げ、「いかにや法皇しろし召せ、御身頭風の惱により、三所に歩を運ばれし奇特によつて、告げしらしめたる一字の堂、觀世音の靈地に准へ、卅三間堂落慶に及びしより、病平癒の悅び善哉。平太郎には權現直に御示しあらん」と、のたまふ聲は神勅の、金剛童子の其姿、扉の内に入るよと見えし眠の夢、法皇御目を開き給ひ、正しく病も、いつしかに、御心涼しく見え給へば、平太郎もふしぎの思ひ、信心肝に銘じつゝ、猶神託を待つ所に、異香妙なる御帳の内、權現の御姿コハいかに、け高き僧形忽然と、階三段おり立ち給ひ、「いかに平太郎承はれ、汝孝心淺からず、年比爰に歩を運び、神を敬ふ正直心、渴する者には食をあたへ、田邊の濱の路頭にて、水に溺れ死したる者、其尸を葬り隱し、穢不淨を忌嫌はず、慈悲萬行の施は、則菩薩の行といふ、口に稱名怠らず、不斷念佛する事も、誠の心有る故なり。其恩德を報ぜん」と、忝くも御頭を低れ、三度禮拜なし給へば、平太郎親子は身を打伏し、忝なみだと感涙に、すさつて九拜なしにけり。御佛重ねて宣はく、「我は是本宮の神體、伊弉冊命の垂跡、本地あみだ如來なり。濁世の凡夫を救はん爲、一字の堂の棟とせし、柳は楊柳觀世音、假に化現の像となし、汝が妻女と身を變じ、まうけたる緣丸、彼が成長の時を待ち、惟時人皇八十代、承安三年の比に至らば、月の輪の禪定兼實、六角堂救世菩薩に告子の祈誓を待ち、我其時親羅丸と生出で、念佛の行者と成り、一向專修の眞宗を、普く此土に弘めん時、一子緣丸に名を讓り、平太郎と改名せよ。親羅丸が弟子となし、法號は眞佛房と名を呼んで、國々行脚に召連れて、念佛門を弘めなば、

濁悪愚癡の尼入道、凡俗男女を導きて、一向専修に入れん事、他力本願佛の威力、歸命無量なむ不可思議、稱名をだに悅ばゞ、忽九品蓮臺に、其身其儘坐せん事、何疑ひの有るべきぞ。誠や十劫正覺の、如來の誓願あらたなる、是ぞ佛の六神通、未來は本宮阿彌陀の本地、一子が出世を待つべし」と、のたまふ御聲と諸共に、僧形忽金色身、後光は四十八願の、光を放ち目前に、彌陀の印相お眞向の、尊容あり〳〵拜まれ給ふは、有りがたかりける像なり。法皇始め平太郎親子、佛意に叶ふ有りがた涙、扨こそ時代押移り、月の輪兼實公、六角堂に告子して、誕生ます阿彌陀の化身、一向門徒の御開山、親羅聖人と崇め奉る。末世の衆生を救はせ給ふ、悲願の程ぞ有りがたし。猶も信心いやましに、法皇合掌渴仰有れば、平太郎親子は、同音に、「なむあみだ佛〳〵」六字十字の名號に、現世未來過去遠々、助け給へる報恩講、朝時日中お初夜の勤行、末世に榮える本願寺、あみだの血脈退轉なく、後五百年の末法有緣、草木國土皆成佛、音樂響き花ふりて、和光の神體あり〳〵と、夢か現かしら幣、神は上らせ給ふと見えし、眠の夢は覺めにけり。頭風山平愈寺蓮花王院、卅三間堂事故なく成就し、法事の舞樂と納りて、法皇褥に御安座有れば、院參の公卿達、列を正して伺候有る。法皇夢の心地もさめ、「平太郎はいづくに有る、參れ〳〵」と勅り、はつと答へて横曾根親子、衣紋繕ひ立出でて、御階の本に畏る。法皇御聲さわやかに、「只今眞睡む正夢の、所は熊野證誠殿、汝親子を召連れて、節分の夜の年籠、通夜を申すと見し中に、羨しきは汝等親子、權現直の禮拜は、佛意に叶ふ冥加の我達、取分けて、其子隨分大事に守り立て、成人の後普く一向宗門を弘めんとの神勅。朕も病苦を遁れし悅び、彌〳〵佛心怠るな」と、勅諚有れば、平太郎、「コハふしぎなる御夢かな、某も暫が程、まどろむ中の夢の告、割符を合せし勅、此勅が成長まで、未然を察する御示現。是も偏に權現の、守らせ給ふ有りがたさよ。コリヤ〳〵緣よ、隨分早う大うなれ、平太郎といふ名を讓るぞよ」と、云聞かすれば打點き、「コレとゞ樣、わしも夢を見たはいなう。大きう成つたら、親羅聖人樣とやら、此おれを弟子にして、日本國へ門徒を弘め、念佛を勸むれば、惡人は皆佛に成るげな。南無あみだ佛〳〵」と、いたいけに手を合するもふしぎのふしぎ。法皇始め一座の諸卿、誠に希代の稚子やと、皆感涙を催せり。かゞる折から備前守平忠盛、進藏人引連れて、庭上に頭を下げ、「是なる平太郎當吉、先年親にて候ふ次官光當、北面の武士時澄が、手にかけ討つたる父が敵、何卒御免を蒙り、時澄を討つて父が遺恨を晴さん事、藏人を以て某への願ひ。元來時澄射藝の家に候へば、幸かな此御堂の緣において矢數を射させ、平太郎にも名乘合せ、本意を遂げさせ申し度御願に候ふ」と、奏聞有れば點かせ給ひ、「誠や時